210.46
W99s
(s)
00203132

鎖國

日本の悲劇

和辻哲郎著

CHI·KU

1950

210.ふ46
W99s
(s)

210
236

203132

序

この書は近世初頭における世界の情勢のなかで日本の狀況・境位を考察したものである。著者はその境位の特徴を最も端的に現はすものとして「鎖國」といふ言葉を選んだが、それはこゝでは「國を鎖ざす行動」を意味するのであつて、「鎖ざされた國の狀態」を指すのではない。後者は前者の結果として現はれたものであり、また目下のわが國の情勢を考察するに際して參考となるべき多くの問題を含んでゐるが、しかしそれはまた別の取扱ひを必要とするであらう。

この書の內容をなす個々の事項は、それ〴〵の專門家によつて既に明かにされてゐることのみであつて、何一つ著者が新しく發見したことはない。しかし、それらの數多くの事項をこの書のやうな聯關において統一し概觀するといふことは、恐らく初めての試みであると思ふ。著者は日本倫理思想史を考究するに當つてその種の概觀の必要を痛感し、頻りにさういふ著述を求めたのであつたが、得られなかつた。偶〻戰時中、東京大學文學部の著者の研究室において、「近世」と

いふものを初めから考へなほして見る研究會を組織し、西洋と東洋とに手を分けて、十人ほどの仲間でいろ〳〵とやつて見たとき、著者にほゞ見とほしがついて來たのである。その際西洋の側では山中謙二教授、金子武藏教授、矢嶋羊吉教授、日本の側では古川哲史教授、筧泰彥教授、日本キリシタンについては勝部眞長教授から多くの益を得た。爆擊下の東京において、或は家を燒かれ、或は饑に苦しみながら、この探究の燈を細々ととぼし續けたことに對し、右の同僚諸氏に深く感謝の意を表したい。

本書の前篇の資料として著者が使つたのはたか〴〵 Hakluyt Society の叢書位のものであるが、しかし方面違ひの著者がこの叢書に親しんだといふことには、妙な因緣がある。多分昭和十一二年の頃と思ふが、丸善からアコスタの The Natural and Moral History of the Indies を賣り込みに來た。Edward Grimston の英譯で一六〇四年の刊本である。當時の相場でたしか百圓位であつたと思ふ。しかし一年の圖書費が三百圓ほどに過ぎない研究室としては、この購入は相當に愼重を要するものであつた。またアコスタについて當時何も知らなかつた著者は、この書の價値をも判じ兼ねた。そこで著者は一應この書を讀んで見たのである。さうして、何の期待をも持つてゐなかつただけに、殆んど驚愕に近い感じを受けた。ところで購入のために重複調べをさせて見ると、アコスタの英譯本は既に圖書館に備へつけてあつた。それがハクルート叢書の複刻本である。こゝで著者は初めてハクルート叢書の存在を知り、第一期刊行の百冊のうちだけでも實に多くの興味深いものが揃つてゐるのを見出した。圖書館にあるのは大正大震災後英國から寄贈されたもので、百冊のうち四十四五冊に過ぎなかつたが、しかしそれらは皆近世初頭の航海者・探檢家の記錄であつた。アコスタの書で味を覺えた著者は、時折それらをのぞき見るやうになつたのである。

後篇の資料として使つたのは、主として村上直次郎博士の飜譯にかゝるヤソ會士の書簡である。『耶蘇會年報』第一冊（長崎叢書第二卷大正十五年）『耶蘇會士日本通信』上下二卷（異國叢書昭和二・三年）『耶蘇會士日本通信豐後篇』上下二卷（續異國叢書昭和十一年）『耶蘇會の日本年報』第一輯（昭和十八年）第二輯（昭和十九年）など、既刊のものが既に七卷に達してゐる。前のハクルート叢書の英譯本に當るものが、こゝでは村上博士の和譯本であつた。ポルトガル語もスペイン語も讀めない著者にとつては、原資料に接近する道はそのほかになかつたのである。右のほかにはなほ友人故太田正雄君がイタリア語譯本から重譯したフロイスの年報（『日本吉利支丹史鈔』所輯）をも用ゐた。がこのやうに原資料に直接觸れることの出來ない缺を幾分かでも補ふために、日本吉利支丹史に關する諸家の研究をも、右の宣教

師の書簡と對照しつゝ讀んで見た。それによつて吉利支丹史研究家のやり方につきいろ〳〵なことを知ることが出來た。それらの研究書のなかで、海老澤有道氏の『切支丹史の研究』（昭和十七年）及び『切支丹典籍叢考』（昭和十八年）からは特に多くの益を得た。

著者は前篇及び後篇で扱つたいづれの事項についても「研究」の名に價するほどのことをやつたのではない。しかしこれらの事項を互に密接に結びつけ、その統一的な意味を概觀する、といふ仕事は、著者にとつても相當骨が折れたのである。これによつて日本のキリシタン史の諸事象や戰國時代乃至安土桃山時代の日本人の精神的狀況につき方位づけを與へることが出來れば、日本人及び日本文化の運命に關する反省の上に、幾分役立つことが出來るであらう。

昭和二十五年二月十一日

著者

目次

序說……一
鎖國の意義（一）――近世までの歷史的情勢（二）――ローマ帝國へのゲルマン人の侵入（四）――アラビア人の來襲（六）――ローマ教會の發展（八）――イスラム文化の開花（一〇）――アラビアの哲學（一二）――アラビアの科學と藝術（一四）――ゲルマン諸族の文化（一五）――ゲルマンの戰鬪的性格（一六）――スペインにおける東方と西方との對峙（一七）――十字軍（一八）――ヨーロッパの形成（二〇）――トマス・アクィナス（二二）――ダンテの神曲（二四）――都市の勃興、市民階級の形成（二五）――中世的世界の崩壞、ルネサンス（二七）――イタリアのルネサンス（二九）――外的世界の發見、自然科學の出發（三一）――インド及びシナの文化圈（三三）――兩漢の帝國（三五）――隋唐の新文化と宋の統一（三八）――蒙古人の征服、アラビア人との接觸（三九）――日本の時代的位置づけ（四一）

前篇　世界的視圈の成立過程……四五

第一章　東方への視界擴大の運動……四五

一　東方への衝動・マルコポーロとその後繼者……四五
二　航海者ヘンリ王子の理念……五一
三　バスコ・ダ・ガマによる實現……六一
四　インド洋制海權の爭奪……七三
五　インド征服……八五
六　マラッカ征服……九〇
七　植民地攻略……九一
八　未知の世界への觸手・キリスト教傳道……一〇二
第二章　西方への視界擴大の運動……一〇九
一　コロンブスの西への航海の努力……一〇九
二　コロンブスの第二回及び第三回航海……一二五
三　アメリゴ・ヴェスプッチの新大陸發見……一三三
四　征服者たちの活動……一三七
五　メキシコ征服……一四八

六　ペルーの發見……一七九
七　インカ帝國……一九五
八　インカ帝國の征服……二三五
九　太平洋航路の打開とフィリッピン攻略……二五六
後篇　世界的視圏における近世初頭の日本……二八九
第一章　十五・六世紀の日本の情勢……二八九
一　倭寇……二八九
二　土一揆……三〇八
第二章　シャビエルの渡來……三一九
一　ヤジローとの邂逅……三一九
二　鹿兒島におけるシャビエル……三三七
三　山口におけるシャビエル……三四七

四　豐後におけるシャビエルと大友義鎮との接觸……三五九

第三章　シャビエル渡來以後の十年間……三六八

一　トルレスと山口の教會……三六八
二　豐後における教會の建設……三七六
三　シャビエルの死と日本への關心の高揚……三八〇
四　山口の教會の活動とその受難……三八一
五　豐後の教會の成長、慈善病院の經營……三八八
六　トルレスとビレラ、平戸の教會……三九五

第四章　ビレラの畿内開拓……四〇六

一　ビレラ京都に來る……四〇六
二　堺における一年間……四一二
三　結城山城守の招請……四一五
四　河内飯盛地方の開拓……四一九

第五章　九州諸地方の開拓……四二四

一　基地――豐後の教會……四二四
二　平戸附近諸島の開拓……四二七
三　ダルメイダの薩摩訪問……四三四
四　横瀬浦の建設……四三七
五　島原半島の開拓……四四七
六　大村純忠の受洗……四五一
七　横瀬浦の沒落……四五三
八　口の津と平戸……四六〇

第六章　京都におけるフロイスの活動……四六五

一　フロイスとダルメイダの上京……四六五
二　日本文化の觀察……四七三
三　將軍暗殺と宣教師追放……四八一

四　京都回復の努力……四八九
第七章　九州北西沿岸地方における布教の成功……四九五
一　福田の開港……四九五
二　キリシタン武士たちの努力……四九九
三　ダルメイダの五島、天草及び長崎の開拓……五〇二
四　トルレスの最後の活動――大村の會堂と北九州の政治的情勢……五一二
第八章　ルイス・フロイス――和田惟政――織田信長……五一三
一　フロイス信長に會ふ……五一三
二　フロイスと朝山日乗との衝突……五三一
三　追放綸旨の效力問題――日乗と惟政との對立……五三六
四　フロイス岐阜に信長を訪ふ……五四一
五　日乗の惟政排斥運動、日乗の失脚……五四六
六　戰亂に對するフロイスの方針と惟政に對する讃美……五四九

第九章　信長の傳統破壞……五五六
一　本願寺との敵對、叡山燒討……五五六
二　信長の危機、京都の攻圍戰……五六〇
三　將軍の沒落、淺井朝倉の滅亡、傳統破壞者の勝利……五六九
第十章　京都の新會堂『昇天の聖母』の建立……五七五
一　新會堂の計畫とその主動者たち……五七五
二　建築工事と村井貞勝の外護……五八三
三　新會堂の效果……五八九
四　信長一門の同情……五九一
五　部將たちの同情、佐久間信盛と荒木村重……五九七
第十一章　キリシタン運動の最高潮……六〇五
一　信長の鐵砲隊と艦隊……六〇五
二　荒木村重の背叛と高山右近の去就……六〇九

三　安土宗論……六一四
四　巡察使ワリニャーニの渡來……六二二
五　石山本願寺の開城・安土城の完成、安土のセミナリヨの開設……六二三
六　ワリニャーニの京畿地方巡察……六二七
七　大友宗麟の受洗……六四三
八　ローマへの少年使節……六六八
第十二章　鎖國への過程……六七九
一　信長殺さる……六七九
二　キリシタン大名の繁榮……六八三
三　秀吉の宣教師追放令……六九〇
四　キリシタン迫害史……七〇四
五　鎖國……七二七
索引……一一二五

序說

太平洋戰爭の敗北によつて日本民族は實に情ない姿をさらけ出した。この情勢に應じて日本民族の劣等性を力說するといふやうなことはわたくしの欲するところではない。有限な人間存在にあつては、どれほど優れたものにも缺點や弱所はある。その缺點の指摘は、人々が日本民族の優秀性を空虛な言葉で誇示してゐた時にこそ最も必要であつた。今はむしろ日本民族の優秀な面に對する落ちついた認識を誘ひ出し、悲境にあるこの民族を少しでも力づけるべき時ではないかと思はれる。

しかし人々が否應なしにおのれの缺點や弱所を自覺せしめられてゐる時に、たゞその上に罵倒の言葉を投げかけるだけでなく、その缺點や弱所の深刻な反省を試み、何がわれ〳〵に足りないのであるかを精確に把握して置くことは、この缺點を克服するためにも必須の仕事である。その缺點は一口にいへば科學的精神の缺如であらう。合理的な思索を蔑視して偏狹な狂信に動いた人

人が、日本民族を現在の悲境に導き入れた。がさういふことの起り得た背後には、直觀的な事實にのみ信頼を置き、推理力による把捉を重んじないといふ民族の性向が控へてゐる。推理力によつて確實に認識せられ得ることに對してさへも、やつて見なくては解らないと感ずるのがこの民族の癖である。それが淺ましい狂信のはびこる溫床であつた。またそこから千種萬樣の缺點が導き出されて來たのである。

ところでこの缺點は、一朝一夕にして成り立つたものではない。近世の初めに新しい科學が發展し始めて以來、歐米人は三百年の歲月を費してこの科學の精神を生活の隅々にまで浸透させて行つた。しかるに日本民族は、この發展が始まつた途端に國を鎖ぢ、その後二百五十年の間、國家の權力を以てこの近世の精神の影響を遮斷した。これは非常な相違である。この二百五十年の間の科學の發展が世界史の上で未曾有のものであつただけに、この相違もまた深刻だといはなくてはならぬ。それは、この發達の成果を急激に輸入することによつて、何とか補ひをつけ得るといふやうなものではなかつた。だから最新の科學の成果を利用してゐる人が同時に最も淺ましい狂信者であるといふやうな奇妙な現象さへも起つて來たのである。

して見るとこの缺點の把捉には、鎖國が何を意味してゐたかを十分に理解することが必要である。それは歷史の問題であるが、しかし歷史家はその點を明かに理解させてはくれなかつた。歷史家が力を注いだのは、この鎖國の間に日本において創造せられた世にも珍らしい閉鎖的文化を明かにすることである。それはさま〻の美しいものや優れたもの、再びすることの出來ない個性的なものをわれ〳〵に傳へた。それを明かにすることは確かに意義ある仕事である。しかしそれらのものの代償としてわれ〳〵がいかに多くを失つたかといふこともまたわれ〳〵は承知してゐなくてはならない。その問題をわれ〳〵はこゝで取り上げようとするのである。

がその問題に入り込む前に、近世が始まるまでの、從つて鎖國といふやうなことが總じて問題になるまでの、世界の歷史的情勢を概觀して置きたいと思ふ。鎖國が問題になるのは世界的な交通が始まつたからであつて、一つの世界への動きは既にそこに見られる。鎖國とは一つの世界への動きを拒む態度である。從つてそれが問題になる以前の時代には、世界は多くの世界に分れてゐた。さうしてそのなかでヨーロッパ的世界が特に進歩してゐるといふわけでもなかつた。しかし近世の運動はヨーロッパから始まつたのであるから、先づそこから始めよう。

ローマ帝國が地中海を環る諸地方を統一して當時のヨーロッパ人にとつての世界帝國となつたとき、それはまたこれらの諸地方の一切の古代史の集注するところでもあつた。それは地理的にも歴史的にも東と西との綜合を意味してゐる。この普遍的な世界において、普遍的な政治や法律や文藝や宗教が形成せられたのである。その普遍性がインド的世界やシナ的世界を含まず、從つて眞に普遍的となつてゐなかつたとしても、彼らにとつての東方と西方との世界、そこに存するさまざまの民族、に對して普遍的であつたことは、疑ひがない。またそれを通じて把捉せられた普遍性の理念は、その後の分裂的な民族國家や對立的世界に對して、常により高き人倫的段階を指し示すものとして作用することが出來た。

この普遍的な世界の崩壞は二つの方面から起つた。一はゲルマン人の侵入であり、他はアラビア人の來征である。

ゲルマン人のローマ帝國への侵透は極めて長期に亙つて行はれた。初めは傭兵として部分的に入り込み、或は北方の國境地方に於て徐々に侵透しつゝあつたのであるが、四世紀末の民族大移動につれて旺然とローマ帝國内になだれ込むやうになつた。その或者は女子供や生活資材を携へた民族の集團がそのまゝ軍隊として行動したのであつて、帝國を征服したといふよりもむしろ帝國の版圖内に入り込んで宿營したと云ふ方が當つてゐる。彼らは土地の住民と妥協し、ローマ末期の宿營權に基いて、その土地の三分の一乃至三分の二を所有したのであつた。從つてローマ人の權利や制度はその儘に殘され、行政もゲルマン人が參加するのみでもとの儘であつた。これは同じ土地に二つの生活が並存することを意味する。ゲルマン人は軍人であり、アリウス派であり、おのれの部族法に從つてゐるが、ローマ人は非戰鬪員であり、カトリックであり、ローマ法に從つてゐる。かくてゲルマン人は、世界帝國の内部に新しい鄕土を獲得したのであつて、新しい國家を形成したとは考へてゐなかつた。イタリアからスペインにまで擴がつたゴート族やブルゴーニュの地名を殘したブルグンド族などがそのよき例である。が他方には原住地を根據地としてそこから帝國の版圖内に植民して行く種族もあつた。このやり方では、ローマ人と並存するのではなくして、むしろそれを征服したのである。後のフランスの基礎を置いたフランク族がさうであつた。後のイギリスの基礎を置いたアングロ・サクソン族に至つては、ローマの習俗全部を壞滅せしめたと云はれてゐる。

かういふ二つのやり方でゲルマン人は五世紀から六世紀へかけてローマ帝國の中へ無秩序に入り込んで行つた。その間にフン族の王アッチラの來襲とか、ゲルマン傭兵の指揮者オドアケルに

よる西ローマ帝國の滅亡(476)とか、東ゴート族のテオドリックによるオドアケル討伐とか、ローマ帝國の西歐側は完全に壞滅に歸した。ムバード族のイタリア占領とかの如き事件が起り、

がゲルマン諸族の侵入はその後もなほ數世紀に亙つて續いて居り、ローマ帝國の廢墟から西歐の文化世界が明白に形成されるまでには、なほ三百年の年月と、さうして他のもう一つの有力な契機、卽ちアラビア人の侵入が必要であつた。

ローマ帝國の版圖を東方・南方・西方に亙つてゲルマン人以上に廣く侵蝕したのはアラビア人であるが、この東方からの侵入の起點はモハメッド(570—632)である。彼はセム族に普遍なアラー(Allah, hebr. Elohim)の信仰に新鮮な活氣を與へ、ユデア敎やキリスト敎の要素を取り入れて新しい民族宗敎を作り上げた。それは一神への絕對服從の態度の故にイスラム(Islam)と呼ばれ、その信者(Moslem)は豫言者及びその後繼者(Kalif)を首長(Imam)として頂く固い宗敎的共同體を形成してゐる。その信仰の情熱は戰鬪的な擴大を目ざす態度となつて現はれ、極めて迅速に西に向つてはローマ帝國、東に向つてはペルシアと戰端を開いた。さうして敎祖の死後十年には既に西アジア全體とエヂプトとをトリポリタニアまで征服した。アレキサンダー大王の作つた『一つの世界』はこゝに崩壞し、東方と西方とを統一したローマ帝國もその東方を失ひ去つたのである。

かく急激に成立した宗敎的戰鬪的な世界帝國は、それが世界的となつたまさにその理由によつて、種々の變質や反動を閲せざるを得なかつた。オマイヤ朝(661—750)はカリフの權威を倒して純粹に世俗的な支配を樹立したもので、國都をもメヂナからダマスクスへ移した。その頃からイスラムの內に持續的な分裂が引き起されたのである。が征服事業は依然として續けられてゐる。東方は中央アジアや北インドまで、西方はアフリカ北岸を海峽まで七世紀の末に進出した。ヨーロッパへの侵入はまづ初めにコンスタンチノープルを襲つたのであるが、八世紀の初めには西方スペインに侵入し、西ゴート族を打ち破つて(711)半島全部を征服した。更にピレネー山脈を越えて(720)、フランスの中部にまで進出したが、これはフランク人によつて擊退された(732)。しかしスペインに於けるイスラムの支配はこの後永い間續くのである。なほこれと並行して地中海の海上權力もまたアラビア人の掌握するところとなつた。沿岸の諸地方や島々は彼らに侵略され、占領された。中でも目ぼしいのはシチリアの征服(827)である。かくして『東方』の力は『西方』の世界の心臟部に近く迫つて來たのである。

西歐の文化世界の形成のためにアラビア人の侵入が必要であつたといふのは、この『東方』と

『西方』との對立を指すのである。西歐の世界の形成のためにはまさにこの『東方』の壓力が必要であつた。ローマ帝國に侵入したゲルマン諸族の間に初めて統一の萌しが見え、初めて國家を强力に形成したのは、前述のアラビア人の侵入を中部フランスに於てカール・マルテルが打ち破つた頃からである。が重要なのはたゞにこのやうな武力的壓迫のみではない。我々は當時のゲルマン諸族が文化的にはなほ野蠻と呼ぶべき段階にあつたのに對して、スペインに尖端を置くイスラムの文化が遙かに高い段階に達してゐたことを見のがしてはならぬ。

ゲルマン諸族は十一世紀に至るまでもなほ野蠻であつたと云はれる。彼らはローマ時代の制度文物を荒廢せしめたのみで、おのれ自身は何ら新しいものを作り出し得なかつた。從つて彼らの侵入以來數世紀間の世界史的な出來事は、實はその侵入に惱みつゝあつたローマ人の力によるのである。その内特に注目すべきはローマの統一敎會の强化發展であらう。元來キリスト敎がローマ帝國に於て公認され、次で國敎とせられるに至つたのは、ゲルマンの侵入よりあまり古いことではない。帝國の首都を東に移したコンスタンチヌス大帝がその統一の事業のためにキリスト敎徒の勢力を利用し、その擧句この敎を公の宗敎として認許したのは三一三年であつて、民族大移動の開始に先つこと僅か六十年である。この皇帝は自らも信者となつたために、在來迫害されて來たキリスト敎は反つてローマ舊來の諸敎よりも優勢となつたが、しかし四世紀はなほ異敎との對立抗爭に充たされてゐる。テオドーシウス大帝がキリスト敎以外の宗敎を嚴禁したのは三九五年であつて民族移動開始後既に二十年を經てゐる。カトリック敎會の最大の天才とも云ふべきアウグスチヌスは實にこのゲルマン侵入の時期に仕事をしたのであつた。彼の有名な回心は三八六年のことであり、彼の名著『神國論』は、四一〇年のアラリックのローマ劫略によつて全帝國が狼狽し湧き返つてゐるさ中に、この帝國と敎會との危機を救ふべく、四一三年から書き始められたのである。その直接の意圖は帝國の危機をキリスト敎の責に歸しようとする保守的なローマ人異敎徒に對して駁擊を加へるにあつたが、しかし彼の預言者的眼光は、ローマ帝國の崩壞と、かかる現世的流轉を超越せる永遠なる神の國の姿とを洞見し、來るべき時代を豫示してゐる。卽ち彼に於て帝國内の異敎徒との戰が外より侵入し來るゲルマンの異敎徒との戰と接續してゐるのである。『神の國』の著述は十五年の年月を要し四二七年に完成したのであるが、その後三年を經ずしてヴァンダル族は北アフリカの彼の町ヒッポへも押し寄せて來た。彼は敵軍重圍の内に四三〇年に死んだのである。がかく異敎徒と戰ふことは敎會をますゝ强靱ならしめ、西ローマ帝國が亡んだ(476)後に反つて精神的な世界帝國の理念を育成してゐる。特にフランク族の王クロー

ヴィスの改宗はこの傾向に拍車をかけた。元來ローマの司教は諸地方の司教と同じく papa と呼ばれ、それが帝國の首府に位置するといふ以外に特別の優位を持たなかつたのであるが、その papa の尊稱や使徒の座の資格を獨占して『法王』或は『教皇』と譯さるゝ如き意義を帶びしむるに至つたのは、むしろこの時代以後のことなのである。それはローマ文明の荒廢と反比例して高まつて行つた。六世紀に於て學藝の傳統を保持してゐたのは、現世的に無力となり終つた知識人の隱遁所としてその頃始められた修道院のみであつたが、そこから出た教皇グレゴリウス一世(590—604)は、アングロ・サクソンの教化に成功したのを初めとして多くのゲルマン諸族をカトリック教會の中に取り入れ、ローマの司教を最高の司教として仰ぐに至らしめたと云はれる。キリスト教が眞に深くゲルマン諸族の中に根を下したのはなほ三百年も後のことであるが、しかしゲルマン人の武力が現實を支配してゐる西歐の世界に於て、文化的に着々とその發展を見せたものは、ローマの教會の他にないのである。

ところでこの教會の異教徒教化事業の最中に、西は北アフリカからスペインにまでも及ぶもとの帝國領が悉くモスレムによつて征服され、そこに西歐に先んじて文化の華が開き始めた。ダマスクスのオマイヤ朝からバグダードのアッバス朝に代つた頃がその始まりである。元來イスラムは東方のローマ屬州を占領すると共にそこに殘存したギリシア文化を熱心に吸收した。キリスト教によつて殆んど窒息せしめられてゐたシリア地方のギリシア精神の如きも、イスラムによつて解放され、力强く生き始めた。またイランやインドの文化圈も西方と密接に結びついて來た。九世紀に至つてイスラムの帝國が分裂したことも文化の華のためには好都合であつた。といふのは多くの主要都市が學藝や學校や圖書館や天文臺を守り育てる場所となつたからである。先づバグダードとバスラには最初の大學が出來た。東部イランでもニシャプール、メルヴ、バルク、ボハラ、サマルカンド、ガスナ、などが榮えた。その他イスパハン、ダマスクス、ハレブ、カイロなど。かういふ廣汎な文化交流を背景として、十世紀から十二世紀の頃にスペインではコルドバ、セビリヤ、グラナダが、シチリアではパレルモが、文化の絕頂に達した。スペインには十七の大學があつたと云はれる。

かういふ情勢の下に西歐より一歩先んじて發展したアラビアの哲學は、主としてアリストテレースに基き、また新プラトーン派を通じてプラトーンの影響をも受けてゐた。アラビア哲學の創始者として端的に『哲學者』と呼ばれてゐたアル・キンディは、數學者醫學者天文學者でもあつたが、八世紀の末にバスラで生れ、八七三年頃バグダードで死んだ。合理主義者であり自由思想家

であつたが故に多くの迫害を受けたと云はれてゐるが、アリストテレースの『オルガノン』の註釋を初め三十四種に上る哲學上の著述はあまり殘つて居らない。次で現はれたファラビは九世紀の後半にトルキスタンのファラブで生れ、早くよりバグダードに來てアラビア語とギリシア哲學を學び、やがて自ら講義するに至つた。歿したのは九五〇年ダマスクスに於てである。彼の著書は百種以上に上り大部分は失はれたが、幸に『オルガノン』の註釋は殘つてゐる。彼の功績は、ギリシア哲學、特に論理學の理解に初めて深く突き入つたことであると云はれる。がその解釋には新プラトーン派の影響がある。あらゆる後代の學者は、キリスト敎のアリストテレース主義者さへも彼に基いてゐる。この師のあとを歩いたのがイスパハンで醫學と哲學とを敎へたアヴィチェンナ（980—1037）である。彼はファラビの立場から出發しつゝアリストテレースの敎說に還つて行つた。個別化の原理である質料は、神からの流出でなく、それ自身永遠でありあらゆる可能性を包藏する。この考を彼は貫徹しようと努めた。論理學・形而上學等の彼の著書は大部分既に十二世紀にラテン語に飜譯されてゐる。かういふ飜譯がなされるのはスペインに於ても既に哲學が盛行してゐたことを示すものであるが、この地で最初に現はれたアラビア哲學者はアヴェンパチェ（1138歿）で、醫學・數學・天文學等にも通じアリストテレースの註釋を書いた。その自由思想の故に迫害を受けたと云はれるが、彼の立場は本能から神の理性的認識に至るまでの精神の發展を說くにあつた。やゝ遲れて現はれたイブン・トファイル（1185歿）も同じく醫學者數學者を兼ねた哲學者であつて、同樣に人間精神が、超自然的啓示によらず全然自然的に發展して自然及び神の認識に達する段階を說いた。その同時代の後輩としてかの有名なコルドバのアヴェロエス（1126—1198）が現はれたのである。彼はアリストテレースを尊信すること厚く、人間に於ける完成の絕頂、我々が一般に知り得ることを我々に知らしむべく神の與へた人、と讃めたゝへた。だから彼の仕事の中心もまたアリストテレースの註釋であつて、その大部分はラテン譯によつてのみ知られてゐる。彼はアヴィチェンナの質料重視の立場を更に押し進め、形相は萌芽的に質料の中にあつてより高き形相の影響の下に展開せしめられるのであると說く。また彼は理性の受動的側面を認めるアリストテレースの說に對して普遍的理性の兩面卽ち能動的理性と質料的理性とを說き、質料的理性といへども受動的ならざることを力說した。彼が汎神論的であると云はれるのは、この普遍的能動的な理性が個々人に分れてその生存中の精神となり、死後はその本來の普遍性に歸るが故に、個人的靈魂の不滅は問題とならないと說いたためである。

これらのアラビア哲學は西歐中世の哲學に甚大なる影響を與へ、スコラ哲學の隆盛を將來した。

それはアヴィチェンナ及びアヴェロエスの著書とトマス・アクィナスとの密接な聯關によつても察せられるであらう。がこの點は後に問題とする。

哲學のみならず、數學・物理學・化學・醫學・地理學・天文學の如き諸科學、及び歷史學・言語學等も、九世紀以來熱心に追究せられてゐる。數學はギリシアの傳統に從つて哲學の一部分として取扱はれたが、現在のアラビア數字や代數學などはアラビア人が西歐に傳へたものである。地理學はイスラムの版圖の廣さや交易の隆盛に伴つて中世の如何なる民族よりも進んでゐた。歷史學に於ても十世紀以來すでに普遍史が書かれてゐる。

その他なほ我々は文藝美術の方面に於ても、また農工商の方面に於ても、多くの優秀な特徵を考へることが出來る。それらのすべてに於てアラビア人は、ギリシア人には及ばなかつたとしても、同時代の西歐諸民族よりは遙かに優れてゐたのである。特に商業はその得意とするところであつた。彼らは航海の力によつてインド洋と地中海とを獨占的に支配し、東西を結ぶ陸海の貿易路を悉くその手中にをさめてゐたが故に、リスボンよりインドやシナに至る廣汎な領域に於て諸民族の間の貿易を獨占し、巨大な富を集めてゐたのである。

この絢爛たる『東方』の文化に對してゲルマン諸族の『西方』の文化はどうであつたらうか。

ローマの教會が世界帝國の理念を宗教的に繼承し、西歐を精神的に統一し始めたことは既に說いたが、それはアラビア人が哲學を作り始めた八・九世紀の頃に於てもなほゲルマン人の心を十分に支配してはゐなかつた。八世紀初めのアングロ・サクソンの敍事傳『ベオヴルフ』や、サクソンの『ヘリアント』の如き九世紀の古ドイツ文藝などは、未だ全然異教的精神に充たされてゐる。教會のドグマにはゲルマン人の齒が立たなかつたのである。この間、イギリスのスコトゥス・エリゲナ（877歿）の如き西歐最初の獨立的な思想家を出すには出したが、さういふ學者はその時代には理解されず、教會から排斥された。

しかし十世紀の初めになると、ゲルマン人も漸くキリスト教を理解し始めたらしい。それは修道院の改革運動や神祕說の勃興となつて現はれた。がそれはファラビがバグダードで論理學の講義をしてゐた頃なのである。やがて十一世紀になるとパリに最初の大學が出來た。これが模範となつて十二世紀以後には西歐の所々に大學が作られ始める。初めはギルド的な教師の團體として、やがては公の權力による設備として。それはアヴィチェンナが東方に現はれ、スペインに於てアリストテレースが講義せられてゐる頃なのである。西歐に於てはカンターベリーのアンセルムス（1033—1109）がスコラ哲學を始めるに至つた。がかくキリスト教が理解せられ始めると共に世

界史上の最も注目すべき事件の一つである十字軍(1095以後)が惹き起された。西歐の文化世界の形成とこの十字軍とはひき離して考へることが出來ない。さうしてこの十字軍こそ『東方』と『西方』との對立を露骨に具體化したものなのである。

この現象の理解のためには、ゲルマン諸族の本來の生活要素たる『戰鬪的なるもの』が、ローマの敎會の敎化のもとにどうなつて行つたかを見ることが必要である。ゲルマン人にはもと一つの平等な身分、卽ち自由な、防衞的な、農民があつた。(十二世紀に至つても北方の國々はさうであつた。) 然るにローマ帝國への侵入の時代に王や有力な首領やその從臣(vassal)などが出現し、やがて非戰鬪的になつた農民大衆と、王侯に奉仕する戰士とが分離するに至つた。それに加へて十世紀頃から主君が手下の戰士と共に城(Burg)の中に住むやうになる。また小さい領地が世襲になつて小さい從臣たちが經濟的にも社會的にも浮び上つてくる。更に數多くの自由なき家人の俸祿としての領地も眞の領地の如く取扱はれるやうになる。これらの事情から素姓の別は稀薄となり、騎馬の武術といふ共通の生活が表へ出て來た。かくて自由を持たなかつた從卒や家人は自由なる農民の上に出で、公侯や騎士の貴族階級に近づき、反對に、騎馬の勤めをせず代りに稅を拂つてゐた自由なる農民は隷屬の地位に落ちた。この身分の對立は氏族の對立を押しのけてしまふ。騎士は農民を輕蔑し憎んでゐる。軍隊はたゞ騎馬の軍隊である。かくして封建制度は、暴力的な、また冒險的な、職業戰士階級を產み出したのであつた。

このやうな封建制度が形成せられて行く丁度その時期に、右の如き戰士たちはローマの敎會に指導されつゝ、スペインに侵入したアラビア人と對抗したのであつた。スペインは絢爛たる東方文化の西方への尖端である。この地に於けるアラビア人は最初土地の住民に對して極めて寬大で、財產にも言語にも宗敎にも手を觸れなかつた。下層階級はアラビア人の支配によつて反つて安樂となつた。上層のものも多くイスラムに歸依したが、改宗しないキリスト信者と雖、たゞ稅を拂ふだけで、信仰や法律上の權利はもとのまゝであつた。さういふ狀態であるから、東方で倒されたオマイヤ朝の苗裔が逃げて來た時、民衆は歡呼を以てこれを迎へた。この王のもとにコルドバを首都として建てられた(755)國は、學藝を奬勵し、農工商の平和な發展を保護したが故に、着着として文化がすゝみ、十世紀にはその絕頂に達した。今や數々の繁華な都市がこの國土を飾り、モハメダン支配下のスペイン全體で人口は二千五百萬に達したらうと云はれる。中でもコルドバは人口五十萬、戶數十一萬三千、三千のモスクや華麗な宮殿があつた。がグラナダ、セビリヤ、トレドなどもそれに比肩し得る町々である。それらを初め地方の諸都市に大學・圖書館・アカデ

ミーなどが營まれたのであつた。この文化燦然たるサラセン王國に對して西歐を護るゲルマン族は、最初のサラセン侵入をスペインの北岸地帶で漸く喰ひとめた西ゴート族のアストゥリアスのほかは、主としてピレネー山脈の麓に小さいキリスト教國を建てた。ナバルレ、アラゴン、カタロニアなどがそれである。アラビア人の寛容な政策に化せられて、最初の間は宗教的對立はさほど强烈でなく、キリスト信者たる王がサラセン女を母とし、キリスト信者たる公侯の娘がサラセン人の妻となつてゐる如き例も少くない。カリフの部下にキリスト信者があつた如く、キリスト教の王の下にモハメダンが仕へてゐた。民衆も十字架と半月との戰には冷淡であつた。むしろ征服された領土の回復のための戰、その戰を通じての封建制度の發展の方が主要事に見える。ゲルマン族の戰士たちは、その力と勇氣とを奮つて、おのれよりも文化の優れたる民族の手からおのれの祖先の地を取り返さうとしたのである。かくして十世紀から十一世紀へかけてアストゥリアスはスペインの中部にまで進出し、カスティレと呼ばれるに至つた。十一世紀の中頃には既にカスティレ王がスペイン皇帝と稱するに至つてゐる。

ローマの教會はこの戰を常に信仰の戰として把捉せしめようと努めてゐる。その努力が效を奏し、『東方』との戰を十字軍として實現するに至つたのは十一世紀末であるが、それと共に十二世紀に於てはサラセン人の側にも狂信的な信仰防禦の傾向が加はり、スペインはその烈しい戰場となつた。西歐中世の騎士道はこの十字軍の精神に於て滿開するに至るのであるが、その最初の形成はアラビア人との接觸によると見られる。騎士道の發祥の地は南フランスであるが、その本源はペルシアであると云はれてゐる。騎士的な風習、騎士的な闘ひ方、封建的な騎士制度、それらはペルシアに起りアラビア人によつて西歐に傳へられたのである。ゲルマン人の主從關係に本來伴つてゐるのは、男の間の信義、武功手柄、といふ如き理想であつたが、騎士道としてはそれ以外に信仰の防衛、弱者の保護、婦女尊崇などの義務が加はつて來た。スペインの騎士は今やその尖端に立つてゐる。國民的矜持・狂信・騎士的感覺、それがカスティレ風の特質である。これは數世紀の後にスペイン人とポルトガル人（これは十二世紀にカスティレから獨立した）とが西歐人の世界進出の尖端に立つたことと密接に關係のあることなのである。

以上によつて明かなやうに、ゲルマン諸族に於ける戰鬪的性格が騎士の姿を取つて現はれたことは、教會の教化によるのではない。がかくして現はれた騎士は信仰の守護者として教會のための戰士となつてゐた。それを示すのが十字軍である。スペインの騎士が長期に亙つて體驗したことを、十字軍は西歐全體に押しひろめた。がそれは、スペインの騎士がイスラムに征服された國

土を奪還しようとして戰つた如く、イスラムに征服せられたローマ帝國の版圖を奪回しようとして企てられたのではない。スペインの騎士が後に自らをキリスト敎の守護者として感じ始めた如く西歐の諸王が『キリスト敎を奉せる王』として、敎皇の指導のもとに、聖墓奪還を目ざして軍を起した、それが十字軍なのである。それは全く不思議な現象であつた。サラセン人やビザンツ人の眼から見ればなほ野蠻人に過ぎないヨーロッパ人が、單純に宗敎的な情熱から、一切の街道を充ち塞ぐほどに群をなして遙々と東方の世界へ押し寄せて行く。中には婦人子供をさへも伴つてゐる。この狂信と獻身との不思議な結合によつて、一時はエルサレムが征服され、そこに王國が建設せられた。しかしやがてイスラムの國に於てトルコのセルヂュック族が國内の統一を強化し始めると共に、十字軍士の建てた國も危ふくなり、第二第三と起された十字軍も效を奏せず、パレスチナは再び失はれた。その回復のために更に二度三度と遠征が企てられる。かくて十字軍の騷ぎは前後百六十年に亙つたが、結局その目的を達し得なかつた。

しかし十字軍が西歐の形成に對して擔つてゐる意義は甚大である。それは西歐が一つの統一的な世界であるといふ自覺をはつきりとヨーロッパ人に植ゑつけた。この自覺はまた『東方』がおのれに對立する世界、おのれの外なる世界であるとの自覺であり、そこから東方に對する永續的な衝動が生れてくる。この自覺と共にまた敎皇の權威は皇帝の上に出で、西歐キリスト敎的世界に君臨するに至つた。こゝにローマ帝國と異つた獨自の西歐帝國が明白に仕上げられたのである。

西歐中世文化の絶頂は十二・三世紀の頃であるが、それは丁度十字軍の時期にほかならぬのである。騎士道が完成されたのもこの時期であり、しかも特徵的現象として、パレスチナやスペインの如き東方との鬪爭の前線に於て、騎士團が形成された。これは騎士を僧團的に組織したものであつて、戰鬪的ゲルマン的なるものと宗敎的謙抑的なるものとの結合だと云つてよい。かゝる騎士團は、やがて西歐全體に擴がり、夥しい財産の寄附を受けた。それによつても知られるやうに、騎士道は西歐全體に通用する國際的なものである。この騎士道の文藝的表現もまたこの時期に起つた。アラビアの吟唱詩人の影響の下にまづ南フランスから『トゥルーバドゥル』が起つてくる。同じくプロヴァンスの抒情詩も迅速にスペインやイタリアにひろまり、北フランスやドイツの抒情詩の模範となつた。北フランスでは聖盃傳說と結びついたアーサ王の圓卓騎士の物語や、サラセンとの戰を背景とするローランの物語などの英雄敍事詩が作られた。これらには十字軍的な觀念が強く現はれてゐると云つてよい。

學問に於てもさうである。敎會の哲學を完成し、カトリックの模範的哲學者として尊崇せられ

てゐるトマス・アクィナス（1227—1274）に於て、我々は烈しい十字軍的態度を見出すことが出來る。元來トマスはアリストテレースの開展の思想を取つて敎會の哲學を組織したのであるが、そのアリストテレースの大きい著作は十二世紀に至るまで西歐に知られてゐなかつたのである。それがスペインに於てアラビア語からラテン語に重譯せられ、アヴェロエスの註釋のラテン譯と共に西歐に紹介せられたのは、十二世紀の末の頃である。十三世紀にはこれに基いてアリストテレースを解釋する一つの學派が成立した。その特徵は個人的な靈魂の不死を認めず、普遍的理性に於て不滅であるとした點にある。敎會は最初アリストテレースの研究を喜ばず、それを禁止すること三度以上に及んだのであるが、やがてアリストテレースの體系が敎會の信條と結合され得ることを見出し、その攝取を企てるに至つた。この大勢の下にトマスはアリストテレースの研究に入つたのであるから、アラビア學者からの影響は避けるわけに行かなかつた。彼の師アルベルトゥス・マグヌス（1193 or 1208—1280）はアヴィチェンナのアリストテレース解釋の方法を學び、アリストテレースの著述を解り易く云ひ換へようと努めたが、しかしトマスはアヴェロエスの方法を學び、アリストテレースの言葉の意味を出來るだけ忠實に再現してその思想內容を把捉しようと努めたと云はれる。これには異論もあり、トマスの方法は聖書解釋の方から來たと論ぜられてゐるが、併しトマスのアリストテレース研究も最初アラビア哲學者の勞作に基いたこと疑ひないのである。然るにトマスのアリストテレース註釋の仕事の特徵はアヴェロエスに對する攻擊にある。彼はアヴェロエスを以てアリストテレースの眞意に反し眞意を誤るものとした。從つてアリストテレース哲學からアヴェロエス的解釋の殼を取り去ることが彼のアリストテレース註釋の主要任務とさへなつた。アヴェロエスに對する烈しい攻擊が最初に現はれてくるのは、Summa contra Gentiles であるが、これはスペインのアラビア人やユデア人の間に傳道するドミニカンのために論難攻擊の敎科書として書かれたものである。丁度この書の著述の頃にトマスはギリシア原典からのラテン譯にもとづいて獨立にアリストテレース研究を始めてゐた。アヴェロエスのアリストテレース解釋が誤謬であることを彼は右の根據から指摘したのである。更に晚年トマスが再度パリの敎職に就いたとき、大學のアヴェロエス派と對立することによつて一層アヴェロエス攻擊の熱が高まつた。當時の著 De unitate intellectus contra Averroistas (1270) は、アヴェロイズムに對して敎會の敎理を守らうとすると共に、またアヴェロエス派的解釋によつて危險思想家にされ兼ねないアリストテレースの眞實の姿を守らうとしてゐる。このやうに最大のスコラ哲學者のアリストテレース解釋はアヴェロエスに對する戰といふ旗の下になされた。さうしてア

ヴェロイズムに對する學問的征服が聖トマスの功業の一つであつた。こゝに我々は、異敎徒アリストテレースを敎會の哲學者とイスラムの哲學者とが奪ひ合つてゐる、といふ事實に面接するのである。それは古代の世界帝國の遺產を『東方』の手から『西方』が奪ひ返さうとする運動にほかならない。卽ち十字軍と同じ動機が精神的世界にも現はれてゐるのである。

かくの如く十字軍的觀念によつて敎會の指導の下に西歐が一つの統一的世界として自覺されたといふことの最も巨大な記念碑はダンテ（1265—1321）の神曲であると云つてよい。元來この種の世界的古典は、ホメーロスやシェークスピアやゲーテなどの作品に於ても同樣であるが、それの作られた時代と社會とが相續して持つてゐる世界の文化の綜合を表現したものである。神曲もまたギリシア・ローマの古代の文化、及び『東方』の文化を、中世の西歐、特にイタリアの文化の中に渾融し、それを敎會の精神に於て極めて獨特な仕方で統一してゐる。この作品の輪郭をなす地獄界、淨罪界、天堂界の幻想の中にペルシアあたりの幻想が力强く流れ込んでゐること、從つて佛敎に流れ込んだ地獄極樂の幻想と源泉を同じくするらしいことは、それ自身極めて興味ある研究問題であるが、この輪郭の中にはめ込まれた豐富な世界史的內容が敎會の立場から價値づけられて地獄の底から九天の高所に至るまでの實に顯著な高下の差別の中に配列せられてゐるのを見る時、我々はこの詩の幽幻な美しさにも拘らずなほ十字軍的な烈しい精神を感ぜざるを得ない。神曲の神學的構成の基礎にトマス・アクィナスの體系、特に Summa contra Gentiles が用ゐられてゐるのも故なきことでない。もとよりトマスは中世最大の哲學者に相違ないが、しかし彼がその師アルベルトゥス・マグヌスなどと共に高く天堂の第五天（火星天）に榮光に充たされて位してゐるのに對し、ソークラテースやプラトーンやアヴィチェンナやアヴェロエスが低く地獄に落されてゐることは、何としても偏狹の見と云はざるを得ない。同樣にイェルサレムの大虐殺や南フランス全體の大劫掠を伴つた十字軍の戰士たちが、トマスよりも更に高く第七天に於て燦然たる光となつて輝いてゐるに對し、東方を一つの統一的世界に形成する力の源となつたモハメッドが、地獄の奧底たる第九圈に間近いところで、人類の間に分裂や殺し合ひをひろめた罰として、頰から口まで切り裂かれ、腸や心臟を露出して苦しんでゐることも、あまりに黨派的な見方と評せざるを得ない。このやうな評價の體系は、少くとも西洋の古代に關しては、ルネサンスに至つて全然覆へされたのである。

十字軍の影響としてはなほ他に都市の勃興、市民階級の形成をあげて置かなくてはならぬ。既に十世紀頃より純粹の農民的自然經濟は崩れ始め、手工業と商業とが再び榮えようとしてゐる。

經濟的意味に於ける都市生活は、ローマ時代の都市が僅かに名殘りを留めてゐた南方に於て、十世紀の頃に始まり、次で十一世紀には北方にもひろまつた。そこでは都市の住民――商人、手工業者、召使、家來などが結合して市民共同體をつくり、自治權を獲得した。それは司法、警察などの組織から防衛隊の結成にまで及んでゐる。かういふ自治的な都市が敎會や封建君主の權力と戰つて漸次自由都市としての存立を獲得して行つたのが丁度十字軍の時期なのである。十字軍による輸送や交通や貿易の活潑化は必然に都市の活動を刺戟し、急激にそれらを發達させた。特にイタリアの諸都市が顯著であつた。ヴェネチア、アマルフィ、ナポリなどは既に九世紀の頃から海に進出してアラビア人に對抗してゐたが、十一世紀にはそれをイタリアの島々から驅逐した。これは東方への反擊の先驅と云つてよい。十二世紀にはピサやヂェノヴァが進出して東方との貿易に加はつた。かういふ海上の勢力が十字軍と結びついて急激な海運都市の勃興となつたのである。フィレンツェ、ミラノなどは海に沿つてゐないが、しかしその興隆は貿易に基いてゐる。イタリア以外ではマルセーユ、バルセロナなどが海運都市として興つたが、十三世紀に至るとブルージュ、ガンなどを初めとしてライン河畔やダニューブ上流、北海バルト海沿岸などに多數の都市が出現する。さういふ都市の隆盛と同時に市民共同體の內部には種々の職業團體（ギルドやツンフト）が發達し、外部には都市同盟が盛んになる。やがて十四・五世紀に於ては、かゝる都市の內部に於ける民主主義運動や外部に於ける國際關係からして近代國家に關するさまゞ〳〵の思索が現はれてくるのである。かく見れば十字軍の刺戟によつて起つた都市こそ、西歐を近代化する母胎であつたといふことが出來る。その母胎の近代初頭十五世紀に於ける情勢は、パリ、ナポリ、パレルモ、ヴェネチアのみが人口十萬以上、ローマ、フィレンツェ、ヂェノヴァ、ブルージュ、ガン、アントワープなどが五萬乃至十萬、リュベック、ケルンが五萬、ロンドンが三萬五千、ニュルンベルクが三萬であつた。

以上の如く『東方』との對立に於て出來上つた西歐の統一的世界は、この對立によつて形成を促進されたといふまさにその理由によつて、また崩壞に面しなくてはならなかつた。十字軍は前にも云つた如くゲルマン諸族の戰鬪的性格が敎會の理念を通じて表現せられたものであるが、それによつて敎會の統治が强化されると共にまた戰鬪的性格そのものも醇化した形に展開せざるを得なかつた。それは世俗的な國家生活の發展や自由な人間生活の形成に於ける無限追求の精神である。敎會的統一の形成のために必要であつた精神的閉鎖性は、今やこの無限追求の精神にとつ

ての束縛となり、それを破る努力を呼び醒してくる。一切の自由な思索を禁壓し、理性を牢屋に閉ぢ込めてゐた教義の支配は、今や搖り動かされねばならぬ。この支配の下に固定させられてゐた社會組織や、情意の自然的な活動を抑壓されてゐた個人の生活は、今や解き放されなくてはならぬ。かくて西歐の統一的世界を打ち破り、人間性を解放しようとする運動が、ルネサンスとして爆發し、近代ヨーロッパを產み出してくるのである。

この運動は十四世紀の初頭に先づ教皇權の王權に對する敗北となつて現はれた。十字軍の經驗から最初に中央集權策によつて國家を强化しようとし始めたフランスの國王が、教皇を制御するに成功し、更にそれをアヴィニョンに移したのである。教皇が西歐に君臨するといふ權威はこゝで倒れた。西歐が一つの統一體であることはこゝに終りを告げ、それに代つて民族的統一が現はれ出ようとする。しかしそれは一朝一夕に近代國家にまで發展したのではない。對外的には國と國との間の戰爭が頻々として起り、內部に於ては僧侶と貴族と都市との間の激しい鬪爭がくり返され、それを通じて漸く近代國家が形成されるのである。

この道程に於てイギリスの憲法マグナ・カルタの制定は劃期的なものであるが、しかしこの制定によつて直ちに國內の混亂が止んだのではない。議會制度は未だ國內の秩序を維持する力を持たなかつた。教皇權と共に中世を標徵する騎士の階級は、今や崩壞の時期に瀕して、その最も惡い面を示し始めた。それはヨーロッパ全體に亙つての現象である。騎士は恣にその城壁から出て通りすがりの旅人を掠奪する。城郭にたてこもる貴族は何人の統制にも服しようとしない。かういふ混亂のなかでわづかに秩序を保ち得たのが、新興の勢力としての都市であつた。それは團結によつて市民の生活を護り、秩序によつて暴力に對抗し、そこから近代ヨーロッパを產み出して行つたのである。

この形勢に於て先驅的役割をつとめたのがイタリアであつた。十字軍の影響の下に急激に勃興した諸都市は、それ〴〵獨立の自治組織を形成したが、今や皇帝權も教皇權も崩壞し去るに及んで、國家としての態勢を整へて來たのである。中でも强力なのは、ヴェネチア、フィレンツェ、ミラノ、ローマ、ナポリの五國であつた。中世の標徵たる騎士はこゝでは早くより消滅し、それに代るものとして傭兵とその首領（Condottiere）があるのみであつた。それは社會に於ける一定の身分ではなく、報酬に應じてどの國家のためにも戰爭に從事する一種の企業家である。國家はこゝでは身分の差別の殆どない市民によつて構成され、多くは共和制を取つた。勿論そこには市民共同體全體を包む純政治的な組合組織を形成したフィレンツェの如きもあれば、確乎たる貴族

政治を樹立したヴェネチア共和國の如きもある。がいづれも近代國家の風貌を供へてゐることは否定出來ない。この中にあつて國家の問題を深く考へたフィレンツェのマキアヴェリが、その後のヨーロッパ近代國家に對してさま〳〵の示唆を與へ得たのは故なきことでない。

しかし狹いイタリアの中に數多くの小國家が並立して相爭ひ、また絶え間なくスペインやフランスからの侵入を受ける情勢にあつては、國民的國家としての近代國家はこゝに見出すことが出來ない。それはイタリアの民族全體にとつては分裂・爭鬪・殘虐・不安に充ちた生活であつた。しかもその中からイタリア人は、ギリシア盛時にも比肩すべき華々しいルネサンスの文化を作り出したのである。この視點から見れば、爭鬪と殘虐に充ちたその生活は、人間性解放の一つの現はれと解せられるでもあらう。チェーザレ・ボルヂアに於て最も强健な超人的性格を見出さうとする如き見方は、まさにその代表的なものである。十字軍を背景として產み出されたイタリア諸都市の文化は、文弱なものではあり得なかつた。地獄の苛責を以て人を嚇かさうとする敎會の權威を大膽にはねのけ、たゞ異敎的な古代の文化にのみ親緣を感じつゝ、しかもその古代人以上に人間的な美を結晶させようとしたルネサンスの藝術家は、すべて强剛な豪膽な個性の持主であつた。イタリアのルネサンスの偉大さはこの『强さ』に基くところ少くないのである。

イタリアのルネサンスの本質的な特徵は、個人の發展、古代の復活及び世界と人間の發見に於て認められてゐる。中世人が外界をたゞ敎會の敎に從つて空想的にのみ理解し、自己をたゞ何らか全體的なものの一分子としてのみ感じたのに反し、ルネサンスのイタリア人は外界を客觀的に直視し、自己を獨立の個人として自覺し始めた。十三世紀が終ると共に突如としてイタリアには個性的人物が簇出し始める。既にダンテがさうであるが、都市國家の政權を握るデスポットや軍隊を率ゐるコンドチェーレの如き著名な人物のみならず、一介の市民にさへもこの傾向が見られる。これは云はゞ中世人に對する『神』の代りに『自然』を置きかへた態度なのであるが、こゝにこそ近代ヨーロッパ文化の出發點があるのである。しかし、外界を客觀的に眺めたからと云つて直ちに自然的精神的世界の認識に徹し得るものではない。こゝに指導者として入り込んでくるのが古代である。そこには神話傳說の代りに嚴密な學問があり、敎の代りに無限追求の精神がある。敍事詩や歷史は朗らかで自然的な人間の生活を鮮やかに示してくれる。それによつて育成されたイタリアの精神は、やがて外的世界の發見に向ひ、中世の閉鎖的な眼界を打ち破らうとするのである。既に十字軍の遠征はヨーロッパ人に遠い國々への衝動を植ゑつけたのであるが、その衝動が最初に知識欲と結びついて冒險的な旅行に出で立たせたのは、イタリアに於てであつた。

それはイタリア人が地中海の航海と貿易とに早くより乘り出し、東方の國々に馴染んでゐたせゐでもあるであらう。既に十三世紀の末にマルコ・ポーロ（1254—1323）はシナまで旅行した。その後發見のために海外へ乘り出して行つたイタリア人は枚擧に遑がないと云はれる。彼らは皆先驅者の思想や遺志を繼承し、それに基いておのれの計畫を立てたのである。さういふ中から遂にコロンブスを出すに至つたのは決して偶然でない。

この發見の精神はまた近代の自然科學を出發させた。既に北方に於ても十三世紀にアルベルトゥス・マグヌスは物理學・化學・植物學等についてのかなりの知識を示して居り、またイギリスのローヂア・ベーコン（ca. 1214—ca. 1294）はアラビアの自然科學の影響の下に現象の眞の聯關についての驚くべき洞察を見せ、自然觀察に歸るべきことを說いてスコラ的體系に容赦のない攻擊を加へてゐる。これらは近代自然科學の先驅者に相違ないが、その時代その社會からは理解されず、後者の如きは迫害をさへ受けた。しかるにイタリアでは自然の觀察探究が國民全體によつて歡迎された。ダンテの神曲のなかに含まれてゐる詳しい天文學的な知識は、その時代の讀者には常識に過ぎなかつたのである。さういふ背景のもとに經驗的自然科學はイタリアに於て最も早く進んだ。敎會の干涉も北方に於けるほど甚しくはなかつた。かくて十五世紀の末にはパオロ・トスカネリ（1397—1482）、リオナルド・ダ・ヴィンチ（1452—1519）などを出し、數學・自然科學に於てヨーロッパに並ぶものなき先進國となつたのである。さうしてそのトスカネリこそコロンブスに西廻りインド航路の考を與へた人であつた。

この發見の運動は、近代ヨーロッパが中世の閉鎖性を破つて外に進出するといふ傾向を最も直觀的に示してゐるものであるが、それを力强く實行に移したのは、イタリア人ではなくしてスペイン人及びポルトガル人であつた。卽ち『東方』との爭鬪の中に成り立つた國々、『東方』との戰の最前線にゐる民族が、今や新しく『海外十字軍』を始めたのである。さうしてこの事業こそ近代ヨーロッパを形成する最後の重要契機にほかならない。我々は近代ヨーロッパの考察をそこから始めたいと思ふ。

以上概觀した歷史的經過は、東方と西方の合一と對立とを含むとは云へ、我々の住む東亞文化圈とはかゝはりがない。東方は漸くインドに觸れるのみで、マルコ・ポーロの頃に初めてシナと日本をその眼界に含ませてくるのである。しかしインド及びシナの文化圈は、實質上西方の文化とさま〴〵の交涉を持つてゐるのみならず、ヨーロッパの文化圈に對して決して劣らない世界史

的意義を擔つてゐる。にも拘らずそれが對等の取扱ひを受けないのは、近代ヨーロッパとの接觸以後に、相拮抗するだけの文化的發展をなし得なかつたからである。我々はその點をも簡單に通觀して置かなくてはならない。

インドはローマ帝國の世界統一の時代には、同じくギリシア風要素を攝取した高度の文化を以て、それ自身の視圈内に於て統一的世界を形成してゐた。大乘佛敎の結構壯大な哲學や文藝や美術はこの時代の創造にかゝるものである。のみならずその活動はローマの世界統一よりも永く續いてゐる。中觀哲學と瑜伽行哲學との創成は既に四世紀までに終つてゐるが、しかし西ローマ帝國の滅亡の頃にはなほ中觀派と瑜伽行派との哲學者たちの活動は活潑に續いてゐるのである。兩者が學派として明白に對立するに至つたのはむしろ六世紀の事に屬する。眞諦や玄奘がシナに傳へた佛敎哲學はこの時代の學者の解釋を通じたものである。七世紀からは漸く衰頽時代に入つてゐるが、それでも眞言系統の象徵的哲學が起つてゐる。さうしてそれらはヒマーラヤの彼方に移つて新鮮な活力を發揮するに至つた。しかし西歐が漸くその獨自の文化を作り始める頃にはインドはその頽廢の底に達し、やがて十世紀の終り頃にはマームードの征服に遇ふに至つた。その後は『東方』の世界の一契機に過ぎなくなる。

シナに於てローマ帝國に比肩するものは兩漢の帝國である。それは古い周の文化を繼承しつゝも戰國時代以來外來的要素を取り入れ、當時の東亞全體に及ぶ統一的世界を形成した。それは黃河流域の狹い區域に限られた周代の世界に對して全然新しい世界である。この廣汎な統一的世界の形成がシナ文化にとつて如何に決定的な意義を有するかは、シナの民族を漢民族と呼び、シナ文字を漢字、シナ語を漢語と云ひ慣はしてゐることによつても知られるであらう。シナの民族はその後數々の新しい要素を加へ、漢代のそれと決して同じものではない。シナの言語もさうである。しかもそれを我々は漢の名に於て統一的に把捉するやうに習慣づけられてゐるのである。

この統一的な世界はローマ帝國よりも一歩早く三世紀に崩壞した。あとに三國時代が續き、やがて盛んに異民族の侵入をうけることになる。民族移動による混亂も西方よりは一歩早く、既に四世紀の初めには外蠻が中原を制してゐる。混亂の時期は西方と同じく三百年以上に及んでゐるが、その收拾の仕方は西方と同じではない。西方に於てはローマの文化は殆んど破壞され、ローマ人の征服民族に對する文化的逆征服は本來ローマ的ならざるキリスト敎を以てなされた。然るに東亞に於ては漢文化はそれほど破壞はされなかつた。次々に入り込んで來た外蠻は大體に於て漢文化に化せられる。言語さへ漢語を使ふやうになる。從つて民族渾融による新しい文化の創成

は、漢文化を土臺としてなされたのである。勿論それによつて漢文化自身も顯著な變化を受けなくてはならなかつた。かくて西方より一歩早く、七世紀の初めに華々しく開き始めたのが隋唐の文化である。

我々はこの隋唐の文化が民族の渾融によつて新しく創成されたものであるといふ點を忘れてはならぬ。隋室の祖先は北狄の間に育ち、少くとも母系には北族の血を混へてゐる。唐朝の李氏も蕃姓と見られ得る。さうしてその部下の有力者中には異民族のものが多かつた。隋唐の文化はさういふ異民族の協働の下に外來の要素を盛んに取り入れつゝ形成せられたのである。インドの哲學・宗教、ペルシアの思想・藝術、林邑の音樂・物資等は旺然として隋唐の文化に流れ込んだ。かくして唐代の詩や繪畫や美術に見られるやうな豐醇な樣式が作り出され、或は唐代の佛教哲學に見られるやうな壯大な體系が建立せられたのである。それは漢文化とは顯著に異つたものであるが、しかしシナに於て創られた文化としては最高のものであり、また當時の世界全體に於てどこにも比類を見出し難いほど醇美なものである。七世紀より九世紀に至る西方の文化が遙かにこれに劣つたものであることはいふまでもなく、アラビアの文化も到底是に及ばない。從つてこの文化の影響は東亞全體はいふまでもなく、遠くアジアの西の方に及んでゐるのである。

この文化は西歐がその固有の文化を展開し始める前に既に終末に達した。それには契丹などの外蠻の國の勃興や、トルコ族の國内に於ける跳梁なども有力な契機となつてゐるが、今度は混亂僅かに半世紀餘にして宋の統一（960—1279）を實現した。しかしこの統一は唐代に於ける如く東亞の世界全體に亙る廣汎なものではなく、外圍に契丹等の異民族の國を控へて、シナ固有の版圖（後にはその半ば）に集約的な文化を形成したものである。從つてそこには再びシナの土地に固有な色彩が蘇つて來たやうに見える。佛教が著しくシナ化されて禪學となり、儒教が再び活潑となつて佛教の影響の下に形而上學を發展させた如きは、そのよき例である。これらはいづれもシナ獨自の創造として重視さるべきものであらう。が特に注意すべきことは、この宋の文化が西歐の中世文化とほゞ時を同じくするに拘らず、西歐の中世を特徴づける封建制度がこゝには存しないことである。宋の政治は意識的に武力の支配を排除し、民衆の活力を開放した。そのために商工業は榮え、農民の地位は向上し、都市生活は頗る繁華となつた。かゝる點に着目してこゝに既に近代的傾向を見ようとする學者もある。それにはなほ他に都合のよい事實を數へることも出來るであらう。火藥や羅針盤の發明、印刷術の大成などは、西歐よりも遙かに早く、宋代に於て實現された。しかもその印刷術の如き、一切經の出版といふ如き大事業をさへもなし遂げてゐる。

地理的な知識も、遠く地中海の沿岸、エヂプト、シシリー、スペインにまで及んでゐた。さういふ傾向の總括として儒教の大成者朱熹（1130—1200）は格物致知を力說してゐる。それも近代の黎明を示してゐはしないか。なるほどさうも云へるであらう。しかしその格物致知の精神にも拘らず、東亞の世界には西歐の近代科學の如きものは起らなかつた。火藥や羅針盤や印刷術に先鞭をつけながら、それによつて近代の技術や思想の解放などが促進されず、逆にそれらを傳へた西歐人のためにそれらの力を以て壓迫されてしまつた。こゝに大きい問題があると云はねばならぬ。朱熹はトマス・アクィナスよりも二世代ほど早く現はれ、トマスと同じくその時代の哲學の大成者となつた人であるが、格物窮理によつて近代を先驅するといふよりも、むしろ中世的な經典解釋の態度に於てトマスに酷似する。朱熹に對する經典や聖人の權威はトマスに對する聖書やキリストの權威と毫も異るところがない。從つて宋の文化は全體として西歐の中世よりも進んでゐるに拘らず、最も重要な點に於て依然として中世的であり、西歐近代を特徵づける思想の自由・無限追求の精神を缺いてゐるのである。

しかしそれはシナ民族の性格によるのであらうか。或は時代がまだそれほどに熟してゐなかつたことに基くのであらうか。この點は重大な問題として愼重な考察を要すると思ふが、とにかく運命は丁度このあとへ右の如き發展を不可能ならしめるやうな情勢を與へた。それは蒙古人によるシナ征服である。チンギスカンに始まる蒙古の勃興、世界征服の事業は、ヨーロッパに對しては一時的な挿話に終つた（1236—1243）が、西南アジアよりシナにかけては重大な影響を與へた。クビライがシナ征服を完成した頃（1260—94）には、西歐、インド、エヂプト、日本を除いて、當時知られてゐた限りの世界全體を統一し、世界史上空前絕後の大帝國を建設したといはれる。しかし蒙古人自身は見るべき文化を持たなかつたのであるから、その征服は破壞的な效果をしか與へなかつた。シナに於ても宋代の文化を擔つてゐた人々は社會の最下層に落され、シナの外蠻金及び高麗人の方がその上に位する。更にその上にアラビア人その他西域から來た異民族（色目）が立ち、それら全體の上に支配階級として蒙古人が位する。かゝる情勢に於ては宋の文化は萎縮するほかはなかつたのである。

しかし右の統一はイスラムの文化圈とシナの文化圈との統一にほかならず、從つてアラビアの文化、特に天文學・數學・地理學・曆・砲術等の知識が、シナに流入したことは顯著な事實である。郭守敬の授時曆はこの事實を記念するものとしていつも指摘されてゐる。この點に注目すれば、西歐がスペインに於てアラビア人から受けたと同じやうな刺戟を、シナ人もまた蒙古人のお

蔭で西歐とほゞ同じき十三・四世紀の頃に、アラビア人から受けることが出來たと云へる。しかるにその刺戟の效果は西歐とシナとでは著しく異つてゐる。西歐ではそれが教義の支配といふ牢獄を破るのに役立つた。シナでは逆に朱子學が官學とされ、中世的な閉鎖性を強めることとなつてゐる。こゝにも我々は重大な性格の相違を看取せざるを得ない。

しかし蒙古帝國の統一は、更にもう一つ重要な結果をもたらした。それは西歐人にインド、シナ、日本等、彼らの『東方』の概念の内に含まれてゐなかつた東方の文化圏を知らしめたことである。こゝに於て東方への衝動はインド、シナ、日本等未知の國々への衝動となつて力強く働き出した。そこに我々の當面の問題が現はれてくるのである。

最後に我々は以上の推移に對して日本の諸時代を位置づけて置きたい。

我國が國家としての統一を形成したのは漢が東亞に統一的な世界を作り出した頃であらう。鏡玉劔の權威による統一は漢鏡と引き離して考へることが出來ない。その國家が朝鮮半島に於て長期に亙り軍事行動を展開したのは四世紀の末頃である。丁度西歐の民族移動と時を同じくしてゐる。その結果我國は漢字漢文の攝取を初めシナ文化の具體的な理解を開始した。やがて佛教を受け容れ、隋唐の新文化に接し、極めて迅速に法制の整備した國家組織を作り上げた。それは隋の統一（589）から半世紀後、唐の統一からは二十數年後のことである。さうして七世紀より九世紀へかけての唐の文化の時代は、我國に於ても大化より延喜へかけての燦然たる文化の時代であつた。唐の文化が當時の世界全體に於ける最高峰であつたやうに、我國のこの時代の文化も當時の西歐よりは遙かに進んだものである。のみならず我國に於ては、シナの五代の如き混亂もなく、宋の文化に對應する如き我國獨特の藤原時代の文化を形成した。これは骨の髓まで平和の浸み込んだやうな文化であつて、同じ十一世紀頃の西歐の殺伐な風と比較すれば、そこにはまるで別世界があると云はねばならぬ。かく見れば、ローマ帝國崩壞後、中世文化の最盛期に至るまでの西歐の暗黑時代は、我國に於ては最も晴朗な眞晝の時代であつたのである。

しかしその晴れやかな時代の絶頂に於て、既に「武士」の團體は形成されつゝあつた。それは西歐に於てやがて十字軍が催されようといふ時代であるから、騎士の出現よりは遲い。しかしその發展は西歐よりも迅速で、一世紀の後には源平の戰、武士の幕府の形成（1185）となり、その事蹟を唱ふ『平家物語』の創作は、西歐中世の騎士を歌ふ敍事詩と殆んど時を同じくするに至つてゐる。しかも文藝の作品としては平家物語の方が遙かに進歩したものと云はなくてはならぬ。

のみならずこの十二・三世紀の武士の時代は、南都北嶺の教權に反抗して淨土(眞)宗、禪宗、日蓮宗などが興起した點に於て、西歐中世と著しく事情を異にしてゐる。それはキリスト教と佛教との相違にもよるが、しかし自己の宗教的體驗に忠實となり、信仰によつて義とせられるといふ立場を貫徹した態度には、既に後のルターの宗教改革に通ずるものがある。それらの點に於て我我は鎌倉時代の文化を相當に高く評價してよいと考へる。

それにも拘らず我々は西歐中世に存し我々の鎌倉時代に存せざる一つの點を重視しなくてはならぬ。それは我國の武士がたゞ內亂を背景としてのみ發生し西歐に於けるが如く異民族や異れる文化圈との對立に於て發生したのではないといふ點である。こゝには東亞の統一的世界への外からの侵入もなければ、また西方の世界との持續的な對立もなかつた。從つて眼界はいつも國內に限られ、遙かな彼方の未知の世界への衝動を持たなかつた。否、むしろそれは西方淨土への憧憬として、十字軍とは凡そ正反對の、柔和にして觀念的なものとなつた。これがいかに重大な意義を持つかは、十三世紀末の蒙古襲來(1274, 1281)が我國に如何なる影響を與へたかを見れば解るであらう。それは西歐から日本までの橋が目前に現はれたことに外ならぬが、しかし我々の祖先はこの衝擊によつて外なる廣大な世界への眼を開きはしなかつた。たゞ外なる世界の壓迫によつて我國の統一的な國家としての存在に目ざめ、武士階級興隆以前の天皇親政を復興しようとして、再び內亂をひき起したに留まつた。この受動的閉鎖的な態度はまさに我國の位置と歷史との產物なのである。

西歐にルネサンスの華を開いた十四・五世紀は、我國の室町時代に當る。この時代は我國自身に卽して云へば同じくルネサンスなのである。藤原時代の文藝、特に源氏物語は、この時代の教養の準繩となり、その地盤の上で新しい創造がなされた。謠曲にせよ、連歌にせよ、すべてさうである。しかもこの時代に作り出された能狂言や、茶の湯や、連歌などが、現代に至つてさへもなほ日本文化を特徵づけるものとして重視されてゐるのである。さうしてそれは決して空言ではない。演藝の一樣式としての能は、人間の動作の否定的な表現として實に獨特なものであり、さうしてそれを理論づけてゐる世阿彌の藝論にはかなり深邃なものがある。文藝の一樣式としての連歌も世界に比類のない共同制作であつて、その理論にも缺けてゐない。茶の湯に至つては藝術の新分野の開拓と云へるであらう。これらを創造した時代は、イタリアのルネサンスと同じく、十分に尊敬されねばならぬ。のみならずこの時代には海外遠征熱が勃興し、冒險的な武士や商人がシナ沿岸のみならずもつと南方まで進出してゐる。またそれに伴つて堺や山口のやうな都市が

勃興し、その市民の勢力が武士に對抗し得るに至つてゐる。更に民衆の勢力の發展に至つてはこの時代の一つの特徴とさへも見られる。一揆の盛行、民衆による自治の開始、それらが次の時代の支配勢力の母胎となつてゐる。

すべてこれらの點に於て我國の十四・五世紀もまた近代を準備してゐると云へるのである。しかも同時代に於けるイタリアと同じく、國内に數多の勢力が對峙し、國家的統一が失はれ去つた十六世紀に至つて、いよ〳〵西歐の文化との接觸に入つた。そこに我々の問題の焦點が存するのである。

前篇　世界的視圈の成立過程

第一章　東方への視界擴大の運動

一　東方への衝動・マルコポーロとその後繼者

東方イスラムの世界との對峙を通じて形成せられて來たヨーロッパの世界が、その東方をさらに遠く東へ超えた東アジアに向つて動きはじめたのは、いかなる事情によるであらうか。

最初に機緣を與へたのは、十三世紀末における蒙古帝國の形成である。ヨーロッパの十字軍の戰士たちにとつては、正面の敵であるイスラムの世界を遙かに東方の背後から壓迫してくれる蒙古人の勢力は、云はゞ援軍の如くに感ぜられた。のみならずその蒙古人は、アラビア人やトルコ人のやうに宗教的狂信を持つ民族でなく、キリストの信仰に對してもむしろ同情を抱くかの如く

に見えた。もつともこの宗教的寛容の態度は、彼らがモハメッド教に對しても示したところであつて、キリスト教を特別扱ひにしたといふわけではないのであるが、しかしそのために多くのキリスト教徒が蒙古の君主に仕へて居り、特にクビライ兄弟の母たちがキリスト教徒であつたといふやうな事情が、ローマの教會その他の人々をして蒙古帝國との連絡に努力せしめるやうになつたのである。

なほもう一つ、ヨーロッパの關心を遠く東へひきつけるものがあつた。それはプレスビテル・ヨハンネスの傳說である。このヨハネは祭司たると共に王として東方のキリスト教國に君臨してゐたと信ぜられてゐる。このキリスト教國を探し出してイスラム帝國を挾み擊ちにするのもまた西歐人の強い希望であつた。

かういふ事情の下に十三世紀の中頃、先づ教皇インノセント四世が使節團を派遣し、次でアルメニア王室の一族が次々と出掛け、それに續いてルブルクが教皇とフランス王との依囑の下に旅途に上つた。いづれもカラコルムを訪れたのであつてシナまでは來て居らないが、しかしシナについての報道はアルメニアの王子ヘートンが『人民と富とに充ちた世界の最大國』として與へて居り、ルブルクもまた東に大洋を控へた國として言及してゐる。彼らがいづれも興味を以て語つてゐるのは漢字のことである。

かういふ先蹤に續いて、シナで二十年を送つたマルコ・ポーロ(1254—1323)が現はれてくる。彼の父と叔父はビザンツの商品を蒙古人の間に持ち込む貿易の仕事でヴォルガを遠く遡つて行つたのであるが、蒙古の內亂に歸路を遮られ、東南へステップを超えてボカラへ出た。こゝに商用で三年ほど留まり、蒙古人の習俗や言語を學び、シナへ行くペルシアの使節の誘ふまゝに、クビライ汗を訪ねることとなつた。クビライは彼らを款待し、歸國に際して教皇に七藝の師たる學者を送られたいと懇請する使者を托したと云はれる。使者は病氣であとに留まつたが、ポーロ兄弟は歸國後教皇廳にその旨を傳へ、第二回旅行には教皇の書翰の他に二人のドミニコ會士を伴つてゐる。尤もこれらも戰爭のためアルメニアから引き返したのではあるが。

マルコ・ポーロは十八歲にしてこの第二回旅行に伴はれた(1271)。旅程は小アジアのラヤッツォから上陸し、アルメニアの方へ迂曲してバグダード、バスラを經由、ペルシア灣をオルムヅまで航海し、そこからイラン高原を突切つてバルクに出で、峻嶮な山越しにカシュガル、ヤルカンド、コータンと昔のシナ・インド交通路を傳つて行く。しかし甘州の近くから北に曲り、今の內蒙古を經て北京に入つたらしい。一行はクビライに再び款待せられたが、特に若いマルコは非常

な愛顧を受け、特別の使命を以てシナ南方諸省の端まで派遣せられた。そこで彼は山西、陝西、四川、雲南等の諸省を經てビルマにまで旅行した。その後三年ほど南京東北の揚州の知事をつとめ、ついで叔父と共に甘州に永く滯留した。この頃にクビライは島國ジパング（Zipangu 日本國）の征服を企て失敗したのである。かくしてマルコ・ポーロはシナにあること二十年を超えた頃に、ペルシアに婚する王女の一行に加はり、海路歸途につくことが出來た。この度は大運河を通つて揚州に出で、蘇州を經て杭州に來た。これを彼はキンザイ（Quinsai, Kinsay, Khinzai 行在、宋朝の行都）と呼び、非常な驚きを以て、世界最美の都市として描いてゐる。戶數百六十萬、石橋一萬二千。十二の職業組合は一萬二千の工場を處理し、街道には車の往來が絶えない。人口の多さは日に胡椒の消費が一萬磅に上ることによつても知られる。そこから彼は更に南方福州を經て Zayton（刺洞、泉州）に達した。これはインド航路の出發點で、世界最大の商港の一つに數へられてゐる。その港は厦門をまで含んでゐたかも知れぬ。こゝで一行は一二九二年の初め四本マストの十三艘の船に乘り、マンジ（Manzi 南シナ）の海を渡つて、チャンパに着き、更にシャムを經てビンタン島に達した。またそこから南スマトラのパレンバンを訪れた後、海峽を西北上してインド洋に出で、ニコバル、アンダマン諸島を經て南西に向ひ、セイロン島に寄港した。あとはインドの西海岸沿ひにペルシアのオルムヅまで航海するのであるが、こゝでマルコ・ポーロはインド洋の西方沿岸についてソコトラやザンジバルやマダガスカルの島々のことを傳聞してゐる。かくして一行は二年の航海を終へてペルシアに着いた（1294）。そこから王の手厚い保護を受けつゝヴェネチアに歸りついたのは、その翌年である。

しかしその同じ年にマルコ・ポーロはヴェネチアのために戰爭に參加し捕虜となつた。彼の旅行記はヂェノヴァの牢獄に於て僚囚に口述筆記させたものである。のみならず彼の學的教養も敍述の能力もあまり十分とは云へない。從つてこの旅行記はさま〴〵の點に於て不精確である。しかしアジアを端から端まで踏査し、そこにある個々の國々について敍述した旅行家は、彼を以て嚆矢とする。イラン高原の景觀、東トルキスタンの町々、蒙古のステッペの生活、北京の朝廷の威容、シナの民衆の群、それらを彼は見て來たのである。彼は黃金で葺いた宮殿のある日本や、黃金の塔（パゴダ）のあるビルマのことを、或は香料の豐かなスンダ諸島の樂園のやうな野原や、多くの美しい王國と產業との榮えてゐるジャバ、スマトラのことを、西歐で初めて物語つた。また西歐に於て傳說に包まれてゐるインドの、現實の偉大さと富とを、自分の眼で見て來た。アビシニアのキリスト教國のこと、マダガスカルのこと、北極地方のことなどを語つたのも彼が最初である。

これは西歐にとつて實に劃期的のことと云はなくてはならない。

尤もこの旅行記の影響は急激には現はれなかつた。同時代のダンテなどもマルコ・ポーロには言及してゐない。しかしその後一・二世紀の間に漸次西歐の世界に浸透し、東南アジアに關する知識の基礎となつたことは疑がない。Quinsay, Zayton, Zipangu, Manzi などの名は永い間西歐の貿易人に對して強い魅力を持つてゐた。だから後にはコロンブスのアメリカ發見をマルコ・ポーロに結びつける見方が現はれてくる。コロンブスはポーロの旅行記に刺戟され、ジパングに達することをその生涯の任務とするに至つたといふのである。ユール (H. Yule, The book of ser Marco Polo. 1875.) はこれを反駁して、コロンブスはポーロの名を擧げてゐない、彼がポーロのことを知つたのはトスカネリの手紙によつてである、といふ。しかしそのトスカネリの知識はポーロにも基いてゐるのであるから、間接ではあるが、ポーロの仕事が新大陸發見の仕事の一つの動力となつてゐることは認めざるを得まい。

マルコ・ポーロに踵を接してインド及びシナに旅行した傳道師は、モンテコルヴィノのジョン (ca. 1247—1328)、ポルデノーネのオデリコ (1286—1331)、マリニョリのジョヴァンニ (ca. 1290—1353) などで、いづれもフランシスコ會士である。前二者はインド經由でシナに來り、北京で教會を建設・經營してゐるが、中でもオデリコは、スマトラ、ジャバ、ボルネオ、チャンパを經て廣東に達し、マルコ・ポーロの描いた Zayton, Quinsay や南京などを通つて北京に來たのである。それらの町々の大いさや繁華なことについては、オデリコの方が一層誇張的に報道してゐる。マリニョリは陸路北京に來て、歸りにインドを通つたのであるが、南シナについては、三萬の大都會があり、中でも Quinsay は最大最美であるといふ。すべてマルコ・ポーロの報道を實證するやうな報告のみであつた。

がこの種の交通は元の崩壞 (1368) によつて中斷され、あとにはたゞインドとの交通のみが殘された。十五世紀にはこの方面に旅行したニコロ・デ・コンティが有名である。彼はインドの內陸を橫斷した最初のヨーロッパ人で、デカン高原を東岸マドラスに出で、南してセイロンを訪れた。次でスマトラ、ビルマ、バンコック、スンダ諸島と廻り歩き、ボルネオとジャバにはやゝ永く滯留した。歸路にはアデンやアビシニアを經て紅海を航し、最後にカイロに出てゐる。彼の旅行談が保存されたのは、歸途紅海に於て海賊の手に陷り止むを得ずイスラムに歸したことを、懺悔して免罪を求めるために、當時 (1439—42) フィレンツェに滯留してゐた敎皇の許に來て物語つたからである。ところでその頃のフィレンツェには丁度トスカネリが四十代半ばの活氣旺んな

學者として生きてゐた。彼がその有名な手紙の中で、シナのことについてゆつくり話し合つたと云つてゐるのは、多分このコンティのことであらうとされてゐる。

トスカネリの手紙といふのは、香料や寶石の豐かな東方の國、特に學藝や政治の術も亦非常に進歩してゐる筈の強大なシナの國への近道を、西の方向に求め得ると敎へたもので、ポルトガル王の諮問に應じこの考を直觀的に示した地圖の添狀なのである(1474)。こゝに我々はマルコ・ポーロ以來の旅行の知識の集積と、大地が球であるといふ物理學的な考との結合を見ることが出來る。さうしてそれがこの時代の知識の尖端だつたのである。

この手紙はやがてコロンブスを刺戟して西方への航海に出立せしめるのであるが、しかし我々はそれに先立つて何故にこの手紙がポルトガル王と關係するかを問題としなくてはならぬ。新しい知識の尖端がポルトガルと結びついてゐるのは、ポルトガルが新しい認識の活動の先頭に立つてゐたが故なのである。

二　航海者ヘンリ王子の理念

この事態をあらはに示してゐる人物としてこゝには航海者ヘンリ(Dom Enrique el Navegador)を取り上げよう。

ポルトガルはスペインと共にサラセンとの戰に於て形成せられた國である。その建國はサラセンに對する戰勝(1139)の機に行はれ、首府となつたリスボンは十字軍によつて征服せられた(1147)。南端のアルガルヴェ州をモール人(本來は北アフリカの一種族の名であるが、漸次アラビア人の總稱として用ゐられた)から奪取したのは更に百年餘の後である。十四世紀中頃のスルタン・アブル・ハッサンの壓迫に際してはスペインと同盟し、サラド河の『キリスト敎の大勝利』(1340)に參加した。その後スペインとの紛爭に陷り、リスボン燒拂ひなどを食つたが、遂に勝利を得てジョアン一世(在位1385—1433)の卽位となつた。こゝにポルトガル民族の英雄時代が始まるのである。この王も依然としてモール人との戰を繼續し、北アフリカ突端のセウタを征服したりなどしたが、しかしその對立がこの時代に全然質を變へて來たことを我々は重視しなくてはならぬ。それを示してゐるのがジョアン一世の王子、航海者ヘンリ(1394—1460)なのである。

ヘンリは二世紀前にモール人から奪回したアルガルヴェ州のサン・ヴィセンテ岬サグレスの城に住み、そこに最初の天文臺、海軍兵器廠、天文現象世界地理などを觀察敍述するコスモグラフィーの學校などを創設して、ポルトガルの科學力を悉くこゝに集結しようと努力した。かゝる企

ての動機となつたものは、第一に、アラビア人の刺戟によつて惹き起された未知の世界への關心である。ヘンリは青年時にセウタ戰に從つて自らアラビア文化との對峙を體驗した。そこで南の方アフリカの地に對する注意が高まり、ギネアの國に到達しようとする强い欲望を抱くに至つた。ギネア（Guanaja, Ganaja, Ginia）に就ては恐らくヨーロッパ人はアラビア人から聞いたのであらう。カタロニア版世界地圖（1375）はアフリカの內地に王冠を頂いた黑人を描き、『このニグロの王はムッセメルリと呼ばる。ギネアのニグロの主なり。その國にて集められし黃金の豐かさにより、この王はこの地方を通じて最も富み最も貴き王なり』と記してゐる。しかしこの國を訪れたヨーロッパ人は未だないのである。アフリカの西岸は海峽より千五百キロのボハドル岬より南は知られてゐなかつた。從つてこの未知の領域へ進出しギネアの諸民族との貿易關係を獨占することは、ポルトガルにとつて非常に有利に見えた。がこの關心はアラビア人の刺戟によるのであるから、第二に、アラビア人への敵對意識が强く働いてゐる。數世紀來の相傳の敵モール人の背後には一體どういふ勢力が擴つてゐるのであらうか。そこにはキリスト敎國家はないものであらうか。カタロニアの地圖はエチオピアの皇帝を記してゐる。このやうな勢力とキリストの名に於て結合し、モール人を挾擊することは出來ないものであらうか。この敵對意識は積極的にはキリスト敎の光を、未だ福音に接せざる暗い國土に、擴めようとする傳道意欲となつて現はれる。動機としてはなほこの他に當時流行した占星術による豫言なども結びついて居り、主觀的には强い力を持つてゐたであらうが、しかし王子の後半世紀にして大仕掛けに世界的規模に於て展開せしめられたのは、まさに右の如き二つの動機であつた。

ところで我々にとつて意義深いのは、アラビア人との對抗や未知の世界への進出の努力が、學問と技術との研究といふ形に現はされてゐることである。こゝに我々は前に云つた質の變化を見出さざるを得ない。ヘンリは航海者と呼ばれてゐるが、しかし自ら航海したのではなく、ヨーロッパ西南端のサグレスの城から、西と南に涯なく擴がる大洋を望みつゝ、數多くの部下の航海と探檢とを指揮したのであつた。從つて個々の航海は彼にとつては『實驗』にほかならない。またこの實驗によつて未知の世界への眼界が開けたのであるから、彼の業績は認識の仕事にあると云つてよい。しかしこの實驗は、研究室內の實驗とは異なり、多くの經費や人員や組織や統率を必要とした。さうしてこれらは單なる學者のなし得るところではなく、强い政治力と優れた政治的手腕とによつてのみ遂行され得るのである。こゝにヘンリの出現の意義がある。彼に於て認識の仕事が政治力と結合し、政治力が理智の眼を持つたのである。

ヘンリの性格として傳へられるところも、この事實にふさはしい。彼の態度は物靜かであつたが、言葉はきつぱりとしてゐて、嚴格な感じを與へた。生活は簡素で、酒や女を近づけず、感情に流れることをしなかつた。人の過ちに對しては寛容であつたが、しかし決斷に富み、粘り强く持ち耐へる力があつた。

さてこのヘンリが冷靜に辛抱强く突破しようと試みた困難は、先づ第一に、當時の航海術の幼稚さであつた。ヴェネチア人が初めて英國への航路を開き、リスボンをその中休みの港として以來、まだ百年を經てゐない。航海は岸傳ひにしか出來なかつたのである。尤も磁針の效能は既に知られてゐたのであつたが、航海者はまだそれに賴るに至らなかつた。さういふ狀態の下にヘンリはしば〳〵探檢船を送つたのである。それらはいづれも既に知られてゐるボハドル岬までは行くことが出來た。しかしこの岬が岸傳ひ航海の關なのであつた。それは四十海里ほど西へ突き出て居り、更にその突端から六七里ほどの海中に暗礁があつて、物凄い波をあげてゐる。それを避けるためには岸傳ひの常法を破つてよほど遠く海の中へ出て行かなくてはならぬ。その勇氣の出せない航海者はそこから引き返すほかなかつたのである。

が更に第二にこの航海を困難ならしめたのはアフリカ西海岸の地理的風土的條件であつた。この海岸は北から四百哩ほどの間殆んど河がなく、從つて港になる河口がない。たゞ平らな、砂丘の多い海岸で、半ばはサハラの沙漠である。さうして海上四五十海里まで、淺い潮の上にどんよりした空氣が淀んでゐる。その原因は沙漠の埃や、溫度を異にした氣層の接觸による濛氣や、或はこゝで海面に表はれてくる寒流などに歸せられてゐるが、いづれにしても空には雲なきに拘らず大氣曇り日光が弱い。そのため岸傳ひの航海者は陸を見失ふ危險に苦しめられたのである。從つてこゝは中世以來『暗い海』として航海者に恐れられてゐた。

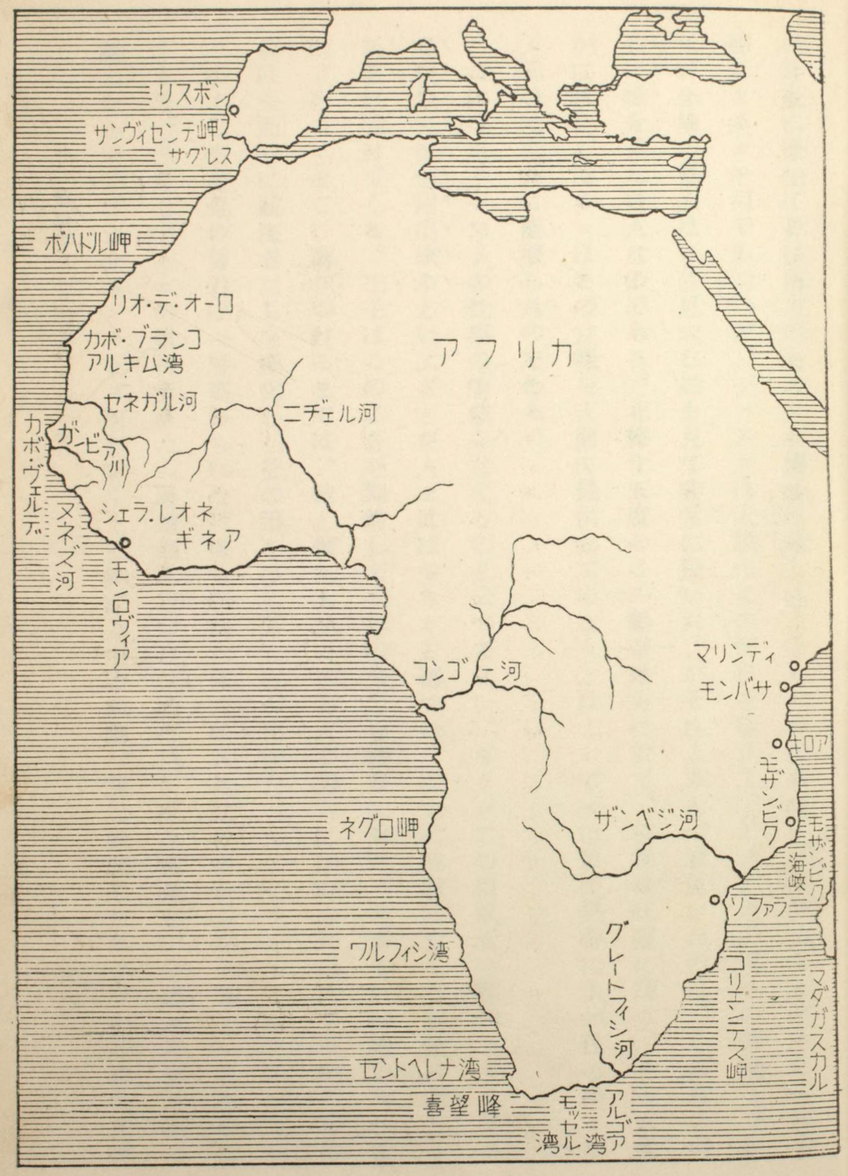
これらの障害は實際克服し難いものであつた。ヘンリは二十年間苦心したが、どうしてもボハドルから先へ進めなかつた。人民の間には不平の聲が聞える。海員は疑惑を抱いてくる。やがて王子は海員を得るに難澁するほどになつた。かゝる情勢の下に王子が直面した最大の困難は、在來の地理的知識の重壓であつた。アリストテレースによれば、熱帶地方には人は住めないのである。この考は、プトレマイオス、アラビアの學者、アルベルトゥス・マグヌスなどを經て、この時代になほ通用してゐる。もしさうであるならば熱帶地方に人を送るのは無益の犧牲である。しかし王子はこの知識のかせを破らうと努力した。マルコ・ポーロの旅行記を初め、アフリカの內地についてのさま〴〵の報告を集めて、熱帶地方についての知識を革新しようとする。この立場

にとつても、暗い海やボハドル岬はまさしく新しい視界を遮つてゐる關門であつた。王子は在來の知識の立場よりする非難に對抗しつゝ、辛抱强くこの關門の突破に努力したのである。

遂に一四三四年に至つてこの第一の關門は突破された。或る失錯で王子の寵を失つたギル・カンネスといふ家臣が、その寵を回復するために、命がけで、ボハドル岬を廻つて見たのである。決行して見ると在來の恐怖が根據のないものであることが解つた。彼は歸れない筈のところからちやんと歸つて來た。これに力を得て後繼者がリオ・デ・オーロまで行つた。こゝは北回歸線、熱帶地方の入口である。が岸邊に見える魚の網は人跡を示してゐる。熱帶地方に人が住めぬといふ理論は、まだ破れるまでには至らないが、こゝで動搖し始めたのである。

ボハドル岬が突破され、熱帶の門が開かれると共に、探檢の船は續々と前進し始めた。一四四一年には白い岬（カボ・ブランコ）、一四四三年にはアルキム灣。それと共に土人と友交を結ぶ新しい方法が採用され、アルキム島に根據地を作つて貿易を始めた。數年後にはサグレス附近のラゴスの商社が六艘の貿易船を送るに至つてゐる。この貿易の成功は王子に對する反對者を沈默させた。人々は漸く貿易に乘り出して來た。

が更に重要な突破は、一四四五年の綠の岬（カボ・ヴエルデ）の發見である。この時はディニズ・ディアスが王子



の計畫に從つて更に南方のニグロの國土に達しようとしたのである。モール人とニグロとの境界線はセネガル河であつたが、ディアスは大膽にこの河口を越えて、アフリカの西への突端まで來た。土地の黑人はこの巨大な船を見て非常に驚いた。がそれよりも一層驚いたのは、この岬の美しい綠を見た白人なのである。北緯十五度のこの熱帶地方に於て、植物は旺盛に茂り、鳥獸は豐かに榮え、溢るゝほどの食糧を人間に提供してゐようとは！　こゝに於て熱帶に人が住めぬといふ理論は完全に崩壞したのである。

これは王子ヘンリの仕事の中核をなすものと云つてよい。ギリシアの權威者の書物よりも自分の眼の方が信用出來るといふことを人々ははつきりと悟つた。こゝに地球に對する認識の新しい展望が開けてくる。王子はこのことを期待して永年の努力を續けて來た。今やそれが報いられたのである。そこに漕ぎつけるまでは、彼と確信を共にする人は非常に少かつたであらうが、今や彼は全面的に航海者たちを感化し、その眼をひらくことが出來た。

かくして發見の努力は一層高められた。翌一四四六年にはガムビア河からシェラ・レオネの近くまで。しかしニグロの抵抗もまた一層熾烈となつた。前に白い岬を發見し、今度ガムビア河に達したトゥリスタンは、ヌネズ河をボートで溯江してゐた時、突然武裝したニグロの小舟に取圍

まれ、全員毒矢で殺された。ところで船に殘つてゐた書記と四人の水夫とが、そこから大洋に出て北に航し、二ヶ月の後に安全に歸着してゐる。その間陸を見なかつたと云つてゐるのを見ると、岸傳ひの航海法から脱却して廣い大洋に出る自信が出來てゐるのである。しかもそれを書記と水夫とで敢行し得たことは、航海の技術の急速な進歩を物語るものと云つてよい。眼界の擴大は技術の擴大を伴つてゐたのである。

この形勢の下に王子はインドへの航路の發見を意圖し始めたらしい。特にインドに臨むアフリカの東岸、エチオピアの高原は、プレスター・ジョンの國として依然として強い引力を持つてゐたらしい。併し彼の送つた最後の探檢隊は未だなほニヂェル河上流地方を目ざしたものに過ぎなかつた。卽ち一四五七年にディオゴ・ゴメスがセネガルの內地に大河東に走れりとの報を齎したのを取上げ、ゴメスほか二人の下に三艘の探檢船を派してガムビア河を遡上せしめたのである。この探檢隊はカントルの町に到り、テュニスやカイロの隊商がそこまで來ること、シェラ・レオネの山々の彼方に大河東流せることなどを聞いて來たが、實地を踏査するまでには至らなかつた。

王子はこれらの永年の探檢に財產を蕩盡し、多大の借金を殘して、一四六〇年六十七歲にして歿した。アフリカの海岸は未だギネアにも到らなかつたのであるが、しかしポルトガルの海國としての大きい仕事は既に彼によつて基礎を置かれたのである。關門は既に突破された。あとはただ王子の個人的な仕事が國民的・全體的な仕事として成育し來るのを待つのみであつた。さうしてその成育は極めて着實に步一步と進められた。

三　バスコ・ダ・ガマによる實現

ヘンリ王子の歿後、その甥に當るアフォンソ五世は、初めの內熱心で、モンロヴィアあたりまでの探檢に關係したが、その後國內關係に沒頭して海の企業から手をひいた。しかし貿易は益〻盛んとなり、その儲けも巨額に上るやうになつた。一四六九年にはフェルナン・ゴメスがギネア海岸の貿易獨占權を年五百デュカットで五年間許されたが、それには自費で年百レガ（約550km）づつ前進することが義務として附いてゐる。卽ち探檢が儲け仕事として引き合ふやうになつたのである。ギネア海岸はかくして迅速に獲得された。一四七一年には更に他の二人が黃金海岸からニヂェル河口を經て赤道の南まで出た。トスカネリが西航を勸めた（1474）のに對し、ポルトガル人が冷淡であつたのは、この好況の故であると云はれてゐる。

かういふ情勢の下に、一四八一年、アフォンソ五世の子ジョアン二世が立つた。ヘンリ王子の

精神はこの王に傳はり、再びアフリカ囘航の企てが促進され始めた。既に卽位前七八年の間、彼はギネア貿易の收益からその收入を得てゐたのであり、また前述のゴメスが五年間に如何に儲けたかをも見知つてゐる。それに加へて卽位の年には敎皇シキストゥス四世の敎書がポルトガルに對してアフリカの發見地の所有を保證した。それらのことがこの王の熱心をそゝつたのである。こゝに於てアフリカ囘航の仕事は漸くポルトガルの國家的事業としての性格を現はし始めた。一四八二年には黃金海岸に城砦が築かれる。王はギネアの領主と稱する。發見地に石の標柱を建てることが定められる。

この石柱を最初に船に積み込んだ人はディオゴ・カンである。一四八四年に二艘で出發した。この探檢はドイツのコスモグラーフのマルチン・ベハイム（1459—1507）が同行したことによつて有名である。彼等はコンゴー河口に最初の石柱を立て、河を遡つて、この繁華なコンゴー王國の最初の訪問者となつた。コンゴーの王はキリスト敎を求めて使者カッスタを送り、カッスタはポルトガルで洗禮を受けさへしたのであるが、ポルトガル人はその踏査した沿岸全體をポルトガル王の名に於て占有し、通辯養成のために所々で土人を捕獲した。

コンゴーから南へは更に二百レガ進出、ネグロ岬（南緯15°40′）に第三柱を建て、十九ケ月にして歸還した。ベハイムの功績は非常に高く評價され、王よりキリスト敎騎士團の騎士に敍せられた。

その翌年一四八六年にはバルトロメウ・ディアスが五十噸の船二隻で出發してゐる。一人の指揮官にあまり多くの責任を負はせたくないといふ格率に從つて、ポルトガルの政府は一囘毎に司令官を變へたのである。王子ジョアンが第二船の船長として同行した。この航海ではコンゴー海岸より喜望峰の東に至るまで、土人への贈物を持つた黑人の女に上陸させて、土地の景況を窺ふと共に土人にポルトガル人の强さや素晴らしさを宣傳せしめた。さうしてそのポルトガル人はプレスター・ジョンの國を探してゐるのだと云はせた。さういふ噂をひろめれば司祭王の方から迎ひを寄越すかも知れぬと考へたのであるから、プレスター・ジョンの傳說はまだ相當に强い力を持つてゐたと云はなくてはならぬ。

今度の第一の石柱は鯨灣（ワルフィシ・ベイ）の北方に建てられた。そこから南下してセント・ヘレナ灣のあたりへ來ると、ひどい暴風に襲はれ、十三日間南東へ流された。人々は寒流と寒さとに驚かされてゐる。風いでから數日東航したが陸が見えない。そこで舵を北に向け、アフリカ大陸の南端に達したのである。そこから更に東航してモッセル灣からアルゴア灣まで行き、そこの小島に最前線

の石柱を立てたが、この時船員たちは疲勞困憊の極に達し、船長に歸航を要求した。食料も既に盡きかけてゐるといふ。しかしディアスにとつてはそれは遺憾の限りであつた。アフリカの南端を廻つたことは確實である。目的はもう大きい困難なしに達せられるであらう。で彼は、もう二三日航海して海岸線が北に向かなければ歸らうと答へた。さうしてなほ二日航海し、最前線の石柱よりも二十五浬前進して大魚河（グレート・フィッシュ）まで出たが、遂に止むなく歸航を決意した。彼は殘念の餘り石柱を抱いて泣いたといふ。實際こゝで海岸線は既に北に向きかけてゐたのである。

ディアスは歸路喜望峰に寄つた。こゝは往路にはあらしのために知らぬ間に通り過ぎたところである。で彼はあらしの岬（カボ・トルメントソ）と命名したのであつたが、ジョアン王はそれを喜望峰（Cabo da boa esperanza）と改名した。印度洋への門は開かれた、香料の國への水路は見出された、といふ確信がこゝに現はれてゐる。ディアスの歸着は、一四八七年の末であつた。

ジョアン王はなほ他に數人の者をシリア、エヂプト、インドへと送つてゐる。中でもペロ・デ・コヴィリャムはインド西岸よりアフリカ東岸を遍歷し、同じく王の派遣したユデア人に本國への通信を托した。ギネア海岸のポルトガル船は南航してアフリカの端に達し、インド洋に出てソフアラとマダガスカルに向ふべしと云ふのである。インドへの水路はこの方面からも確證された。

しかしその水路が打通される前にコロンブスが西インドから歸つてくるといふ事件が起つた。ジョアン王はコロンブスを引見してその Zipangu 訪問談を聞いたのである。その連れ歸つたインディアンを見るとどうもアジアの近くまで行つたらしい。彼が第二回の航海に出れば、或はポルトガルより先に香料國に着くかも知れない。さうなればヘンリ王子以來の努力は水泡に歸する。でジョアン王は急いで新しい航海の準備に取りかゝつたが、果さずして一四九五年に歿した。

次で卽位したのが當時廿六歳の膽力あるマノエル王（1469—1521）である。早速準備の仕事を再開させようとしたが、一四九七年までのびた。前の航海の司令官ディアスが三艘のインド行艦隊（百トン乃至百二十トン。サン・ラファエル、サン・ガブリエル、サン・ミカエルの三隻。船員の數は一七〇人、二四〇人、一四八人等諸說がある。）の艤裝を指揮した。新しい司令官はバスコ・ダ・ガマであつた。一四九七年初夏、出發に際して、司令官はプレスター・ジョン、インドのカリカットの王、その他の諸君主宛のポルトガル王の推薦狀を貰つた。この航海がポルトガル國の行動であるといふことは、形式の上にもはつきりと示されて來た。

綠の岬あたりまでディアスが同伴し、そこで分れてガマは喜望峰に直航した。海は相當に荒れた。一ケ月航海の後、陸に近寄り、喜望峰に達しようとしたが駄目であつた。實際この後になほ數ケ月を要してゐるのである。また大洋に出て南へ下つて行く。乘員はもう歸航を思ふやうにな

る。ガマはそれと勞苦を共にして夜もろくゝ眠らない。やがて南の冬になつて日が短くなる。一日中がほとんど夜である。乘員は恐怖と勞苦とに病み疲れて食事の用意さへ出來なくなる。不平がひろまり歸航の意が高まる。しかしガマは烈しくそれを斥けた。乘員が寒さに慄へても頑として引き返さなかつた。

この司令官の確信、決意、統率力がこの劃期的な企ての核心である。が未知の世界への突進、たゞ科學的な認識の力にのみ賴る大洋航海、その中で搖がぬ確信と決意とを持ち續けることは、たゞ科學的な推理力のみのなし得ることである。こゝに強い意志と強い思索力との密接な結合が見られる。迷信に捕はれ易いやうな性格の人は、どれほど強い意志を持つてゐようとも、探檢家にはなれないのである。

ガマは陸上で緯度の高さを計るためにセント・ヘレナ灣に入つた。當時まだ觀測器の使用に習熟してゐなかつた船員たちは動く船の上で正確な觀測をなし得なかつたからである。そのあとで數日續きのあらしの中を遂に喜望峰に達したが、その後もあらしは止まず、難航が續いた。日夜身心の休まる暇がない。しかしガマは、インドに着くまで一歩も退かぬといふ。船員は再び動搖し始めた。彼らにとつてはインドに着くといふ見込ははつきりしないのである。我々は盲目的に破滅の中へ追ひ込まれたくない。彼は一人、我々は多數ではないか。これが謀叛の理由であつた。一水夫の內通によつてこれを知つたガマは、策を以て謀叛者たちを捕へ、鎖につないだが、しかしこの無智な連中がガマやその味方であるパイロットや舵手などを片附けたあとで、船をどこへ持つて行かうとしてゐるかを考へると、彼は絕望的な憤りを感ぜざるを得なかつた。航海書を海中へ投げ捨てて、さあ舵手もパイロットもなしで歸れるかどうか、やつて見るがいゝと啖呵を切らうとさへもした。

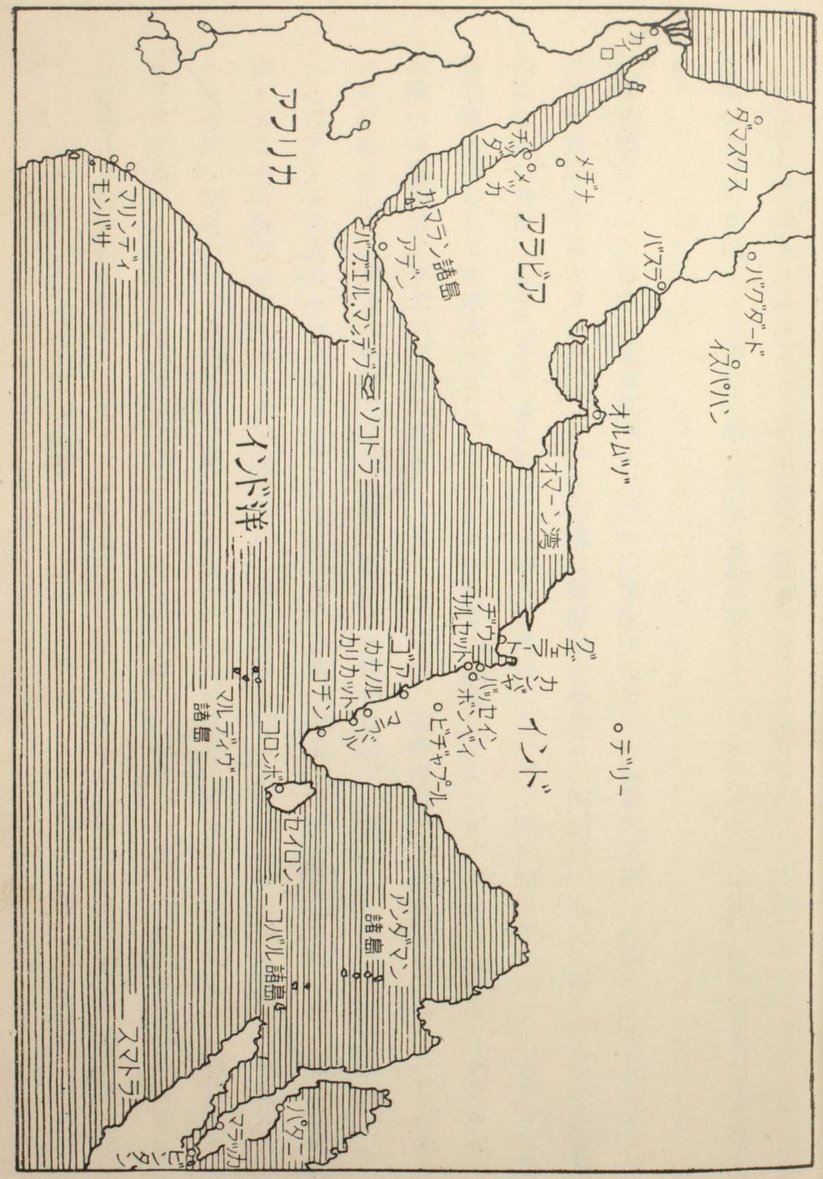
一四九八年正月に再び陸に近づいて船を修繕し水を積込んだが、更に航海を續けてコリエンテス岬まで來ると、烈しいモザンビク潮流に流されて沿岸を離れ、ソファラに寄ることが出來なかつた。しかし辛うじてザンベジ河口に入ると、アラビア語を解する明色の混血兒に逢ふことが出來た。もう少し北へ行くと航海が盛んであるといふ。いよ〳〵アラビア人の貿易圈へはいつたのである。先づ一息といふわけで、船の修繕や船員の休養のために一ケ月留まつた。

再び海を航してモザンビクの港につく。こゝには既に明白にアラビア人の勢力が現はれてゐる。土人はアラビア風の服裝をつけ、その首長（シャイヒ）は北方キロアのアラビア人の支配下にある。アラビア商人はモザンビク島に倉庫を持ち、ニグロと活潑な貿易をやつてゐる。ガマは通辯によつて來意

を告げた。我々はキリスト教國の有力な王から派遣され、既に二年、荒海を航海し廻つた。今や仲間と別れて香料の國を目ざすのであるが、道不案内であるから信用の出來るパイロットを寄こして貰ひたいと。この申入れには何ら反對すべきものはなかつたから、ガマは生鮮食料品やモール人ダヴァネや水先案内を入手することが出來たのであるが、アラビア人はこの商賣敵を恐れて策動を始めたらしく、水先案内は不信であり、さまゞ〳〵の小競合ひが起つた。結局は不快な印象を以てこの港を去つた。

四月下旬モンバサに着いたが、こゝでも同樣であつた。土人の首長（シヤイヒ）は初め親切でやがて態度を變へた。アラビア人の陰謀があつたらしいことも同樣であつた。でガマは月夜にこの港を脫出し、途中土人の船（ザンブウク）を捕へて北方マリンディに案内させた。

マリンディの態度は非常に好意的であつた。ガマは盛裝して祝砲の轟く中にマリンディの首長と會見すべき土人船（ザンブウク）へ乘り込んで行つたが、岸邊や人家は見物人に溢れてゐた。そこでガマは劍、槍、楯などを贈つた。土人の首長も補給と休養を承諾した。後にガマは首長をその城に訪問したが、その時には、インドへのパイロットを借さう、しかし香料をあまり高く買つてくれるな、相場を亂すから、と云つたといふ。出帆前に首長は船へ來訪した。



かくして一四九八年四月二十四日出帆、南西モンスーンにのつて、二十二日にしてインドの岸に着いた。その頃インド西岸の最も繁華な貿易港であつたカリカットに着いたのは五月二十日である。

この頃のインドは既に數世紀來イスラムの支配下にあつて無數の王國に分裂してゐた。カリカットを首府とするマラバルは、インド尖端の西海岸を細長く三四百粁に亙つて領し、貿易の隆盛の故に海の君主（Samudrin, Samorin）の國と呼ばれてゐた。十四世紀以來このカリカットは香料の貿易港として西岸第一となつたが、その繁榮は主としてアラビアの商人と船とに負うてゐる。西歐への輸出はアラビア商人の獨占で、エヂプト經由、地中海諸港に運んだのである。でこのインドの港にもアラビア人の居留地が出來て居り、來住者は四千家族以上に達してゐたといふ。

このアラビア人のインド貿易の中心地へガマの艦隊が乗り込んで來たのであつた。既に數世紀來イスラムは西方に於て絶えず反擊をうけ、最近には遂にヨーロッパに於ける最後の根據地をさへ失つたのであるが、今やその反擊が在來平和であつた東方の貿易圏にさへも及んで來たのである。アラビア人は非常な衝擊を受けざるを得なかつた。從つてこの後のインド貿易の展開は、西歐に於ける古い對立を新しくインドの舞臺に於て展開するといふ意義を持つてゐるのである。

しかしガマが表面に於て求めたのは、海の君主、カリカット王との平和な通商關係であつた。尤もその際ガマが幾分の恫喝を混へてゐたことは否定出來ぬ。彼が最初使者をして告げしめた來意にいふ、我々は西洋最強のキリスト教國王が胡椒藥品等を買ふために派遣した五十隻の大艦隊の一部である、暴風のために四散して我々のみがこゝに着いた、と。次で第三船長のクエリョを王に送り、自由な貿易と平和な交際とを提議して、その保證あらば提督は贈物とポルトガル王の書翰とを捧呈するであらうと申入れしめたのであるが、この際にもクエリョはかなり強引に王に謁見し王の返事を強要してゐるのである。王の周圍がこの新しい關係を喜ばなかつたことは確かであるらしい。が王は承諾し、その結果ガマの正式謁見となり、マノエル王の書翰が捧呈された。その内容は友交と平和な通商とである。次で王の正式の返事がもたらされた。こゝに於て商館が設立され、西歐人のインドに於ける最初の貿易が開始された。ポルトガル人は値の安いことを喜び、カリカット人はキリスト教徒が倍の値で買つてくれること、品質もアラビア人ほど詮議しないことを喜んだ。が喜ばなかつたのはアラビア人である。彼らによれば、まともな商人は惡質の品を倍の値で買ふことはしない。恐らくこの貿易は口實に過ぎないであらう。かういふ見解のもとに、商人らの陰謀が始まつたとせられてゐる。

陰謀はまづガマの取引を遷延させ、アラビア商船隊の到着するまで引き留めて置かうとする手段によつて行はれた。これを察したガマは積荷を終る前に引き上げることを決意した。そこへ王からの申込みでガマは再び王と會見したが、その機會に事件が起つたのである。王はポルトガル人が海賊であるといふ噂に對して辯明を求めた。ガマは、ポルトガル王が海の君主の盛名に動かされて友交と香料貿易關係を結ぶために、また特にキリスト教の傳播を重んずるが故に、遙々と船を送つたのであること、アラビア人はヨーロッパに於てポルトガル人の生得の敵であつて、ここでもポルトガル人を害しようとしてゐることなどを述べ、戰爭などの起らない樣アラビア人の陰謀から彼を護つて貰ひたいこと、アラビア人によつて葛藤に卷き込まれない樣用心してほしいことなどを請うた。王は諒解したやうに見えたが、しかしガマは歸路モハメダンの知事によつて捕へられ、保護の名の下に軟禁された。ポルトガル人がこの侮辱を怒つて手出しをすれば、彼らを全滅させることが出來るのである。しかしガマは冷靜に構へてゐた。アラビア人はガマを殺すことを要求したが、しかし知事の方では、きつかけなしに彼を殺すわけにも行かなかつた。結局ガマは商館長を人質に殘して船に歸ることが出來た。さうして後からこの人質を盜み出さうと企てたが、それはうまく行かず、騷ぎの内に商館の倉庫を掠奪された。もつとも人質の方は、海上

に出てゐる土地の漁夫を捕へて來て、それと交換に取りかへすことが出來たが、喧嘩はいづれとも勝負がつかず、ガマは復讐を誓つてこの地を去つたのであつた。

この小競合が後の大仕掛けな爭鬪の種子なのである。未知の世界への突入によつてインドへの水路が開かれた途端に、そのインドの地においてモール人との戰が開始された。航海者ヘンリ王子を動かしてゐた一つの動機が、こゝで現實になつて來たのである。

ガマはその後北方カナノル港で十分の商品を積込み、ゴアの南方の島で船を修繕し、一四九八年の末に近い頃、北東モンスーンに乘つてインド洋を越え、翌一四九九年一月八日にマリンディに着いた。リスボンまで歸つたのはその年九月であつた。故國での歡迎は實にすばらしいものであつた。ガマは伯爵の位とインド洋提督といふ肩書のほかに、多くの利權や賞與をうけた。部下もそれ〴〵十分に報いられた。歡迎のためには盛大な行列やミサが催され、その度毎に王が臨席した。

これはポルトガルの國民がインド航路の發見をいかに高く評價してゐたかを示すものである。ヘンリ王子以來の企業は、粘り強い持續の後に、遂に貫徹された。それを國民ははつきりと感じたのであつた。

四　インド洋制海權の爭奪

がこの貫徹は同時に新しい海の企業の出發であつた。インド貿易を續ける氣ならば、久しく香料を獨占してゐたモール人との眞面目な爭鬪を覺悟しなくてはならぬ。信仰上の敵對關係はこの爭鬪を極めて深刻ならしめるであらう。そこには平和的解決の見込はない。しからばこゝで、武裝し戰鬪準備を整へた商業に出で立たなくてはならない。それには威壓的な艦隊が必要である。

こゝにおいて政府は、十隻の大船と三隻の小船よりなる新しい艦隊を建造した。ガマはその企畫や監督に當りはしたが、司令官とはならず、親友ペドラルヴァレス・カブラルがその位置についた。乘員は千二百。前回の五倍乃至八倍である。その中に宣教師や商人もまじつてゐた。

このカブラルの航海は、一五〇〇年三月九日發、途中ブラジルの海岸に接觸し、その報告に一隻を歸した。（既に綠の岬で一隻を歸しこれで二隻目である。）その後喜望峰に向ふ頃二十日の間あらしに逢ひ、遂に四隻の難破船を出した。他にマダガスカルの東に迷ひ出たのもあり、カブラルの手に殘つたのは六隻となつたが、インド洋は八月に十六日間で横斷した。さうしてゴアの南方の島で修繕し休養した後に、右の六隻を以てカリカットに現はれた。王は再び平和的な態度に

出で、再び取引が開始されたのであるが、いかにも不活潑であつた。モール人の引のばし策であらうと考へられた。三ケ月間に二隻だけが積込濟となつたに過ぎない。カブラルは遂に癇癪を起してモハメダンの商船の强行搜索を行つた。そこにも荷物はなかつたのであるが、しかしそれが騷動のきつかけとなつた。モール人に煽動された民衆は、暴動を起し、商館を掠奪、商館長を殺した。こゝに於てカブラルは碇泊中の船十五隻を燒き、カリカットの町を一日中砲擊した。遂に火蓋は切られたのである。

やがてカブラルはコチン、クランガノル等他の港で荷を積み一五〇一年一月十六日出帆、歸路一隻を失ひ五隻を以てリスボンに歸つた。それでも積荷の利益は損失を十分に補つたといふ。從つてインド航路を繼續すべきか否かの問題は、種々論議の末、結局繼續せられることに決した。インドに於ける盟邦と、ヨーロッパの船や武器の優秀さとを以てすれば、モハメダンを壓迫して香料國に根據地を作ることは不可能でない。これは異敎徒敎化のためにも必要である。がそのためには一層强力な艦隊がなくてはならぬ。それが結論であつた。

既にカブラルの歸着以前に王は四隻の艦隊をインドに派したのであるが、こゝで更に二十隻の艦隊を建造し、それに八百名の兵士をも乘せて、再びガマを司令官とし、一五〇二年の二月及び四月に出發せしめた。ガマは今度は極めて明白に戰鬪的態度に出で、到るところで高飛車に出てゐる。八月インド洋を渡つてゴア附近に投錨したのであるが、その間、見かけた船はすべて捕へて掠奪する。インド船をも燒打してゐる。そこから南下しカナノルへ行く途中では、商品と巡禮者とを滿載してインドへ歸る大船を捕へ、掠奪・放火・擊沈・殺戮など殘虐を恣にしたと云はれる。この船はエヂプトのスルタン或はその部下の所有らしく、直ぐ後に敎皇への抗議となつた。カナノルでは款待を受けたが、しかしガマはこの町に對しても紅海からの貿易やカリカットとの通商を禁じてしまつた。そこからカリカットへの途上、海の君主は恐れて平和の申入れをしたが、ガマはそれに對し二ケ條の要求を提出した。前に商館長を殺した際に掠奪した財產の返還、及び紅海から來るモール人の入港禁止がそれである。海の君主は答へた、前の問題はメッカ船掠奪と相殺して貰ひたい、後の問題については、四千家族以上のアラビア人の追放は不可能である。ガマは怒つて返事は自分で持つて行くと答へて艦隊を町の前へ進めた。海の君主は恐れて更に辨償金を申出たが、ガマは受けた恥は金では償へないとはねつけた。さうしてポルトガル人の間にさへ尻込みする人の出るほど殘虐の限りをつくしたと云はれてゐる。カリカットの町は二回砲擊した。平和を求めてゐるのではない、降服を欲するのだ、これがガマの態度であつた。

海の君主の國では全國復讐戰の用意を始めた。あらゆる川では大小の軍艦が作られた。さうして策略を以てガマの船一隻だけを釣り寄せ、夜襲をかけたが、ガマは巧みに難を脱れた。その後ガマがコチンで積荷を終へカナノルへ行く途中を要して襲撃したが、これも大砲で撃退された。船の數がいかに多くても武器の上ではどうにもならないのである。

かういふ情勢の下にガマは、大船五隻小船二隻の艦隊を殘してインド沿岸を巡航せしめ、自分は歸途について一五〇三年九月リスボンに歸着した。

あとに殘つた艦隊はアラビア人の貿易封鎖のために紅海の入口の方へ巡航に出かけたが、その留守に海の君主はコチンを攻撃して占領した。しかし艦隊は七八月頃あらしに擊破されて戰鬪力を失ひ、コチンを救ふことが出來なかつた。ところがガマの歸着以前、一五〇三年四月六日に有名なアフォンソ・ダルブケルケとフランシスコ・ダルブケルケとが各三隻を以て出發し、八月には既にマラバルの岸に着いてゐる。アフォンソはコチンを奪回し、そこに最初のポルトガルの要塞を築いた。翌年一月末歸航の際にはモザンビクへ直航し、九月初めリスボンに歸着してゐる。フランシスコは歸途難破して歸らなかつた。

更にアルブケルケに踵を接して三隻の艦隊が紅海巡航の途に上つたが、途中海賊などを働いてあまり功績がなかつた。しかし翌一五〇四年に出發した十三隻の艦隊は、軍需品と千二百の乘組員とを滿載して八月に到着した。アフォンソの歸航後それまでの間に、カリカットの王は再び六萬の兵をくり出してコチンに迫つたのであつたが、僅か百六十名のポルトガル兵によつて守られたコチンを奪取することが出來なかつた。大砲の威力の故でもあるが、また土人の戰術の幼稚であつた故でもある。新來の艦隊はカリカットに二日間砲擊を加へ、カナノル附近でアラビア人の艦隊を打ち破り、十分の荷を積んで一五〇五年七月にはリスボンに歸着した。インドの海には五隻の艦隊が三百人の乘員を以て殘つた。他に二百五十名の兵がコチン、カナノル、コラム等を守つた。

以上の如くにしてガマのインド航路打通後僅かに四五年の間にインド洋は戰雲に覆はれるに至つた。この形勢によつて痛切な打擊をうけたエヂプトのスルタンは、一方使を派して教皇に抗議を申込むと共に他方決戰に備へて艦隊の建造にとりかゝつたのである。教皇への抗議には、アラゴンのフェルディナンド王がスペインのモール人に加へた殘虐、及びポルトガルのマノエル王がインドのイスラム教徒やアラビア人に加へた傷害を非難し、もしこれらの諸王がイスラムに對する怒りを捨てなければ、スルタンもまた自國領内に於けるキリスト信者を同樣に扱はざるを得な

くなるであらうとあつた。また教皇がマノエル王に對しインドへの航海を禁じないならば、スルタンもまたその艦隊を以て地中海の沿岸を荒しキリスト教徒に復讐するであらうと云つた。教皇はそれを兩王に傳へたが、マノエル王の返事は極めて强硬であつた。我々が艦隊を以てインドへの道を開き祖先の知らなかつた國々を探求しようと決意したとき、目標となつたのは、惡魔の助けによつて地上に多くの惱みをもたらしたモハメッド教を絶滅することであつた。スルタンの威嚇に對する最善の答は新しい十字軍を召集することである。威嚇によつて信仰の戰をやめる如きことは決してせぬ。かくして平和な協調の望は全然不可能となつた。スルタンは二十五隻の艦隊を小亞細亞の海岸に送つて船材を取り寄せようとしたが、ロードス島でヨハネ騎士團の襲擊をうけ、更にあらしで難破し、僅かに十隻が目的を果したのみであつた。その結果建造された船は大六隻小四隻に過ぎなかつた。

ポルトガルはこれに備へて、種々の對抗策を講じた。司令官の地位に持續性を與へるため『副王』の制度をつくり、最初の副王としてフランシスコ・ダルメイダを任命したのがその一つである。艦隊はインドに常駐せしめ、たゞ貨物船のみを歸航せしむることにしたのが他の一つである。この新方針の下にアルメイダの率ゐた艦隊船團は二十隻以上で、軍艦には三年以上の服役義務を有する千五百の兵員が乘り込んだ。最大の軍艦は四百トンであつた。

この艦隊は一五〇五年三月末に出發、七月半ばにモザンビクに着いたが、それからはもう軍事行動に移つてゐる。先づアラビア人の根據地キロアを征服して城を築き、守備隊と大砲を殘して行く。次でモンバサは少しく抵抗したために掠奪の上燒き拂はれた。インド沿岸では先づゴア南方のアンヂェディヴの島に城を築き、次で南方オノル港では在泊中の船と町とを燒き拂つてしまつた。かくしてアルメイダは十月末カナノルに到つて副王の位についたのである。この町にも城を築き百五十人の兵をして守らしめた。丁度その頃南方コラムに於て二十隻のアラビア船の入港を機としてポルトガル商館員殺戮の事件が起つたため、副王の子ロレンソは八隻の艦隊をひきゐて急行し、アラビア艦隊を全滅せしめた。副王自身はコチンに到つてマノエル王の名の下にコチン王に戴冠せしめ、この地に石の城を築くことを承諾させた。

この年の末から一五〇六年の初めへかけて八隻の貨物船が香料を滿載して歸國の途についた。これらは半年或は十ケ月の後に無事リスボンに着き、大成功として迎へられたのであるが、他方インドに殘つた副王は、アラビア艦隊の攻擊にとりかゝつた。かくてロレンソはこの年三月、カナノル港外に於てカリカット王の二百隻の艦隊を見事にやつつけたのである。丁度その頃に、ベ

ンガル灣沿岸からマラッカ、ジャバまで遍歴して來たヴェネチア人ルドヴィコ・ディ・ヴァルテマが來訪し、諸方の狀況を物語つた。アラビアの商船が從來の航路を變へ、マルディヴ諸島經由セイロンに來り、東方の產物を入手することも明かとなつた。で副王は再びロレンゾを派遣してこの航路を遮らしめようとしたが、目標を誤つてセイロンに達し、なすところなく歸つて來た。しかしアルメイダの方針はインド西岸の要地にポルトガルの勢力を確立することであつて、そのために彼は無暗に事を起したり手をひろげたりするのを好まなかつたのである。

然るに本國の考はさうでなかつた。信仰の敵アラビア人が出沒する限り、インド洋のどの沿岸も、攻擊し征服すべきである。さう人々は考へた。さうしてそれを形に現はしたのが、前に一度インドに來たアフォンソ・ダルブケルケである。彼の艦隊の出發はアルメイダの出發後二回目で、初めのは八隻の艦隊を以てアフリカ東海岸の經營に向つたのであるが、うまく行かなかつた。次に一五〇六年の初めにアルブケルケが五隻の軍艦、千三百の兵をひきゐ、十隻の貨物船團と共に出發したのである。船團はインドに直航し、艦隊は紅海の入口やペルシア灣に向ふ筈であつたが、マダガスカル島の探檢でその年を終り、ソコトラ島の經略で翌年の夏を迎ふるに至つてゐる。このやうに海の勢力を分散させることは丁度アルメイダの怖れたところなのであるが、果してインド沿岸の根據地は種々の危機に見舞はれたのである。

その一つはカナノルの謀叛である。ポルトガルに友交的であつた王が歿して後嗣が立つた後に、ポルトガルのカピタンがカナノルの舟を沈めた事件が起り、遂に王は怒つてカリカットと結びポルトガル人の城を包圍するに至つたのである。守兵が敢鬪して四ケ月まで持ちこたへた時に、一年も遲れた船團が到着して、城を救つた。一五〇七年八月末のことである。

もう一つはロレンソ・ダルメイダのチャウル（ボムベイ南方）に於ける戰死である。ロレンソは香料取引にチャウルまで行つたのであるが、丁度その頃に、前述のエヂプトの艦隊が押し寄せて來たのである。北方グヂェラートの王（シャー）の提督（Melek Aias もしくは Ass. 恐らくロシア人であつたらうといふ。ヂウ港の知事。）は、四十隻の快速船を以てエヂプト側に附いた。この聯合艦隊をアルブケルケの艦隊と誤認したロレンソは、川口に碇泊したまゝ敵を迎へることになつたのである。そこで彼は壓倒的に優勢な敵に敢然として立ち向ひ遂に戰死した。漸く逃げ歸つた他の船がこれを副王に報告すると、副王は全艦隊を集結してモハメダンに復讐することを企てた。がすぐには捗らず、エヂプトの艦隊はヂウで冬越しをした。

かういふ事件の間にアルブケルケはペルシア灣の入口を荒し廻つてゐたのである。一五〇七年

八月下旬に七隻四百人の兵員を以てソコトラを出發し、オマーン灣沿ひのアラビアの岸にある商港を片端から攻擊し破壞した。これらの町々は數世紀來インド貿易に參加して相當に榮えてゐたのであるが、キリスト教世界に對して敵對したといふことは全然ない。しかしそれがアラビア人の町々であるといふことは、アルブケルケにとつては、信仰の敵であるといふことと同義であつた。從つてそれらの町々はヨーロッパの武器の優秀性を容赦なく思ひ知らされたのであつた。その破壞・燒打・掠奪・捕虜殺戮などの殘虐なやり方を、當時の本國のポルトガル人は誰も非難してゐない。彼らは神聖な信仰のために戰つてゐるのであり、神を味方としてゐるのであるから、それに刃向ふ敵に對してはどんな殘虐も當然のことと思はれたのである。

かくして九月末にポルトガル艦隊はオルムヅに現はれた。こゝには三萬の守備兵があり、その中に四千のペルシア弓射兵も加はつてゐたのであるが、アルブケルケは大砲の齊射を行ひつゝいきなり港の中に突入した。さうして降服とポルトガルの主權の承認とを要求し、聽かずば町を壞滅せしめると威嚇した。要求は拒絕された。アルブケルケは港内の商船を擊沈した。弓射兵をのせた二百艘の小舟が攻擊して來たが、大砲の前には脆く壞えた。そこで町は降服し、ポルトガルの主權や年々の貢金や城塞の築造などを承認した。十月には既に築城が始まつた。しかし部下たちは商船の拿捕やインドの香料貿易などを望み、追々にアルブケルケの統率を離れかけた。さうしてこの不和につけこんだ町の謀叛に際して、三隻の軍艦は勝手にインドに向け出帆してしまつた。止むを得ずアルブケルケはソコトラに引き歸し越冬せざるを得なかつた。

丁度この頃に副王アルメイダはインド沿岸に於けるエヂプト艦隊との決戰を企てつゝあつた。ポルトガル艦隊の勢力分散を喜ばなかつた彼には、アルブケルケのペルシア灣遠征そのものが不愉快であつたので、そこを脫して來た三隻の船長たちの訴へを取り上げ、一五〇八年五月にこの事件の調査を命じた。その結果彼は、アルブケルケがその暴行によつてポルトガル王の利益を害するといふ確信を一層强めた。で彼はオルムヅの攝政に書を送り、アルブケルケの有害な戰爭遂行を不愉快に思ふこと、オルムヅの貿易船の安全を保障することなどを傳へた。

他方アルブケルケは、ソコトラが根據地として役立たず、むしろその救濟につとめなくてはならなかつたために、一五〇八年の盛夏までそこにぐづ〳〵してゐた。そこへリスボンから援軍が來たので、前の殘兵と併せて三百名の兵を掌握し、再びオルムヅ攻擊に向つて九月に港の前に着いた。オルムヅは前年の城塞を完成し、脫走兵に鑄造せしめた大砲をも備へてゐた。だからアル

ブケルケは港を封鎖するに留めざるを得なかつたが、なほその上に彼はアルメイダの書翰をつきつけられたのである。その結果あまり效果を上げることも出來ず、インドに向つて引き上げた。副王に逢つたのは十二月であつた。

副王の任期はこの十二月を以て終り、次にはアルブケルケが總司令官となる筈であつた。しかしアルメイダはエヂプト艦隊との決戰、子のための復讐戰を終るまでは、任を離れるを欲しなかつた。それには彼を迎へて歸る筈であつた船（ホルヘ・ダギアルのひきゐる十三隻の船團の旗艦サン・ジョアン）がアフリカ東岸で沈沒し、豫定の通りに着かなかつたといふ事情も手傳つてゐる。がとにかく任期の切迫に追はれてアルメイダは十二月十二日に北上した。艦隊は總勢二十三隻千六百名であつた。先づ年内にダブールの町を襲撃したが、この町の破壞の物凄さは未曾有のものとして永く語り傳へられたといふ。やがて一五〇九年二月二日にヂウについた。港内にはエヂプト艦隊の他にグヂェラート王の提督の艦隊やカリカットからの來援艦隊もゐたが、翌日アルメイダは港内に突入してエヂプト艦隊のみを攻撃した。片端から乘り込んで行つて沈めるのである。エヂプトの司令官は辛うじて脫出し馬に乘つて逃げた。インド人の艦隊は形勢を觀望して手を引き、アルメイダもまた、ロレンソの讐であるに拘らず、それらを攻撃しなかつた。グヂェラートの王との紛爭に陷ることを恐れたのであらう。アルメイダの目ざしたのはモハメダンたるエヂプト人をインドの海から追ひ拂ふことであつた。インドの諸王とはなるべく友交を回復したいと望んでゐた。その態度を見てとつてインド側からも手をさしのべた。アルメイダはロレンソ戰死の際捕虜となつた味方のものを受取つて、そのまゝコチンへ歸つた。

アルブケルケは再び指揮權の讓り渡しを要求したが、アルメイダは迎への船がまだ着かないといふ理由でなほ躊躇を續けた。それほど彼はアルブケルケを危ながつたのである。が一五〇九年秋に至つて本國からフェルナン・クティニョが十四隻の船團をひきゐて到着し、司令官更迭に對する確定的な命令を傳へたので、遂に彼は仕事を退いた。さうしてインド經綸についての彼の方針が直ちに崩されるだらうことを深く悲しみつゝ、十二月歸國の途につき、途中アフリカ西岸で不慮の出來事により土人の手に斃れたのである。

五　インド征服

アルブケルケの總司令官就任と共に果して方針は變つた。モハメダンの勢力を驅逐するといふ在來の方針は、今やインドの諸港を征服しようとする侵略的な方針に變つた。インド航路の打通

が國家的事業として取り上げられたといふことの必然の結果がこゝに出て來たのである。

先づ卽座に始められたのは、カリカット攻擊の準備である。それはマノエル王の命令でもあつた。新來のマーシャル・クティニョは、貿易の仕事に對して何らの愛着をも持つて居らない單純な武人で、この戰爭に加はることを非常に喜んだ。そこで、一九一〇年の正月に、聯合艦隊は二千の兵をのせてカリカットの前に現はれ、敵前上陸を決行した。まづ海邊の城を取り、次で町に侵入して王宮をも占領したのであつたが、そこでクティニョが勝利を得たと考へ、兵卒らに散らばつて掠奪することを許したとき、インド軍は反擊に轉じて王宮を包圍し、散らばつたポルトガル兵を襲擊した。クティニョは部下と共に倒れた。後に續いてゐたアルブケルケは重傷を負ひ辛うじて退却した。かくてカリカット攻擊は完全に敗北に終つた。

アルブケルケはクティニョの艦隊をも併せてコチンに退いたが、負傷の癒えると共に再び戰爭の準備にとりかゝつた。一月の末には二十一隻の船が裝備を終つた。今度は王の命令に從つて新しいエヂプト艦隊の邀擊のために紅海に向ふらしく見えてゐたが、アルブケルケはひそかにゴアの攻擊をもくろんでゐたのである。この十年來の經驗で、アフリカからインドへの渡海のためにも、またインド洋の制壓のためにも、ゴアが丁度最適の港であることが解つて來た。從つてその理由のために、卽ちモハメダンと戰ふためではなくインドを攻略するために、ゴアが攻擊目標として選ばれたのであつた。

アルブケルケは艦隊をひきゐて港の入口に達するや、武裝したボートを偵察に派した。丁度その頃ビヂャプール王アディル・シャーはこの町にあまり多くの軍隊を置いてゐなかつたので、偵察隊はいきなり城を奇襲して占領してしまつた。アディル・シャーの軍隊は市民に抵抗するなと云ひ置いて町から引き上げた。翌日市民はアルブケルケに降服を申出で、アルブケルケは町を占領した。艦隊も入港し、長期碇泊の氣構へで索具の一部を片附けたほどであつた。しかしその間にビヂャプール王は大軍を集めて町の救援にやつて來た。ポルトガル人は町を捨てて船に歸らざるを得なかつた。そこで三月の末にはインド軍は艦隊の退路を絶つ工作を始め、海へ出る運河に船を沈めて閉塞した。さうしてポルトガルの船を燒き拂ふために筏に火をつけて河上から流した。アルブケルケは退却を決意せざるを得なかつたが、その退却がまた實に困難であつた。一隻づつ沈沒船の間を縫つて出るのであるが、その間兩岸の堡壘から間斷なく火を投げてくる。それを防ぐには堡壘を襲擊奪取しなくてはならない。それが成功しても今度は淺瀨が船を阻む。陸からの援助は全然ないから食料と水はだん〳〵缺乏してくる。鼠を捕へて食ふ程になる。最初城の奇襲

に成功した勇士は戰死する。士氣は沮喪して脱走兵が出る。その中でアルブケルケはその氣魄を失はず部下を力づけた。さうして遂に八月に至つて淺瀨を超え海に出ることに成功はしたが、しかしこゝでも戰爭は完全に敗北であつたと云ふ他はない。

アルブケルケはカナノルに引き上げて休養したのであるが、その頃に二つの船團が本國から着いた。一つはマラッカの市場（そこへは既に前の年にディオゴ・ロペス・デ・セケイラがアルメイダの支援の下に行つた。）を巡狩すべき命を受けて來たヴァスコゴンセルロスの四隻の船隊、もう一つはゴンサロ・デ・セケイラの率ゐる七隻の商船隊であつた。アルブケルケはこの援軍に力づけられて新しくゴア攻擊を考へた。ヴァスコゴンセルロスは參加の意を表明したが、セケイラは部下の船の多くが貿易のみを目ざした船主の船であることと海の君主に壓迫せらるゝコチン救援の方が緊急であることとを理由として參加を拒んだ。そこでアルブケルケはコチンに赴いて簡單に事を鎭め、一五一〇年十月十二日にこの地で隊長たち全體の戰爭相談會を開いた。議題は商船がコチンで積荷をやつてゐる間に、使へる人手を悉くゴア攻擊軍に加へてもらへぬかどうかといふことであつた。こゝで、前年のマラッカ探檢に加はつてゐたフェルナン・デ・マガリャンスは、きつぱりとセケイラの意見に贊成であると述べた。その理由は、目下の逆風では十一月八日以前にゴアに着くことは困難である、とすれば戰爭に參加した人々が歸航の出帆に間に合はないか、或はそれらの人々を待つために丁度よいモンスーンを逸するか、いづれかである、といふにあつた。アルブケルケはそれに對して明日直ちに出發し歸航の間に合はせると斷言した（實際には、ゴア到着は十一月二十日以後であつた。）。しかし意見は遂に一致せず、アルブケルケは一部の贊同を得たのみであつた。この事件の故にアルブケルケはマガリャンスを憎み、マガリャンスも間もなくインドを去つたらしい。これがマガリャンスをスペインに走らせ、スペイン船を以て世界一周に成功せしめた遠因であると云はれてゐる。この優れた『探檢家』と肌の合はなかつたところに、アルブケルケの特性があると云つてよい。

アルブケルケは二十三隻千六百の兵を以て十一月の廿日過にゴアに現はれ、廿五日には城を襲擊奪取して島を占領した。さうして愼重に町を攻擊し、モハメダン的なるものは、男・女・子供、その他何であるを問はず殲滅した。捕虜の充滿したモスクをそのまゝ燒き拂つて、イスラムの神が全然救ふ力のないことを實證した如きその一つである。

そこでアルブケルケは、頑丈な石の城を築き、その圍みのなかにポルトガル人の居留地を作つた。これがインドに於けるポルトガル勢力の中心地となるのである。この形勢を見て近隣のインド諸王は頻りに友交の手をのべて來た。カンバヤ、グヂェラート、ビスナガなどがさうである。

カリカットさへも使を寄越した。エヂプトの司令官はインドに於て勝利を得る望みを失ひカイロに引き上げた。スルタンも一時は引續いて艦隊を建造することをやめた。ゴア攻略の效果は實に大きかつたのである。語をかへて云へば、モハメダンとの戰爭は、インド攻略に變質することによつて、反つてその目的を果し得たのであつた。

ゴアは四百の守備兵が常駐してゐるといふのみでなく、ポルトガル王の所領たるポルトガルの町となつた。インド諸王もそれを承認せざるを得なかつた。やがてポルトガルが通貨を鑄造し始めたのみでなくインドの貨幣もポルトガルの印を押されることによつて貿易通貨となり得るに至つた。がアルブケルケはこの權力を平和的に擴大して行かうとは考へなかつた。彼がついで目ざしたのはマラッカの征服である。これを果さずしては香料貿易を獨占することは出來ない。

六　マラッカ征服

マラッカとの關係はゴア攻略以前に一五〇九年の秋からついた。ディオゴ・ロペス・デ・セケイラがアルメイダの後援の下に五隻の艦隊を以てこゝに遠征したのである。この町ではまづシナ人が友交的に迎へてくれた。彼らは何らの偏見もなく新來のヨーロッパ人と附き合ひ、その習慣もヨーロッパに近い。がマレー人のスルタン・マームウドも自由な貿易を許しはした。それを陰謀に導いて行つたのは、こゝでもアラビア人だらうと云はれてゐる。遂にポルトガル人襲擊が行はれ、艦隊は二三の敵船を擊沈しただけで引き上げた。

このマラッカをアルブケルケはその大艦隊で以て壓倒しようと欲したのである。マノエル王は依然として紅海航路の閉鎖を命じたのであつたが、これは逆モンスーンのためにうまく行かなかつたので、その艦隊をそのまゝ、モンスーンに乘れるマラッカの方へ向けたのである。それは一五一一年の春で、十九隻八百名の兵、それにインド人の補助隊六百名を加へた。マラッカについたのは七月一日であつた。まづ捕虜の返還を要求し、それが拒絕せらるゝや岸邊の家と港の船を燒いた。そこでスルタンは捕虜を返し、町の人も平和な協定を望んだのであつたが、アルブケルケはセケイラに對する損害賠償のみならず、三十萬クルサド（一クルサド約二志四片）の戰費と城塞築造の承認とを要求したのである。この過大な要求に對してスルタン側の意見は二つに分れた。商業を傷ひたくないと思ふ人々は平和と賠償とをすゝめ、この要求の承認によつてスルタンの權威が地に墜ちることを恐れた人々は開戰を主張した。三萬の兵、八千の砲、その他にヨーロッパ人の知らない戰象がある。どうしてこの敵を追ひ拂へないことがあらう。遂に開戰論が勝つて、七月廿五日

市街戰が始まつた。ポルトガル軍は相當マレー軍を壓迫したが、結局船に退却せざるを得なかつた。八月十日に再び攻擊が始まつた。九日間市街戰が續き、市街は漸次ポルトガル軍の手に落ちた。モール人に對しては特に假借するところがなかつた。アルブケルケは部下の勞をねぎらつて三日間掠奪を許した。大砲の鹵獲は三千門に及んだ。

アルブケルケはこゝに石の城を築いた。石材はモスクや王宮の石を使つた。また貿易を回復するために土人の港務長（シャーバンダー）を任命し、金銀の貨幣を作つた。さうして東アジアの諸國と友交關係を結ぶ努力を始めた。シャムへは使者を送つた。ペグへも送つた。スマトラやジャバの諸王からは手をさしのべて來た。シナへも使を送らうとしたが、これはあとにのびた。（しかし商船は既に一五一五年にシナに來てゐる。）

一五一一年の末には更に香料の島モルッカ諸島探檢のために小艦隊が派遣された。アルブケルケ自身は、マラッカに守備兵三百及び十隻の艦隊を殘し、一五一二年の正月に三隻を以てインドに向け出發したが、途中スマトラ沿岸で坐洲して船を失ひ、辛うじて二月一日にコチンに着いた。

七　植民地攻略

ところで彼の留守中にゴアは再びインド軍に包圍され、絶え間なき小競合ひによつてひどく疲弊してゐた。幸に一五一二年の夏には續々と本國の船がつき、八月には十三隻で千八百の兵をのせた艦隊さへも到着した。これに力を得てポルトガル人は再び攻擊に轉ずることが出來た。アルブケルケは商船隊の始末などをしたあとで、ゆつくりと九月半ばに十六隻を以てゴアに來り、一擧にして形勢を變へてしまつた。かく容易に勝利が得られたのは、インド諸王の仲が惡く、外敵に對して團結しないのみか、互に拔けがけでポルトガル人と友交を結ばうとしてゐたためである。その事情を示す一つの例は馬である。インド諸王の軍隊は騎兵を主力としてゐたが、その馬の輸入をゴアが獨占してしまつた。さういふ點からもゴアは商港として榮え始めたのである。

アルブケルケのマラッカ征服がヨーロッパに與へた印象は非常なものであつた。殊にそれは一五一三年にマノエル王がローマに送つた盛大な使節の行列によつて高められた。インドからの象や豹などもつれて行つた。一五一四年三月にいよ〳〵ローマに入つた時には、祝砲が町中に轟き、教皇が宮殿の窓に現はれて行列を迎へる。象は三度跪いて敬禮する。黑山のやうにたかつてゐる群集があつけに取られる。翌日の謁見式に於てはポルトガルの使節がインド征服に關する華かな演說を行ひ、アルブケルケの武功をほめたゝへた。インドに於ける勝利は信仰の勝利なのである。

今や十字軍は遙かなる東方に進出し、ポルトガルの武力によつてキリスト教をかゝる遠い地方にまで擴め得るに至つた。これがアルブケルケの功績として承認せられたところなのである。この時が彼の名聲の絶頂であつたと云つてよいであらう。

しかし本國では何故にインドの總司令官がゴアを保持するために多くの血と金とを費してゐるかを理解しなかつた。それにはアルブケルケの反對者の流布した噂もあづかつて力があつた。ゴアは不健康である。それを維持するには無駄な金がかゝるのみならずインド諸王との絶えざる紛爭をひき起す。この聲に耳を傾けた王は總司令官に反省を促した。がアルブケルケはゴアの奪回を非常に重大視してゐた。この勝利は過去十五年間インドに送られた艦隊全部がなした仕事よりももつと有效である。陸に堅固な足場がなくてはポルトガルのインドに於ける勢力は永續きがしない。コチン、カナノルその他のどの城も、意義價値に於てはゴアと比較にならないのである。ゴアを放棄すればインドに於けるポルトガルの支配は終るであらう。自分は本國に敵を持つことを知らないではないが、どうかそれらに耳を傾けないでほしい。これがアルブケルケの意見であつた。今や彼はインド洋の制海權を得るために陸地の支配が必要であることを確信するに至つたのである。これはアルメイダの見解に比すれば明白に植民地略取の方へ歩を進めてゐるのである

が、しかし本國の見解と對立するに至つたといふ點では、アルブケルケも結局アルメイダと同じ境遇に追ひ込まれたと云つてよい。

しかし最後の破局が來るまでには彼はなほ二つの遠征を遂行してゐる。その一つは王の命令によつて止むを得ずにやつた紅海遠征である。一五一三年二月に艦隊二十隻、ポルトガル兵千七百、インド兵八百を以て出發した。ソコトラから西の海は古代以後ヨーロッパ人の乘り込まなかつたところで、水路は知られてゐなかつた。そこへ彼は進出して先づアデンを攻擊したが、これは全然失敗に了つた。そこで紅海へ入つて北方カマラン諸島まで行き、八月にインドへ歸つた。第二はやはり王の命令によるのであるがアルブケルケ自身も氣乘りがして行つたオルムヅ遠征である。一五一五年二月、二十七隻の艦隊、千五百のポルトガル兵、七百のインド兵を以て出發した。七年前の彼の第二回のオルムヅ攻擊は云はゞ副王アルメイダの妨害によつて挫折したのであつたが、今度は簡單にオルムヅを占領し、そこで政治の實權を握つてゐたペルシア人たちを追ひ拂つてもとの老君主に政權を戻した。さうして數ケ月の間占領後の處理に努めてゐたが、八月頃より痢病にかゝり、經過が思はしくないためにインドに歸ることとして、十一月に出發した。その途中アラビア船に逢ひ、ロポ・ソアレスが總司令官の後繼者に任命されたことを知つたのである。

これはアルブケルケにとつて非常な打撃であつた。王が遂に彼の敵たちの言葉に耳を傾けたことは明かであつた。彼らの云ひふらしたところによると、アルブケルケは全インドの獨立の君主とならうとしてゐる。そのために要職には親族の者のみを坐らせる。事實彼はマラッカにもオルムヅにも自分の甥を司令官に任命したのである。本國では彼の敵の方が多く、彼を辯護する人はゐなかつた。しかし王もこれらの非難をそのまゝ採用したのではなく、中を取つて彼を召還することに決したのである。しかし後任の司令官その他の幹部には曾てアルブケルケに不從順であつたもの或は犯行の故に囚人として送還されたものなどが選ばれてゐた。この人選がアルブケルケを深く傷げたのである。彼はもう生きる力を失つた。さうしてゴアの港が見えるところまで來て息を引き取つた。

アルブケルケは失脚して死んだが、しかし彼が航海者ヘンリの始めた仕事をポルトガル國のインド攻略の形にまで展開したといふ意義は失はれはしない。このあとで彼の敵がインドの總司令官となつたにしても、結局大勢はアルブケルケの開始した植民地經營を押し進めることに歸着するのである。

アルブケルケを憤死せしめたロポ・ソアレス・ダルベルガリアは一五一八年まで總司令官の職にあつたが、前任者のあとを追つて一五一六年に三十七隻の大艦隊を以て試みた紅海遠征は散々の失敗であつた。彼は紅海中ほどのヂッダまで進出したのであるが、港の攻撃がうまく行かない間に、エヂプトのスルタンがトルコ人に亡ぼされるといふ事件が起り、もはやアラビア人のインドへの脅威は除かれたとして軍を引いたのである。さうして歸途暴風・饑餓・疫病などのために慘憺たる損害をうけたのであつた。彼の任期中に於ける僅かな成功はセイロン島のコロンボの占領のみである。彼に次いで總督となつたのは、前にマラッカを探檢したディオゴ・ロペス・デ・セケイラで、一五二一年まで在任した。この總督もまた王の命に從つて紅海に遠征した。エヂプトのトルコ人がインド遠征を企ててゐると聞えて來たからである。が今度もまた失敗であつた。バブ・エル・マンデブの海峽の近くでセケイラ自身の船が難破し、他の船に救はれた。艦隊はヂッダまでも行けなかつた。なほその他にも彼は四十隻を以てするヂウの攻略に失敗し、エヂプト遠征の企は準備が整はなかつた。この頃マノエル王歿し、ジョアン三世が立つたが、インドの總指揮官にはドゥアルテ・デ・メネゼスが任ぜられ、一五二二年に赴任した。がこの總指揮官も香しいことはなかつた。再び叛いたオルムヅを制壓するのがやつとのことであつたのである。

かくだれて來たインド經營に活を入れるために、一五二四年に再びバスコ・ダ・ガマが副王と

して登場した。彼はエンリケ・デ・メネゼスやロポ・ヴァス・デ・サムパヨを從へて同年九月にインドに到着し、インド經營に思ひ切つた肅正を開始したのであるが、その十二月にはもうコチンに於て歿してしまつた。十字軍の精神を以てインド航路を打通したこの探檢家も、インドに於ける植民地經營には寄與するところはなかつたのである。

後任には同伴して來たエンリケ・デ・メネゼスが任ぜられたが、これも一年餘にして一五二六年二月に歿し、その後任の手續きがもつれて、右のロポ・ヴァスとマラッカの知事ペロ・マスカレニャスとの間の黨爭となつた。これを鎭めるために新しく總督に任命されたのがヌンニョ・ダ・クーニャで、これが一五二九年より一五三八年までの十年間に、アルブケルケの事業を力强く押し進める事になるのである。

クーニャはインドに着く前にオルムヅに寄つてこゝに經綸を施し、インドに着いてからも海の君主を手なづけることに成功してゐる。が彼がインドで企てた最大の事業はグヂェラートの征服である。彼が一五三一年にボムベイからヂウ攻擊に向つた時には、大小四百隻、ポルトガル兵三千六百を率ゐてゐた。これはポルトガルとしては未曾有の大軍である。がこの大軍を以てしてもヂウは直ちには陷落しなかつた。何故ならグヂェラートのスルタン・バハドゥルはトルコの將軍ムスタファの援軍を得てゐたからである。ムスタファはヨーロッパ風の戰術を心得、砲兵士官として有名であつたが、ヂウの危機の知らせによつて、紅海から二隻八百名を率ゐてかけつけたのであつた。そこで彼は全守備軍の指揮を委ねられ、正確な砲擊を以て防いだ。クーニャはこの形勢を見て要塞强襲を躊躇せざるを得なかつたが、王の命であるが故に止むなくこれを强行して擊退された。であとは港の封鎖に留めて南方チャウルに退いた。

その間にスルタン・バハドゥルはデリーのスルタンと戰爭を始め、海岸地方の守りを緩くせざるを得なくなつた。そこでヂウの代りにバッセインの町をサルセット島ボムベイ島と共に讓らうと申出て來た。クーニャは喜んでこの講和に應じ、一五三五年にバッセインに要塞を築いた。然るにバハドゥルは戰に敗れて海の方へ壓迫され、ヂウに逃げて來た。そこで彼はポルトガル人を味方にすべく、ヂウの側に要塞を作る土地を提供しようと申出た。クーニャはそれに對して紅海方面への自由な貿易の保證を約したが、たゞトルコの船のみは除外した。この原則の上に攻守同盟が出來上つたのである。

がデリー軍の壓迫が薄らぐと共にバハドゥルはポルトガルの要塞を邪魔にし出した。さうしてデカンの他の諸王と結び始めた。クーニャはそれを察して一五三七年正月ヂウに赴き、自分の船

でスルタンと會見したが、その會見からの歸途スルタンの船はポルトガル船と衝突し、遂にスルタンは殺された。その混亂に乘じてポルトガル人は容易に町を占領することが出來たのである。しかしやがてグヂェラートの大軍が押し寄せてくると、ポルトガル人はまた要塞の中へ引き上げざるを得なかつた。その上翌一五三八年には、七千の兵をひきゐた强力なトルコ艦隊がヂウの前に現はれ、二十五日間重砲を以て要塞を砲擊した。しかし城兵は要塞を死守して、破壞口からの突擊を辛くも擊退した。その內トルコ艦隊は、クーニャの送つた數隻の救援艦を大艦隊の一部と誤判して、圍を解いて引き上げて行つた。その時要塞では砲彈も既に盡き、戰ひ得る兵僅かに四十人に過ぎなかつたといふ。あとは戰死し、傷き、また壞血病で寢込んでゐたのである。

かくしてヂウは辛くも保持された。それは一五三八年の十一月であつた。最後の危機に際して彼がヂウに十分の救援軍を送り得なかつたのは、この九月に既に後任の副王ガルチア・デ・ノローニャが到着し、愼重に構へて容易に動かなかつたからなのである。この後任の選定もまたクーニャの地位が本國に於て危ふくなつたことを示してゐた。十年間の苦しい努力は冷淡な取扱ひを以て報いられた。それはクーニャのみならず部下の多くの士官たちの感じたところであつた。かくてクーニャは極度の不愉快の內に一五三九年正月自分の借りた船でインドを出發し、七週間後

203132

に海上で死んだ。

このやうな結果が招來されたのは、一つは本國が遠い出先の事情を審かにしないことによるが、もう一つにはインドで服役によつて成金にならうと考へてゐた貴族たちが嚴格な總督のためにその意を果さず本國に送還されなどして頻りに惡聲を放つたことにもよるのである。がジョアン三世の立場としては、クーニャが政治的關心からスルタン・バハドゥルにあまりに讓步し過ぎ、キリスト敎の傳播に熱心でない、といふ點を嫌つたのであらう。ジョアン三世は宗敎審判をポルトガルに導入したほどの人であるから、このことは相當重要な意義を持つと思はれる。更にそれと聯關して考へらるべきことは、クーニャがインド洋で展開した兵力が、ポルトガルの國力の最大限に達してゐたのではないかといふことである。ガルチア・デ・ノローニャは訓練された兵士の代りに解放された囚人を連れて來て、インドに於けるポルトガル士官たちにむしろ土人兵の方がよいと思はせたほどであつた。本國に於ける壯丁がそれほど不足して來たのである。これらの點を考へれば、航海者ヘンリ以來一世紀の間に極めて强靭な力を以て發展して來たポルトガルの東への進出は、インド沿岸に於てゴア、ヂウ、及びサルセットを含むバッセイン、の三地點、インドの外に於てマラッカ、オルムヅの二地點、の攻略を以て、その發展を終つたといふことが出來

るのである。

八　未知の世界への觸手・キリスト教傳道

植民地攻略としての發展の勢は止まつた。あとは既に手に入れた植民地の維持が主要事になる。マラッカの如きは辛うじて維持が續けられ得たのである。がこの運動の本來の動力としての未知の世界への探檢の要求、キリスト教のための戰、及び貿易の關心は、こゝで止まつたわけではない。ポルトガルの艦隊はマラッカから先へは大擧進出をなし得なかつたにしても、探檢や貿易の努力は更に太平洋のなかへのびて行つたのである。が特に重要なのは、それらよりも一層熱心にキリスト教傳播の運動が先へ先へと押し進められ、その形に於てポルトガルの勢力が日本にまで到達したことである。

探檢と貿易との仕事としては、アルブケルケがマラッカを攻略した一五一一年の末にモルッカ探檢に派遣された三隻の船が、アンボイナまで到達した。内一隻は難破し、船長フランシスコ・セランは部下と共にあとに殘つて、本來の香料の島テルナーテに來た。この報が一五一三年春マラッカに着くと、セランを迎へる船隊が派遣され、これが香料の島テルナーテとティドールとの間の引つぱり風になつたのである。セラン一人はなほテルナーテに留まつたが、この時彼のマガリャンスに宛てた手紙が、世界一周航海を刺戟したといはれてゐる。といふのはセランがマラッカからモルッカへの距離を非常に誇張して報告し、バスコ・ダ・ガマ以上の大仕事をなしたかの如く吹聽したからである。マガリャンスはこれに基いて計算し、香料の島がポルトガルに許された半球よりも東へ出てゐること、從つて西廻りの方が近いことを推論したのであつた。

この計算は誤りであつたが、しかしマガリャンスの西廻り航海は、一五二一年の秋には遂に實現したのである。それまでの間にポルトガルの商船は一五一八年に一度來ただけであつた。次にアントニオ・デ・ブリトーがやゝ大なる船隊をひきゐて來たときには、既にスペインの船がこの海域に現はれてゐた。かくして香料の島をめぐるポルトガルとスペインとの爭が起るのであるがそれは東へ向けての探檢と西へ向けての探檢とが落ち合つたといふこと、從つて未知の領域への熱烈な視界擴大の運動がこゝで一應のまとまりに達したのであるといふこと、を意味してゐる。われ〳〵はこゝまでその半分を、卽ち東へ向けての探檢のみを、辿つて來たのであるが、ヨーロッパ人が日本へ現はれたときには、他の半分の知識をもすでに十分に持つてゐたのである。卽ち世界一周によつて得られた視界の擴大が、ヨーロッパ人の眞實の優越性を形成してゐたのであ

つた。それを十分に理解するためにはわれわれはなほ西方への視界擴大の運動を辿り、スペイン人の偉業を觀察して見なくてはならぬ。

がそれは次章の問題として、こゝではマラッカまで來たポルトガル人が、いかにして日本まで探檢の歩をのばして來たかを見て置かなくてはならぬ。それは探檢家の仕事ではなくしてキリスト教の宣教師の仕事であつた。さうして宣教師がこのやうな仕事を成し遂げたについては、近い過去にヨーロッパに起つた大事件が、卽ち宗教改革が、響いてゐるのである。

宗教改革の運動は大分前からヨーロッパで燻つてゐたが、それが焰となつて燃え上つたのは一五一七年であつた。それはインド洋においてアルメイダやアルブケルケの事業がすでに終つた後である。ヨーロッパがこの改革によつて混亂に陷ると共に、ポルトガルの植民地攻略の仕事も一時その活力を失つたやうに見える。しかし新教の攻勢によつて深刻な反省を促されたカトリックの世界においては、さま〳〵な腐敗の肅清、宣教師の生活の淨化などによつて、反擊に出る傾向が激成されて來た。中でも著しいのは、一五三四年にイグナチウス・ロヨラによつて創設せられたヤソ會である。それが法皇に承認せられたのは一五四〇年であつた。卽ちポルトガルの植民地攻略の勢の止まつた時とほゞ同時なのである。

ところでこのヤソ會は、清貧・貞潔・服從などの中世的戒律を嚴格に守り、自己及び同胞の魂を救ふために身命を捧げて戰ふ軍隊であつた。從つてそれは內面化された十字軍であるといふことも出來る。ローマの教會が宗教改革によつて失つた權威を、何とかして回復しようといふことも、この十字軍の目ざすところであつた。だからこの運動はポルトガル人の視界擴大の運動と直ちに結びつくことが出來たのである。この視界擴大の運動において主觀的な筋金（すぢがね）の役目をつとめてゐたのは十字軍的な精神であつたが、それは視界が擴大されるにつれて、單にイスラムに對する反擊運動といふ狹い立場から、一般的な異教徒教化の運動に轉じて行つた。丁度その傾向が、軍隊的な組織を持つたこの教團にぴつたりと嵌つたのである。

ローマの教皇がヤソ會を公認した一五四〇年の頃に、丁度ポルトガル王ジョアン三世は、インド總督クーニャがキリスト教傳道に不熱心である故を以て更迭させ、ローマ駐劄の公使に命じて力ある宣教師を探させてゐた。そこで當然着目せられたのがこの新しい活氣ある教團であつて、その幹部の二人が選に入つた。その內の一人がフランシスコ・デ・シャビエルである。彼はポルトガル王の招聘を受諾し、翌一五四一年、新しく赴任するインド總督スーザの艦隊と共にインドに向つたのであつた。ヤソ會士としてはまことに出來たてのほや〳〵である。

シャビエルがインドに着いたのは、一五四二年であつた。ところでこの一五四二年といふ年は、ポルトガル人が初めて種子島に漂着し、日本人に鐵砲を傳へた年、ポルトガル人の側から云へば、日本を發見した年である。この漂着の事件は種々異なつて傳へられてゐるが、その船がシナのジャンクであり、乘つてゐたポルトガル人が二人乃至三人に過ぎなかつたことは、動かぬところであるらしい。卽ちポルトガルの「船」が日本を目ざして來たのではなく、船から遊離した冒險的なポルトガル人が、偶然、日本に接觸したのであつた。

しかしこの偶然の事件の背後には、日本人にとつて一世紀以來馴染の多いシナ沿岸へ、ポルトガル人が進出して來たといふ事實がある。それはマラッカ征服後一五一四年に、シナへの使者をシナ人のジャンクに乘せて送つたことに始まる。ついで一五一六年には、ポルトガル船四隻、マレー船四隻の船團を以て、初めて廣東附近タマオまで進出した。廣東の知事が皇帝へ伺ひを立てゐる間に、船團の中の一隻はレキア（琉球）探檢に派遣されたが、しかしこの船は臺灣對岸の漳州まで來ただけであつた。その中に南京からポルトガル人の宮廷訪問の許可が到着した。そこで一五二〇年の初めに、司令官は、福建南端から陸路南京に向つた。謁見は一五二一年に至つて漸く行はれた。しかるに右の船團に續いて一五一九年にやつて來た第二の船團の司令官は、タマオに要塞を築いたり、子供を誘拐したりなどして問題を起した。それに加へてシナへ救援を求めに來たビントゥンの王の使者が、ポルトガル人に征服の野心があることを說いて聞かせた。そのため皇帝は、南京に來てゐるポルトガルの使者を拘禁し、同國人の入國を禁じた。で、一五二一年に第三の船團二隻がタマオに來たときには、シナ人はこれを擊ち拂つた。翌一五二二年に第四の船團五隻が着いたときにも、シナ人は一隻を捕獲し一隻を破碎して追ひ拂つた。かうして公許の貿易は遂に成功しなかつたのである。しかし私貿易はさうではなかつた。特にシナのジャンク船を利用したポルトガル人の貿易は、漸次北にのびて寧波に及んだ。種子島に漂着したポルトガル人も、シャムでポルトガル船に別れ、ジャンクを使つてシナ沿岸の貿易をやつてゐた人たちなのである。

さういふ情勢であつたがために、たとひ偶然にもしろ、日本が見つかつたといふことの影響は非常に大きかつたらしい。ピントーの旅行記によると、日本は銀が豐富でシナ商品を輸入すれば大儲けが出來ると聞いた人々は、爭つて商品の買入れに着手し、一ピコル四十兩（テール）の生絲を近々八日の間に百六十兩までせり上げた。さうして九隻のジャンクが十五日の間に準備を整へ、日本に向つて出發した。この記事はあまり信用の出來ないものではあるが、しかし種子島漂着の報をき

いたポルトガル商人が直ぐにシナ沿岸からジャンクで日本に向つたといふことは、他の報告にも現はれてゐる。ポルトガル人の日本への渡來はこの後迅速に始まつたらしいのである。

つまりシャビエルがインドへ着いたとたんに、ポルトガル人が日本へ來始めたのである。さうしてその後五六年の間に、ポルトガル人は九州沿岸の諸所の港に出入するやうになり、シャビエルはマラッカや南洋諸島を見て歩いた。一五四七年には、マラッカで、鹿兒島人ヤジローとシャビエルとが會つた。シャビエルはヤジローにおいて日本人を見、日本人に對して非常に好感を抱いた。日本布教の決意はこの時に固められたといはれてゐる。

この因緣によつてシャビエルは、一五四九年に日本へ渡來した。これは一隻や二隻の貿易船が日本へ來たといふやうな小さい事件ではなかつた。航海者ヘンリ王子以來の「東方への視界擴大の運動」が、こゝではポルトガル艦隊の姿においてではなく、三人のヤソ會士の姿において、日本にまで屆いたのである。

第二章　西方への視界擴大の運動

一　コロンブスの西への航海の努力

コロンブスの西方への航海は、結果としては新大陸の發見となり、近代のヨーロッパに甚大な影響を與へたのであるが、しかし未知の世界への視界擴大の運動としては、航海者ヘンリの活動から派生して來た一つの枝に過ぎない。この運動の最も困難であつた點は既にコロンブスの幼時に打ち越えられてゐた。アリストテレース以來の知識の限界は突破され、アフリカ沿岸の探檢は急速に歩度をのばしつゝあつた。この地盤の上で西廻り航海といふ考を實行に移して見るか否かがこゝでの問題だつたのである。

しかし結果として新大陸が發見されたといふことは非常な大事件であつた。コロンブス自身はまだその意義を理解するに至らなかつたが、彼のあと二三十年の間にこれが全然新しい『發見』であることが明かにされ、一擧にして視界は倍に擴大されたのである。しかもそれは單に地理的

の發見たるに留まらず、新しい人間社會の發見、新しい文化圏の發見でもあつた。この點に於てインドやシナへの航路の打通とはよほど趣を異にしてゐると云つてよい。インドやシナはどれほど珍らしかつたにしてもとにかくその存在の知られてゐる國であつた。然るにアメリカの存在は全然知られてゐなかつたのである。未知の領域の開明といふことがこれほど顯著に實現された例はない。從つて未知の世界の開拓に對してこれほど強い刺戟となつたものも他にはないのである。

この相違と聯關して植民地攻略の仕方が著しく異つて來たことも忘られてはならぬ。インド洋では、ポルトガル人は積年の仇敵アラビア人と制海權を爭つたのであつて、初めからインド征服を目ざしたのではない。インドでの植民地攻略はアラビア人との戰爭に必要な根據地を獲得するためであつた。然るにアメリカにはさういふ仇敵はゐなかつたのである。しかも十字軍的精神はこゝでも同樣に旺盛であつた。そこでスペイン人は單純に土人の國々を征服したのである。

この征服事業の發端をなしたのはコロンブスの西への航海である。

コロンブスはこの航海が惹き起した結果の故に非常に有名となつたが、そのくせ傳記には不明な點が多い。生地や生年についてさへ多くの異說がある。しかし多分一四四六年にヂェノヴァで生れたイタリア人だといふことは確かなのであらう。十四歲の時から船乘りとなり、外國に出たらしい。一四七七年に、多分英國のブリストルから出帆して、アイスランドとの中途にあるファロエ諸島を超えて百哩位北まで航海したのが、大洋を知つた初めであると云はれてゐる。その後ポルトガルに移り、一四八二年以後に、ギネア海岸へ航海したこともある。その內リスボンで結婚したが、その妻の父が遺して置いた海圖や書類から彼は色々なことを學んだらしい。

當時は航海者ヘンリの歿後二十年も經つて居り、ポルトガルの海員たちの間の發見熱は大變なものであつた。だから西方の海の祕密についての色々な噂もかなり行はれてゐたのである。例へばポルトガルの船長マルチン・ヴィセンテは、サン・ヴィセンテ岬の西方四百五十レガのところで彫刻のある材木を拾つた。これは幾日も幾日も吹き續いた西風に流されて來たのであるから、西方のあまり遠くないところに陸があるに相違ないといふことが云へる。またアゾレス諸島にはその地に存しない樅の幹や、インドに於てのみ育ち得るやうな太い蘆が漂着した。或はまたマデイラのアントニオ・レーメは百哩ほど西方に三つの島を見たと語つた。等々の類である。

コロンブスはこれらの話を自ら聞いたほかになほ當時の海圖からも同じやうな示唆を受けてゐる。當時の海圖は航海者の錯覺に基くやうなものを書き入れてゐるのであつて、アンティリア島

の如きがそれである。この名は後に彼の發見した西インドの群島の名として生き殘つてゐる。

がこれらよりも一層強い影響をコロンブスに與へたのは、一四一〇年にピエール・ダイーの書いたImago mundi（世界像）といふ地理書である。コロンブスはこの書をポルトガルにゐた時分に熱心に讀んだのみならず、後に航海の時にも携へて行つた。ところでこの書は學問的にあまり價値のあるものではなく、古代及び中世の多くの學者からの寄せ集めで、新しい探求の結果などはあまり重んじてゐない。マルコ・ポーロの名なども出ては來ない。しかもコロンブスのコスモグラフィーの知識は悉くこの書から出てゐるのである。特に地球の大きさや大洋の狹さについての考がさうである。アイーは、アリストテレース、セネカ、プリニウスなどを引用して、スペイン西岸とインド東岸との間の海が、順風數日間に渡り得る狹い海であることを說いた。或はアリストテレースやアヴェロエスに基いて、アフリカにもインドにも象がゐる、だからアフリカ西岸とインド東岸とはあまり距つてゐる筈がないと論じた。その距離はまだ解らないが、しかしスペインから東に向つてインドに達するまでの人の住んでゐる世界は、地球の半周よりは大きいのである。從つて西への海路の方が近道であるといふことは動かない。この近道といふ考がコロンブスに對して非常に有力に働いたのである。

航海者ヘンリの仕事が既にその實を結びかけてゐる時代に、右の如き典據に基いた知識が有力に働いたといふことは、全く不思議であるが、しかしそれは、樂園の位置と性質や切迫せる世界の沒落などに關するアイーの考がそのまゝコロンブスを支配してゐたことを思へば、まだ何でもないのである。地上樂園は遙かなる東方の高いところにあつて、そこから川が恐ろしい勢で流れ下つてゐる筈であつた。後にコロンブスはオリノコ河口に達したとき、これが樂園から流れ出る川だと眞面目に考へたのである。

が、コロンブスの西航の企てに決定的な影響を與へたものは、やはりトスカネリの手紙であらう。コロンブス自身の書いたコピーによると、

「リスボンのフェルナン・マルティンス僧會員に物理學者パオロより挨拶を送る。香料の國へ行くにギネアを通る道よりももつと近い海の道があることを曾て貴下と話し合つたことがある。それを思ふと、王陛下と貴下との親密な御交際の御知らせは一しほ愉快に感ぜられる。王は今やあの方面のことにあまり通じてゐないものでも理解し得るやうな、むしろ眼見に訴へて人を承服せしめる底の說明を求められる。余は大地を現はす球によつてこのことを示し得ると思ふが、しかし一層容易な理解のために、また手數を省くために、この道を海圖の上で說明しようと決心し

た。で余は自分の手で引いた海圖を陛下に捧呈する。その海圖に描かれてゐるのは、西への道の出發點たる貴國の海岸や島々、その道の到着點たるべき場所、その途上北極及び赤道からどれほど離れなくてはならぬかといふこと、及びどれほどの距離によつて、卽ち何マイル航海した後に、あらゆる香料や寶石の充溢したかの場所に到達する筈であるかといふことなどである。香料のあるところは通例東方と呼ばれてゐるのに余がそれを西方の地域と呼ぶことを怪しまないで頂きたい。何故ならあの地方は、陸路を取り上の道を通つて行けば、東へ東へと行つて到達するのであるが、海路を取り地下の道を通つて行けば、西へ西へと行つて見出せるのだからである。從つて地圖に縱に引かれた直線は東から西への距離を、横の線は南から北への距離を示す。なほ余は地圖にさま〴〵の場所を書き込んだ。航海の詳細な報告によると、さういふ所へ諸君はつくかも知れぬのである。逆風とか、何かその他の事情で、目ざすところと異つたところへ着くこともあらうし、又その際航海者がその國土の知識を持つてゐれば一層工合がいゝに相違ないのであるからそれを豫め持つやうにそこの住民を示すためである。しかしその島々には商人のみが住んでゐる。卽ちそこでは、世界中他の何處にも見られぬほど多くの商船の群が、ザイトンと呼ばれる一つの有名な港に集まつてゐると云はれる。その港では毎年胡椒を積んだ百隻の大船が出發する。他の香料を積んだ他の船は別である。その國土は非常に人口が多く、州や國や都市も數へ切れぬほどあるが、王の王を意味する大汗といふ一人の君主に支配されてゐる。彼の居所・宮殿は大抵カタイ州にある。彼の父祖はキリスト教徒との交際を望んだ。既に二百年前に彼らは教皇に使を送り、教を傳へるべき多くの學者の派遣を求めた。が派遣された人々は途中障害に逢つてひき返した。エウゲニウス教皇の時にも、一人の男が教皇の所へ來て、キリスト教徒に對する彼地の好意を保證した。余自身もその男とはさま〴〵のことを長い間話し合つた。王宮の偉大なこと、江河の流れが、その幅に於ても、恐ろしい長さに於ても、實に巨大であること、江河の岸に無數の町々があること、或河の沿岸には約二百の町があり、廣い長い大理石の橋が無數の柱に飾られて掛つてゐることなどを。それはラテン人が訪ねる價値のある國土である。たゞに金銀寶石或は珍らしい香料などの巨大な寶がそこから得られるが故のみならず、學者や哲學者や熟練した天文學者の故に、またいかなる巧みさと精神とを以てかくも強大な國土が統治され、或は戰爭が遂行されるのかを知るために。フィレンツェ、一四七四年六月廿五日」

「リスボンから西へ眞直に豪華都市キンサイまで、地圖には二十六劃書かれてゐる。一劃は二百五十哩である。（milliarium ローマの千歩。一マイルより少し短い。）キンサイは廣さ百哩で十の橋を持つ。この町の名は天

の都市を意味する。この町については、技術家の數や收益の高など、多くの不思議なことが云はれてゐる。こゝまでの距離は大地全體のほゞ三分の一になる。この町はマンヂ州にあるが、君主の首府のあるカタイ州はその隣州である。しかし同じく人の知つてゐるアンティリアの島からあのひどく有名なチッパングまでは十劃である。この島は金・眞珠・寶石が非常に多く、純金を以て寺院や宮殿の屋根を葺いてゐる。だから我々は、未知ではあるが遠くはない道を辿つて海の空間を切り開かなくてはならぬ。」(Ruge; Geschichte des Zeitalters der Entdeckungen. S. 228—229.)

以上がトスカネリの手紙なのである。これはポルトガル王を動かすに至らなかつた。一四七一年に黄金海岸まで到達し、急速にアフリカ回航の歩度がのびようとしてゐた時だからである。ところが數年の後、一四八〇年から一四八二年の間に、コロンブスはトスカネリと文通して、右の手紙と地圖との寫しを見せられたのである。「この時までは彼は單純に一人の船員であつた。この時から彼は發見者となつた」(do. S. 225.)とさへ云はれてゐる。彼は遲疑するところなくトスカネリの考に贊成し、その實行の決意を云ひ送つたらしい。トスカネリは激勵の手紙を寄せた。

「余は西に向つて航せんとする貴下の意圖を賞讃する。貴下が余の地圖に於て既に見た如く、貴下の取らうとする道が世人の思ふほど困難でない、といふことは余の確信である。反對に余の描いたあの地方への道は全く確實なのである。もし貴下が、余の如く、あの國土に行つて來た多くの人々と交際したのであつたならば、何の疑懼をも持たなかつたであらう。さうして有力な王たちに逢ひ、あらゆる寶石の充ち溢れた繁華な町や州の多くを見出すことを、確信するであらう。またあの遠い國々を支配する王侯たちも、キリスト教徒と交はりを結び、そこからカトリック教や我々の持つあらゆる學問を學び得るやうな道が開けたことを、限りなく喜ぶであらう。その故に、またその他の多くの理由によつて、余は貴下が、あらゆる企てに於ていつも優秀な人を出してゐるポルトガル國民全體の如く、實に勇敢であることを當然と思ふ。」(do. S. 231.)

これによつて見ればコロンブスを衝き動かしてゐたものがマルコ・ポーロ以來の東方への衝動にほかならぬことはまことに明白である。その東方への「近道」の考には確かにコスモグラフィーの上の新しい知識も含まれてゐるではあらうが、しかしアリストテレースやアヴェロエスの典據によつてもそれだけの見當は立ち得たのであつた。從つてこゝには新大陸の發見を豫想せしめるやうな何らのイデーも含まれてはゐない。もしこゝに何らか新しい契機が含まれてゐるとすれば、それはトスカネリの所謂地下(subterraneas)の道の實證といふ點のみである。大地を球と考へることは既に古くから行はれてゐたが、それを實證する業績は未だ何人にも擧げられてゐなか

つたのである。今や東方への衝動がこの實證の試みとなつて現はれて來た。しかもそれは、トスカネリの說明が示す如く、明かに間違つた認識に基いてであつた。西廻りの道が「近道」であるのでなくてはコロンブスの勇氣は出なかつたであらう。とすれば新大陸の發見は間違つた認識によつて誘導されたと云はなくてはならぬ。それはこの發見が偶然に過ぎなかつたといふことなのである。しかしこの偶然を押し出したのが東方への衝動であつたとすれば、前に云つた如く、この西廻り航海が航海者ヘンリの事業から派生した一つの枝に過ぎぬといふことは、いよ／＼確かであらう。

コロンブスの功績は以上の如き西廻り航海の試みを實行に移したといふ點にある。こゝには航海者ヘンリの如き明敏な組織者はゐなかつた。勢ひ彼はその個人的な熱情と意志とによつて押して行かなくてはならなかつた。こゝに彼の長所も缺點もある。彼が多分に山師的な色彩を帶びて見えるのもこゝに起因するであらう。

コロンブスは一四八三年に右の計畫をポルトガル政府に申出た。ヘンリ王子の精神を受けついだジョアン二世が勢込んで黃金海岸から先へ歩度をのばさうとしてゐる時であつた。王はこの申出でを委員會に附託したが、委員たちはコロンブスを夢想家として斥け、王も彼を熱狂的なお喋舌と見たらしい。香料の國への近道といふ點のみから云へば、この判斷は誤まつてゐなかつたのである。

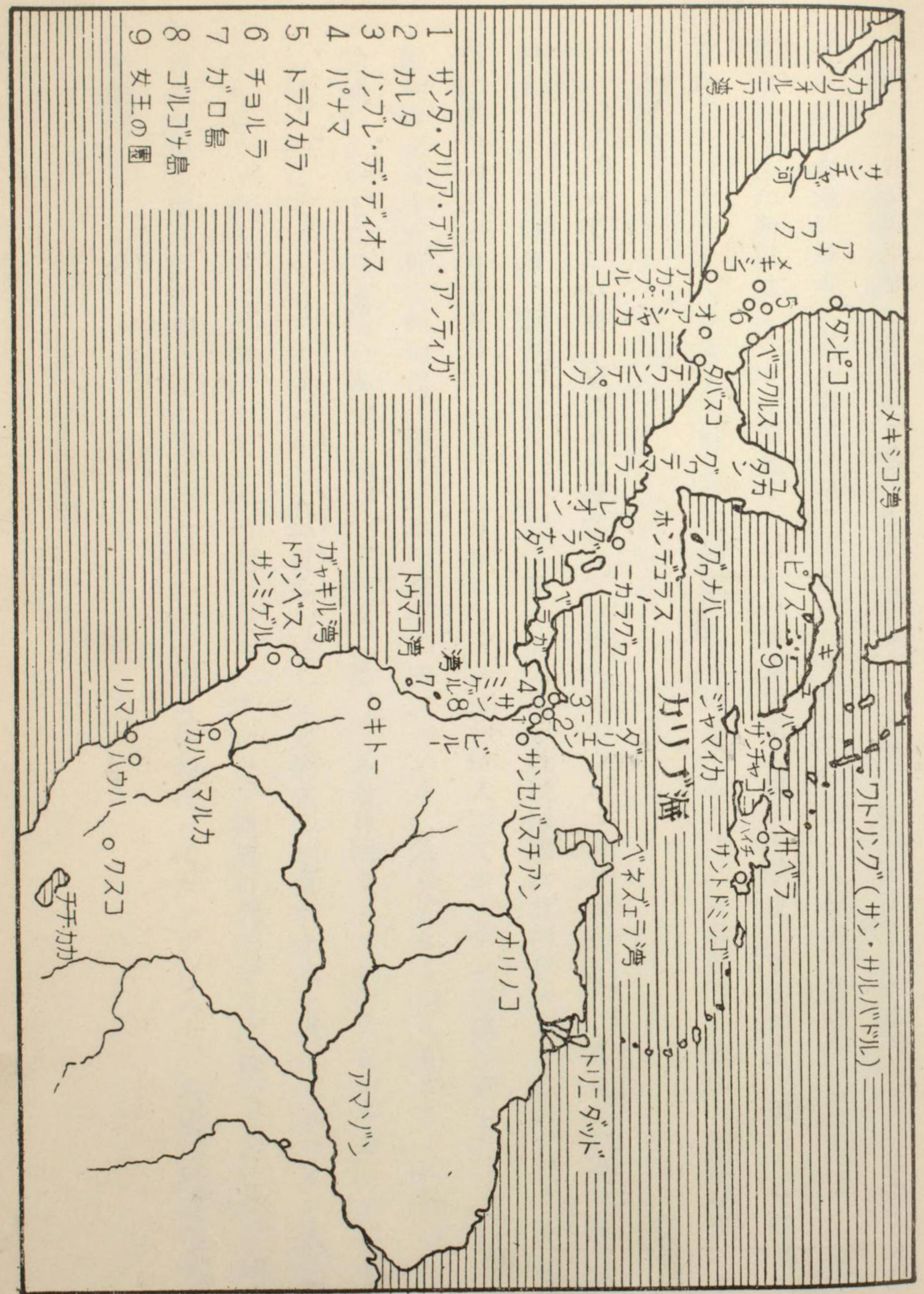
翌一四八四年にコロンブスは妻を失つた。それを機會に彼はポルトガルを去つてスペインに移り、そこで有力な保護者を見出すことが出來た。遂に一四八六年、大司敎メンドーサの紹介によつて女王イサベラに謁見し、廷臣として迎へられた。彼の抱懷してゐる計畫はサラマンカ大學に於て審査を受けたが、香しくなかつた。彼はコスモグラフィーの典據によつて主張するに留まらず、聖書の句などを引いてかなり狂信的なことを述べ、神學者たちをさへ驚かせたのである。結局一四九一年に至つて審査が決定し、彼は婉曲に拒否された。これもサラマンカ大學としては當然の處置であつたであらう。天文學的、コスモグラフィー的な計算や推論と、古典や聖書の中にある豫言或はその牽强附會の解釋との、不思議な混合に對しては、學問の立場から是認することは出來なかつた筈である。彼の後の成功は彼の計畫が學問的に正しかつたからではなかつた。

こゝで彼の生涯の劇的な瞬間が現はれてくる。彼はスペインを去ることに決意し、息子ディエゴの手をひいて、とぼとぼとティントー河沿ひにウエルバの港の方へ歩いて行つた。その途中、海に近い不毛な丘の上にあるラ・ラビダの僧院に來たとき、彼は饑と疲れとで動けなくなり、僧

たちにパンと水とを哀願した。その不思議な乞食のありさまが慈悲深い僧侶の、特に僧院長ファン・ペレス・デ・マルケナの注意を引いたのであつたが、偶然にもそのファン・ペレスが女王イサベラの告解師だつたのである。コロンブスは僧院の住居へ連れて行かれ、色々手當を受けた後に、廣々と海の見晴らせる廣間で、その西廻り航海の計畫のことやその望の失はれたことなどを話した。僧院長はコロンブスのことを曾て聞及んだことはなかつたのであるが、その熱狂的な情熱にはすつかり魅せられたので、近くのパロスから天文學やコスモグラフィーに通じてゐる物理學者ガルチア・エルナンデスを呼んで相談した。三十歳そこ〳〵のこの若い物理學者も、コロンブスの話をきいてゐるうちに、だん〳〵興味を覺えて來た。結局二人は、この珍しい人物をつなぎとめるのが女王のためになるといふ結論に達した。で僧院長は女王イサベラに手紙を書き、グラナダの宮廷へ使をやつた。二週間經つと女王の禮狀がつき、僧院長にすぐ來てくれとの事であつた。彼は卽夜出發して女王からコロンブスの企てのために三隻の船を給するといふ同意を得て來た。コロンブスの運命はかくして開けたのである。

丁度一四九二年の正月にモール人との戰爭が終つたこともコロンブスにとつては好都合であつた。しかしなほもう一つ最後の困難があつた。それはコロンブス自身の提出した條件なのである。つい近頃ラ・ラビダで饑と疲れとのために死にかけてゐた男が、スペインの王位に近いほどの高位を要求したといふこと、こゝにも我々はコロンブスを理解する一つの鍵を見出すと云つてよい。卽ち彼の條件は、提督の官位、貴族の身分、新發見地に於ける副王の地位、王の收入の十分の一といふ割での收穫の配分、外地關係の最高裁判官の地位、船の艤裝の八分の一を引受けた場合には收穫の八分の一を保有すること、などである。さすがの女王もこれにはあきれて斷つた。コロンブスもその要求を一として引きこめようとはしなかつた。で一月の內に旣に相談は破れ、コロンブスは再び宮廷を去つてコルドバ經由フランスに行かうとした。その時に調停に立つたのが、最初からの彼の愛護者メンドーサと會計を司るルイース・デ・サントアンヂェルであつた。彼らは植民地の增大やキリスト敎の傳播がいかに望ましいかを說いて、遂に女王にコロンブス呼戻しを同意せしめた。急使は女王がコロンブスの要求を承諾するとの報をもたらして彼のあとを追ひかけ、途中から連れ戻して來た。かくして一四九二年四月十七日に契約が成立した。コロンブスの熱狂的な自信が遂にスペイン國を壓倒したのである。しかしまた、まさにこの點が、コロンブスの後の失脚の原因でもあるのである。

かくてコロンブスは準備に着手し、同じ一四九二年の八月三日に出發したが、大西洋の橫斷も



決行して見ればまことに簡單なものであつた。まづカナリー群島へ直航、船の修繕のために四週間を費し、そこから九月六日に出帆、西に向つた。十六日には既に氣候の變化が認められ、陸地の近いしるしが見えるやうに思はれ出した。しかしまだ中々陸は見えず、船員の不安が高まつて相當不穩な氣勢も現はれたらしい。十月の十日にも船員は不平を訴へた。然るにその十二日の朝の二時に陸地が見えたのである。夜が明けると綠の美しい島が眼の前にあつた。コロンブスは眼に喜びの涙をたゝへながら讃美歌 Te deum laudamus を口ずさんだ。船員も皆それに和した。

この島はコロンブスによつてサン・サルバドルと命名された。その所在については異論が多く、未だ解決されたとは云へないが、現在のワトリング島と見る說が有力であるらしい。次で附近の諸島を探檢中、土人から南方にコルバ（キューバ）といふ大島のあることを聞いて、コロンブスはそれをチパングであらうと判斷した。そこで十月廿四日に出發、廿八日にその北岸に達した。着いてからはこの地をアジア大陸と考へるやうになつたらしい。十一月一日の日記には、「キューバはアジア大陸である。我々はキンサイ及びザイトンへ百哩の地點にある」と記してゐる。さうして實際大汗との連絡を得ようと努力してゐるのである。

キューバ沿岸の探檢に一ヶ月を費した後、十二月五日コロンブスはハイチに來た。こゝは山も野

も美しく、農耕牧畜に適する。岸には良港が多く、河川には「砂金」がある。八日の後にコロンブスは、大地が最大の富を藏する地に近づいたと信じた。西への航海の目標が、香料でなくして黄金とされた所以は、こゝに淵源する。その興奮や荒天航海の配慮などの結果、彼は二日間眠らなかつた。さうしてへと〳〵になつて船室に引き込んでゐた十二月廿四日の夜に、船は砂洲に乗り上げた。

コロンブスはこの地に植民地を設定し、三十九人のポルトガル人を殘し、あとの二隻の船で一四九三年一月四日に歸航の途についた。ハイチの島を最後に離れたのが一月十六日、アゾレス群島に來たのが二月十五日である。三月初めにリスボンに入つてジョアン二世に謁した。スペイン歸着は三月十五日であつた。彼は民衆の歡呼の中にパロスに入り、そこからセビリヤへ行つた。急使によつてこの遠征の成功を知つた王や女王は、三月卅日附でコロンブスをバルセロナに招待した。そこでコロンブスは、インドからもたらしたと稱する珍寶や土人を携へ、スペイン南西端のセビリヤから東北端のバルセロナに至る全スペインを、凱旋行列のやうに練つて行つた。國中の人々が大洋の征服者を見に集まつた。かくて四月中旬にバルセロナに入り、宮廷の最高の歡迎を受けた。

當時コロンブスがいかなる報告をなしたかは、二三の手紙（1493年二月十五日、Luis de Sant-Angel宛。同三月十四日、Rafael Sanchez宛）によつて知ることが出來る。彼はインド洋まで行つて來たと確信してゐたのである。「私のプランを夢想とし私の企圖を妄想とした有力な人々の意見に對抗して私が主張したことを、神は驚くべき仕方で確證し給うた。」「併しこの偉大な企てがかく成功したことは、私の功績ではない。神聖なカトリックの信仰と、我々の主君の敬虔との功績である。何故なら人の精神が理解し得ぬことを神の精神が人々に與へるのだからである。神はその命に從ふしもべの禱りをきゝ給ふ、今度の場合の如く不可能を願ふやうに見える時でさへも。その故に私は、在來人力を超えてゐた企てに成功したのである。……王も女王も諸侯も、その福なる國家も、またあらゆるキリスト教國も、卽ち我々すべては、救主エス・キリストにかゝる勝利を與へ給うたことを感謝すべきであらう。行列が行はれ祝祭が祝はれ、神殿は綠の枝で飾られるべきであらう。キリストは、かくも多くの民族の今まで失はれてゐた魂が救はれるのを見るならば、地上に於ても天上に於ても歡喜せられるであらう。我々もまた我々の信仰の向上や財寶の增加を喜ばうと思ふ。……」

この熱狂的な感激は、コロンブスの主觀的な歡喜を表現してはゐるが、客觀的にその主張の正しさを立證したものではない。彼はキュバをシナ大陸、ハイチを日本と卽斷したらしく、これらの島の大きさをも誇大に報告してゐる。しかしそれらの島の位置をはつきりと地圖に示すことは出來なかつた。それらに對する疑念はその當時にも既に存したのである。さうしてまたこの疑念の故に、コロンブス自身がおのれの新發見の意義を理解し得たよりも先に、他の探檢家が、卽ち他ならぬアメリゴ・ヴェスプッチが、それを明かにするに至つたのである。

二　コロンブスの第二回及び第三回航海

が當時としては、コロンブスの見當が當つてゐるにしろゐないにしろ、とにかく西へ航海して大陸らしいものに突き當つたといふだけで十分であつた。スペイン王は大乘氣で一四九三年五月末にコロンブスの提督及び副王としての特權を再確認し、第二回航海の準備に取りかゝらせた。さうしてコロンブスの要求するまゝに、十四隻の快速船（カラヴェル）、三隻の大貨物船、千二百の步騎兵、その他ヨーロッパの家畜・穀物・野菜・葡萄などの移植の準備までがなされた。これはもはや探檢船隊の準備ではなくして、新しい土地を占有し經營するための植民船隊の準備である。コロンブスは既に豫め副王としての活動を開始したのであると云つてよい。このプランの實現には多數の官吏や軍人が必要であつた。ベネディクト派の僧が一人、新しい國土の司祭代理としてローマか

ら任命された。スペイン貴族を代表するものとしては、アロンゾ・デ・オヘダ、フアン・ポンス・デ・レオン、ディエゴ・ベラスケス、フアン・デ・エスキベルなどが加はつた。これらは皆後にこの方面で活躍した人々である。コロンブスはこれらの同勢を以て先づ適當な場所に植民地を建設した後、更に探檢航海を續け、たゞにチパングやカタイに到るのみならず、西航して世界一周を試みようとしたのであつた。第一回航海は彼をして、大地は天文學者やコスモグラーフェンの云ふほど大きくはないといふ確信をます〳〵固めさせたのである。

我々はこの計畫の内にポルトガルのインド航路打通の運動と明白に異つた性格を見出すと思ふ。この時はヘンリ王子の歿後既に三十三年を經て居り、ポルトガルがアフリカの新發見地に石の標柱を建て出してからでもう十年目である。バルトロメウ・ディアスが喜望峰の東まで進出してインド洋への門が既に開かれたのは五年前のことであつた。しかしポルトガルはまだ植民船隊を送るといふ如き氣勢は見せてゐないのである。インドに副王が任命され、植民地攻略が必至となつて來るまでには、なほ十數年の年月が必要であつた。然るにスペインは、探檢航海の仕事に手を出した翌年、既にもう植民船隊を建造したのである。これはこの事業に於てポルトガルに遲れてゐるのを取返さうとする焦慮にもよるであらうが、ポルトガルの努力によつて眼を開かれたとき、主としてこの探檢の物質的成果に眩惑したといふことにもよるであらう。コロンブスは丁度このスペインの焦慮や欲望と結びついたのである。さうしてまた彼の性格もこのスペインの傾向に打つてつけであつたと云つてよい。

スペインのこの傾向はまたあの有名な境界線の問題にも現はれてゐる。既に古くからポルトガルはその發見地の領有や獨占について教皇の認可を得てゐたのであるが、コロンブスの歸國後スペインは急いで教皇の許に今後の發見の計畫やそれと聯關するキリスト教の傳道に就て諒解を求めたのである。そこで一四九三年の五月に、アゾレス諸島及び綠の岬諸島の西百レガの子午線を境として、それより西方で見出された、また見出されるであらう島や陸をスペイン王及びその後嗣に「與へる」といふ指令が發せられた。この線はコロンブスが天にも海にも氣溫にも變化の現はれる線として主張したものであるが、事實上そんな境界線はないにしても、教皇がそれを認めたことによつて政治的境界線として現實化したのである。尤もこの境界線はポルトガルとスペインとの間に問題となり、種々交渉の結果、翌年七月に更に二百七十レガ西方へ移すことになつた。がいづれにしてもそれは二つの國家の間の境界線の問題である。コロンブスの第二回航海は既にかゝる問題とからみ合つてゐたのである。

コロンブスは前記の植民船團をひきゐて一四九三年九月末出發、カナリー群島を出たのは十月十三日で、十一月三日には小アンティル諸島についた。大西洋横斷は廿日間である。次でハイチに至り、前年殘して置いたスペイン人を探したが、これは絶滅されてゐた。で適當な根據地を探すのに手間取り、三ケ月を經て漸くモンテ・クリスチの東十レガのところにイサベラ城を築いた。そこから頻りに黄金の搜索に人を出し、また自らも出掛けた。相當な發見があつた。それは金鑛で、金掘りたちを護るためにコロンブスは堅固な家を建て五十六人の守備兵を置いた。ソロモンが黄金を取りに人を派遣したと云はれるオフィルの地はこゝに相違ないとコロンブスは信じた。驚くべく多量な黄金が續々と發見せられるであらうと人々も信じた。しかもこの最初の築城や黄金の發見は、コロンブスが初めにチパングではないかと見當をつけた土地に於てのことなのである。さうしてそのチパングは黄金で屋根を葺いてゐる國なのであつた。黄金が目標とされるといふ特徴はこれらのことの内にも顯著に現はれてゐる。

一四九四年四月末、コロンブスは弟のディエゴを代官として植民地に殘し、自分は再び探檢航海の續行に移つた。先づ西航してキュバ南岸に出で、土人に黄金の産地をたづねると、土人はいつも南方を指して敎へる。そこで五月の初めにキュバの岸を離れて南西に向ひ、ジャマイカの北岸についた。しかし黄金はありさうにない。再び北に向つてキュバ西岸の女王の園に入り、次でピノス島に達した。こゝでコロンブスはマラッカより三十度の所まで來たと考へた。もう二日航海してキュバの西端に達したならば、キュバがアジア大陸であるといふ彼の迷ひは醒めたであらうが、船の狀態はもはや前進を許さなかつた。これが六月の中頃である。そこで歸航の途につき、ジャマイカの南を廻つて八月半ば過ぎその東端に出たが、その後荒天のため三十二夜眠らず、遂に九月廿四日過勞で倒れた。九月末イサベラに歸着するまで生死も覺束なかつた。かくして第二回の探檢旅行も彼の執はれてゐたコスモグラフィー的な迷信を破ることは出來なかつたのである。

植民地には思ひがけず弟のバルトロメーが三隻の船を以て來援してゐた。この弟は中々有能な男で、コロンブスの賴みにより英國王を說得に出かけ、ほゞその後援の約束を得たのであつたが、かけ違つてうまく兄に逢へず、反つてスペイン宮廷で好遇をうけてゐたのであつた。この弟からコロンブスはスペイン王や宮廷の氣受けのよいことを知ることが出來た。しかし他方、部下のスペイン人中には、不滿や反抗のきざしが見えて來た。土人もスペイン軍人の惡政に刺戟されて、團結して反抗を始めた。この反抗を少數の騎士たちの手で巧みに抑壓することに成功したのは、アロンゾ・オヘダである。オヘダは膽力と智慧と、さうして土人の知らない『馬』とで以て、土

人を手玉にとつたのであつた。しかし植民地經營は必ずしも快調とは云へなかつた。副王の獨占權も十分には實現されなかつた。荷厄介に過ぎぬ植民も二百人を超えてゐた。これらの事情からコロンブスは歸國を決意し、一四九六年三月、二隻の船を以てハイチを發し、六月カディスに歸着した。

今度も第一回の時と同じくスペインの南端から北端まで國中を凱旋行列が練つて歩いた。連れて來られたインディアン人が黃金の飾りをつけて行列に加はつた。ソロモンのオフィルを發見したといふ主張を實證するためである。當時の政治的事情はコロンブスの事業にとつて甚だ不利であつたが、それでも王は彼を引見し再びその保護を保證した。また、新しい船隊を即時準備する運びには至らなかつたが、コロンブスの特權を再確認し提督の權利を再保證する運びはついた。バルトロメーの代理任命も事後承諾が與へられた。

第三回航海の準備は中々捗らなかつた。漸く一四九八年正月に至つて、物資補給船二隻を先發せしめることが出來たといふ程度であつた。國內の有力者の間に相當に强い反對の氣勢がある。船員もうまく集まらない。遂にコロンブスは罪人を植民しようと考へ出した。法廷も追放刑のものをインドに送ることに同意した。この罪人植民は後にスペイン植民地經營の癌となつたものである。

がさういふ窮策のあとで、一四九八年五月末日、コロンブスは六隻を以て出發した。カナリー群島からは三隻をハイチに直航せしめ、自分は三隻をひきゐて南西に向つて航路を取つた。熱帶地方には黑人のほかに高貴な產物があるといふ當時の俗信に從つたのである。この俗信を丁度この頃に相當有名な航海者が王のすゝめに從つてコロンブスへ吹き込んだ。その手紙はコロンブスを神の使者として絕讃しつゝ、寶石・黃金・香料・藥品の類は大抵熱帶地方から出ることを說いたものである。コロンブスは神の使としての確信をますゝ高めると同時に、針路を南西に向けたのであつた。

この神がかりの狀態からして地上樂園の解釋が出てくる。十七日の航海の後にコロンブスはトウリニダッド島につき、次で翌日オリノコ河口に達したのであるが、このアメリカ大陸の最初の發見が、彼にとつては地上樂園の位置の推定に終つたのであつた。この推定の前提として彼は、「地球は球形ではない、梨形である」といふ考を持ち出してゐる。アゾレス群島の西百レガから急に天象地象が變るのは、そこから大地が高まり始めてゐる證據である。いまオリノコ河口に來て恐ろしい水量が海へ流れ込んでゐるのを見ると、この河の水源地こそまさにその高まりの極ま

つた所に相違ない。地上樂園はまさしくこの極東の高所にあるのである。もしこの强大な河が地上樂園から流れ出るのでなかつたならば、それは南方の大陸から流れ出るのでなくてはならないが、さういふ大陸のことはこれまで聞いたことがない。だからこの河は地上樂園から來るのでなくてはならない。これが彼の眞面目に考へたところであつた。そこでこの新發見の大陸はたゞ觸れられた程度に止まり、コロンブスは半月の後にカリブ海に出てハイチの南岸サント・ドミンゴに向つた。そこに彼の弟バルトロメーが新しく植民地を建設してゐたのである。

コロンブスの留守中ハイチの經營は相當進捗してはゐたが、しかし他國人たるコロンブス一家への反抗も相當激しくなつてゐた。イサベラでは上席判事のフランシスコ・ロルダンが謀叛を起し、コロンブス一家の金鑛獨占を攻擊した。また土人を味方につけるために、副王代理の壓制から彼らを護るのだと宣言した。この爭はコロンブスの到着後も鎭まらず、雙方から政府に訴へるに至つた。かくてそれは翌一四九九年の九月まで續いたが、遂にコロンブスの方が讓步してロルダンを上席判事に復職せしめた。しかし本國ではこの植民地での爭が非常に不評判で、フランシスコ・デ・ボバディリャを新しく判事に任命した時には、副王の特權などを無視して、行政權も兵權もすべて判事の手に移した。更に植民地の福祉に害ありと認められる者は强制的に島から追放し得る權利をさへも與へた。でボバディリャは一五〇〇年八月末サント・ドミンゴに着くや、直ちにこゝを占領してコロンブス一家の者を捕縛し、本國へ送還したのである。

コロンブスは船長の同情ある取扱ひを受け、王子の乳母へ宛てた手紙を取りついで貰つたりなどした。王の側に於てもコロンブスに對する處置を不當とし、縛を解いて禮遇する樣に命じた。王に謁見の際にはコロンブスは感極まつて言葉が出なかつたといふ。かういふ事件のためにボバディリャも不評判となり、ドン・ニコラス・デ・オバンドに代へられた。オバンドに對する信用によつて新世界に行かうとする人が急に殖えて來た。かくてこの新總督は一五〇二年二月に、三十隻二千五百人を以て出發、四月半ばにハイチについた。植民地の經營はもうコロンブスとは緣が切れてしまつたのである。

三　アメリゴ・ヴェスプッチの新大陸發見

以上の如く、コロンブスが地上樂園の推定から捕縛に至るまでの數奇な運命に飜弄されてゐた一四九八年から一五〇〇年までの間は、ヨーロッパ人の視界擴大の運動にとつては特に活潑な展開の見られた時期である。バスコ・ダ・ガマは一四九八年の夏インドに達し、一四九九年九月歸

着した。コロンブスの第二回航海に參加してハイチで武功を立てたアロンゾ・デ・オヘダは、一四九八年の末に、コロンブスの第三回航海の報告に基いて、パリアの探檢を人からすゝめられ、翌一四九九年五月に出發して南アメリカの東北岸（北緯六度あたり）に達し、そこから北上して北岸に出でベネズエラ灣あたりまで探檢した。更に同じ一四九九年の十一月に出發したビセンテ・ヤンネス・ピンソンは、コロンブスの第一回航海の際の船長であるが、南ブラジルの岸から北へハイチまで探檢した。それに踵を接して一四九九年十二月に出發したディエゴ・デ・レーペは南緯八度まで行つたといはれる。これらはいづれも一五〇〇年の內に歸着してゐるのであるが、アメリゴ・ヴェスプッチは右のオヘダの航海に參加し、後途中から移つたのか、ピンゾンもしくはレーペの航海にも加はつたと云はれてゐる。コロンブスがハイチで黨爭に惱んでゐた一五〇〇年の四月には、ポルトガルのカブラルがインドへの途上ブラジルに接觸し、早速本國へ報告した。ポルトガルのマノエル王はこの新發見の島を探檢するため、丁度探檢航海から歸つて來たアメリゴを招いた。そこでコロンブスが捕縛送還されて歸國してから第四回の航海に出發するまでの間に、アメリゴの有名な第三回航海が行はれたのである。

アメリゴ・ヴェスプッチは一五〇一年五月リスボン發、南アメリカの東岸を南緯五度より二十五度まで行つた。更にその指導の下に五十度或は五十二度まで行つたと云はれるが、これは確實でない。一五〇二年九月歸着するや、彼はこの探檢の科學的指導者として報告書を書いた。これが非常なセンセーションを起したのである。彼が友人ロレンソに宛てた手紙は、一五〇三年ラテン語譯で、次でドイツ語譯で出版されたが、その初めに、彼は新大陸の發見を唱道したのである。彼がポルトガル王の命によつて發見した大きい陸地は、「新しい世界」と呼ばれてよい、と彼はいふ。何故ならこれまでは何人もその存在を知らず、西方の赤道の南は海のみであると考へてゐたからである。今やアジア、アフリカ、ヨーロッパに對立する新しい世界が見出された。これをアメリゴははつきりと把捉したのである。

コロンブスは事實上新大陸の發見者であつたかも知れない。しかし彼はかゝる大陸のあることを拒んで地上樂園の存在を主張したのである。また彼がキュバやハイチの發見によつて主張したのは、シナ大陸や日本に到着したといふことであつて、未知の新しい世界の發見ではなかつた。一五〇三年は彼が依然として右の如き信念の下に地峽の沿岸でインドへ出る海峽を探してゐた時なのである。從つて新大陸の發見者として、コロンブスではなく、アメリゴが登場したといふことは、理の當然であると云つてよい。

コロンブスの第四回航海はアメリゴの南アメリカ探檢よりも一年遲れて一五〇二年五月の出發であつた。四隻の快速船、百五十の乘員である。既にバスコ・ダ・ガマのインド航路打通の後であるから、コロンブスはキュバとパリアとの間を西航してそのインドへ達しようとしたのである。サント・ドミンゴでは上陸を許されなかつた。彼は眞西に航して七月卅日にホンデュラス灣端のグヮナハ島に着き、ユカタンの商人に逢つて、在來この地方で接することの出來なかつた高度文化の國のあることを知つた。でもしその商人の故郷へ行けば、ユカタンの町々を見、メキシコを見出して、否應なしに新大陸を把捉する筈だつたのである。しかしインドへの通路發見に凝り固まつてゐるコロンブスは、西に向はずして東に向ひ、ホンデュラスの岸を廻つて地峽を南下した。さうしてこの有名な瘴癘の地に一五〇三年の四月末までまごついてゐた。しかし西への出口はどうしても見つからず、遂に北航して暴風に逢ひ、六月廿五日にジャマイカの岸にのりあげた。ここで助けを待つてゐる間に、一五〇四年二月廿九日、月蝕の豫言で土人の害を免れたのである。その後なほ救出される迄に半年かゝり、散々の態で十一月初めに歸國したのであつたが、運惡く彼の庇護者イサベラ女王もその數週間後に歿し、王はもはや彼に取り合はなくなつた。かくしてコロンブスは極度の失意の内に、一五〇六年五月、バリャドリードに於て歿したのである。

他方アメリゴも一五〇三—四年の第四回航海は失敗であつた。でポルトガルを去つてスペインに歸つた。一五〇五年二月にコロンブスに會つた時には、コロンブスは大變い、印象を受けたらしい。ヴェスプッチもまたその功績を正當に報いられない人であると彼は書き殘してゐる。しかしヴェスプッチは間もなくスペインに職を奉じ、一五〇八年より年俸二百デュカットの帝國パイロットに任命された。さうしてパイロットの資格試驗をやつたり、地圖を書いたりなどした。歿したのは一五一二年であるが、コロンブスと異なり、生前既に過分の名譽に惠まれた。といふのは、新大陸の發見を報ずる彼の一五〇三年の手紙がヨーロッパ中に廣く讀まれたのみならず、一五〇七年には、フィレンツェの友人ソデリニに與へた手紙が『四度の航海』の名の下にラテン語譯として盛行し、遂に同じ一五〇七年に出版されたマルチン・ワルドゼーミューラーの『コスモグラフィー序論』に於て新大陸をアメリカと呼ばうといふ提議が出されるに至つたのである。

四　征服者たちの活動

西航して發見されたのはシナでもインドでもなくして、これまでヨーロッパ人もアジア人もアフリカ人も曾て知らなかつた全然新しい大陸なのである。これは視界擴大の點から云へば未曾有

の大發見であつた。しかもこの發見が發見として自覺されるためには、ポルトガル王が一役買つて出なくてはならなかつたのである。こゝに我々はヘンリ王子の精神がいかに發見にとつて重要であつたかを反芻して見なくてはならない。

しかし新しく見出された大陸がどんなものであるかはまだ殆んど未知であつた。さうしてその未知の世界を切り拓く仕事は、着實なヘンリ王子の精神を以てではなく、華やかなカスティレの騎士的精神を以て、極めて冒險的・獵奇的に遂行されたのであつた。しかもそれはインド洋に於てアルブケルケが領土攻略の事業を遂行したのと時を同じくしてゐるのである。

この冒險に乘り出した先驅者たちの中で特に目ぼしいのは、前にコロンブス第二回航海の參加者中に名をあげたアロンゾ・デ・オヘダであらう。彼は名門出の騎士で、その當時まだ二十三歳位の青年であつたが、その膽力を以て土人との戰爭に武功を立てた。次で二十九歳位の時にアメリゴ・ヴェスプッチを伴つて南アメリカの探檢に赴いたのであるが、その後この探檢の事業を續行し、一五〇八年三十八歳位の時には、南アメリカの北岸ダリエン灣以東の地をおのれの繩張りとした。同じ頃にディエゴ・デ・ニクエサがホンデュラス地峽よりダリエンまでのベラグワ地方を繩張りとしたのに對したのである。翌一五〇九年には四隻三百人の乘員をもつて右の地方へ出發したが、その中に後のペルー征服者フランシスコ・ピサロが加はつてゐたのである。オヘダは土人の抵抗によつて危ふく命を落さうとしてニクエサに救はれたりなどしたが、一五一〇年ウラバ灣に植民地サン・セバスチアンを建設した。しかし土人の抵抗と食糧の不足とで經營は依然困難であつた。そこでハイチに船を送り救援を求めたが、その結果、スペインの食糧船を乘取つた食詰め者の一群が來援するといふやうなことになつた。オヘダは植民地の管理をピサロに託し、右の分捕船で再び來援を求めにハイチへ歸つたが、この船の强奪事件に坐して捕はれ、解放された後にも意氣振はず、貧窮の内に一五一五年頃歿した。

ピサロは一五一〇年の夏、殘つた六十人と共にサン・セバスチアンを見限つて二隻の船でハイチに向つたが、一隻は難破し、他の一隻は法學者マルチン・フェルナンデス・デ・エンシソの船に出逢つた。その船にバスコ・ヌニェズ・バルボアといふ、これも後に太平洋の發見者となつた男が乘つてゐたのである。ピサロはエンシソと行動を共にし始めたが、そのエンシソの船もまたダリエン灣の東端で難破してしまつた。で止むを得ず陸路をサン・セバスチアンまで辿つて行つたが、つい近頃去つたばかりのスペイン人の家は既に燒き拂はれてゐた。で思ひ切つてニクエサの領分であるダリエン灣西岸に行くことになつた。

この提議をしたのがバルボアなのである。彼は貧乏貴族で、當時既に三十八歳になつてゐたが、アメリカに來たのは十年前の青年の時であつた。卽ち一五〇〇年にロドリゴ・デ・バスティダスの遠征に從ひ、ベネズエラ灣からダリエン灣（ウラバ）を經てパナマ地峽に到つた。だからこの地方については經驗者だつたのである。その後サント・ドミンゴに於て農耕の仕事を始めたが、それがうまく行かず、追々に借財がかさんで窮境に陷つた。で遂に脫走を企て、食糧の荷箱にかくれて潛入したのがエンシソの船であつた。エンシソはこの冒險的な男を戰士として使ふつもりで保留して置いたのである。

ダリエン灣西岸のニクエサの領分に於ける新しい植民地はサンタ・マリア・デル・アンティガと呼ばれた。エンシソは法律概念に從つてこの地の經營にとりかゝつた。しかし部下の亂暴者たちは、軍令に從ふ習性は持つてゐるが、紙上の法規による規制を喜ばない。追々に不平が高まつて來た。遂にバルボアは謀叛の主謀者となつてエンシソを追ひ拂つてしまつた。

この時代の南アメリカ植民地の通有のなやみは食糧難であつた。土人は白人に抵抗して、食糧を供給しなかつたのである。バルボアの植民地も食糧難になやんだ。丁度そこへ一五一〇年十一月、ニクエサのために食糧を運んで來た二隻の船がついて、バルボアのためにも食糧を分けてくれたが、この船の連絡によつてバルボアのことがニクエサにも知れた。ニクエサは前年一五〇九年にパナマ地峽に於て難破し、現在のパナマ運河附近のノンブレ・デ・ディオスに辛くも生き殘つてゐたのであつたが、おのれの領分にバルボアが植民地を建設したことを聞き、六十人の生存者と共にその船で翌一五一一年三月にバルボアの植民地へやつて來た。しかしバルボアはこの名目上のベラガ領主を認めず、上陸を拒んだ。翌日漸くその上陸を許した時には、謀略を以てニクエサを部下から引き離し、直接スペインへ歸るといふ誓言を强要した。さうして十七名の部下と共に最も危なつかしいブリガンティンに乘せて突き放した。ニクエサはそのまゝ行方不明になつてしまつた。つまりバルボアたちはニクエサの領分を强奪したのである。かくしてニクエサとエンシソとオヘダとの三つの探檢隊の殘存部隊三百人がバルボアの手に殘つた。ピサロもこの下についてゐたのである。

このバルボアを有名ならしめた仕事は南海の發見、卽ち太平洋の發見である。パナマ地峽が僅かに四五十哩で太平洋に面してゐるに拘らず、當時の探檢家たちはかゝる事態を夢にも知らなかつた。既に一五〇〇年にバルボアはバスティダスに從つてこの地峽に來て居り、一五〇二年にはコロンブスが丹念にこの沿岸を辿つたのであるから、ニクエサがパナマ地峽に植民地を作つて苦

勞した時まで十年を閲してゐるのであるが、この地峽の狹いことを突きとめようとした人は一人もなかつた。然るにそれを今バルボアが思ひつくに至つたのである。その機緣となつたのは、一つはバルボアがその植民地から內地の方へ探檢に入り込んだ時ある酋長から『南の海』のことを聞いたことであるが、他の一つはバルボアがスペインの當局から認められさうになるに從ひ、エンシソ及びニクエサに對する罪の償ひとなり得るやうな大功名を立てたいと考へたことである。時は丁度ポルトガルがマラッカ攻略に成功した直後であつた。

かくしてバルボアは一五一三年九月一日、百九十のスペイン人、六百の土人をひきゐてその植民地サンタ・マリア・デル・アンティガを出發、六七十哩北方のカレタから地峽橫斷を試みた。こゝは西側にサン・ミゲル灣が入り込んでゐて、地峽の最も狹くなつてゐるところであり、山梁も標高七百米に過ぎない。しかし恐ろしい密林に覆はれ、日光が地に屆かないほどのところであつた。その原始林の中の小徑をカレタ酋長のつけてくれた案內者に導かれて隊は難行軍を續けた。漸く九月廿五日に至つて、案內者は、目前の山の背を指して、あそこへ出れば海が見えるといふ。バルボアは全部隊を停止させた。彼はまづ最初の一人として南の海の眺めを味ひたかつたのである。で自分だけ前進して峠の上に出た。そこに跪いて、兩手を天に擧げ、南方の海を歡び迎へた。自分のやうな優れた才能もなく貴い生れでもない者に、このやうな大きい名譽を與へられたことを、彼は心から神に感謝した。次で彼は部下を招き寄せて新しい海を指し示した。人々は皆跪いた。バルボアはこの探檢が幸福に終ります樣にと神に、特に處女マリアに祈つた。そこで衆は聲を合せて讃美歌を唱つた。ピサロはバルボアにつぐ有力者としてこの衆の中にゐたのである。

そこから下り道にかゝつて九月廿九日にはサン・ミゲルの內灣に注ぐサバナス河口に到着した。丁度上げ潮の時であつたが、バルボアは劍と旗とを以て膝の浸るまで海水の中に歩み入り、この海にある陸と海岸と島とを北極より南極に至るまで王の名に於て占領すると宣した。

バルボアはこの海岸に數週間留まつて附近の酋長たちを征服し、またこの地方のことについて出來るだけ知識を得ようと努めたが、酋長トゥマコは南方の强國のことを語つた。そこには量り知れぬ富があり、船や家畜も用ゐられてゐる。家畜は駱駝に似た珍らしい形のものである。かういふことはダリエンの方では知られてゐなかつた。でこの新しい報道によつて異常に深い感銘を受けたのがほかならぬピサロだつたのである。

十一月三日に探檢隊は歸路についた。道々土人の諸酋を掠奪して、遂には運べなくなるほどの黃金を集めた。スペイン人の戰死者は一人もなかつた。かうして一五一四年一月十九日にバルボ

アはサンタ・マリア・デル・アンティガに凱旋したのである。彼は早速この成功を本國に報ずるために、王に獻ずべき多量の黃金と眞珠とを乘せて三月に船をスペインへ送つた。新しい大洋の發見は實際非常なセンセーションを惹き起し、將來に重大な結果を作り出すのであるが、しかしバルボア個人の運命は、僅か數週間のことでふさがれてしまつた。といふのは、バルボアの發見の報道が本國に到着する以前に、彼のニクエサに對する謀叛が問題となつて、彼に代り地峽方面の總督となるべきペドラリアス・デ・アビラが任命され、一五一四年の四月十一日に二十隻千五百人を以て出發したのである。もしその出發前にバルボアの新發見の報が到着してゐたならば、恐らくこの後の事態は別の途を辿つたであらうと云はれてゐる。

新總督ペドラリアスは六月卅日にサンタ・マリア・デル・アンティガに到着したが、この一行には新世界未曾有の學者連騎士連が加つてゐた。後に『メキシコ征服史』を書いたベルナール・ディアス・デル・カスティロ、『インディアの一般史』の著者ゴンザロ・フェルナンデス・デ・オビエド、司法官として來任し後に『地理學集成』を著した法學者エンシソ、ペドラリアス支配下のスペイン人の業績を記述したパスクワル・デ・アンダゴーヤ、後にチリーの征服者となつたデイエゴ・アルマグロ、後にピサロと共にペルー征服に從事し更に中部ミシシッピー河谷の發見者となつたフェルナンド・デ・ソト、キトー及びボゴタの征服者ベナルカザル、キボラ及びクィビラの征服者フランシスコ・バスケス・コロナド、後にマガリャンスと共に世界一周をやつた主席船長フアン・セラノなどである。ペドラリアス自身は既に六十歳で活氣なく、植民地經營も甚だ拙劣であつたが、しかしその率ゐた一行からは大きい結果が生れ出ることとなつたのである。

バルボアはペドラリアスの部下と共に植民地から南の方の內陸へ探檢に出て土人と戰爭をしたりなどしてゐたが、翌一五一五年七月に至り、本國政府から南海發見の業績を認められて南海の總督代理に任命された。總督ペドラリアスはこれを喜ばなかつた。總督の管理下にある地方では南海の沿岸こそ最も價値ありまた健康地だつたからである。で彼はこの地を競爭者バルボアに委託するを欲せず、甥のガスペル・モラーレス及びピサロに六十人の兵をつけて、眞珠諸島攻略のため、ミゲル灣に派遣した。二人は三十名の兵と共に小舟で眞珠諸島中の最大島イスラ・リカを襲擊し、激戰の後、この地方で最も强大であつた島の酋長を降服せしめた。酋長は籠一杯の眞珠を差出し、おのが家の塔の上から配下の島々を指し示した。その時彼はまた遙か南方にある强大な國のことをも話したのである。それを聞いてゐたピサロは再び强い刺戟を受けたが、傍のモラーレスは眼前の眞珠の島々をいかにして搾取するかをのみ考へてゐた。結局酋長は毎年眞珠百マ

ルクの貢を收めることに定められ、探檢隊は歸途についたのであつたが、その歸路に於て、前代未聞の大虐殺大掠奪が行はれたのである。さすがのバルボアさへこの殘虐を嫌惡の念を以て報道してゐるが、しかし總督の甥は何の罰も受けなかつた。

その內總督ペドラリアスと總督代理バルボアとの間を和解せしめようとして、ダリエンの司教が兩者の間に緣談を持ち出した。それは表面上うまく運ぶ樣に見えたが、しかしペドラリアスはこの厄介な競爭相手を除かうとたくんでゐたのである。間もなくその機會が到來した。それはバルボアが太平洋岸での支配力を擴大しようとして焦つたことによるのである。といふのは、カレタのやゝ北方に設けられたアクラの港から、地峽を橫ぎつて造船材料を太平洋岸に運ばうとしたのであるが、それが實に難事業であつた。先づ第一に、バルボアがアクラまで行つて見ると、土人の襲擊によつて小舍は破壞され守備兵は全滅してゐた。從つて土人を屈服させ小舍を再建することから始めなくてはならなかつた。次に船材や鐵を土人に擔はせて地峽を橫ぎつて運ぶのに非常に手間取つた。更に第三に、太平洋岸まで運んで見ると、船材はあまりに永くアクラの海岸に放置してあつたために、蟲に穴をあけられて、船材として用ゐられなくなつてゐた。しかもこの運搬のために五百人（二千人ともいふ）の土人の命が犧牲となつてゐるのである。そこで再び初めからやり直さなくてはならなかつたが、丁度その頃に本國でフェルナンド王が歿し、總督ペドラリアスも轉任を噂された。そこでバルボアは邪魔の入らぬ內にと考へて非常に仕事を急いだ。それが謀叛の嫌疑を惹き起したのである。總督はバルボアを招致した。バルボアは總督に會ひ自分の企業の促進や說明をするつもりでアクラの港まで來たが、總督はピサロをしてバルボアを捕縛せしめた。さうしてエスピノーザによる簡單な裁判の後に、四人の部下と共に斬首の刑に處した。一五一七年の頃、バルボアは四十二歲位であつたらしい。

バルボアの處刑はこの地方の開發にとつて非常に不幸な出來事であつたと云はれてゐる。がとにかく彼の始めた仕事はエスピノーザが引きつぎ、彼の造つた四隻のブリガンティンよりなる艦隊を以て、一五一九年にパナマの植民地を建設した。この町は一五二一年にカルロス一世（ドイツ皇帝カール五世）から都市權を與へられた。その年からサンタ・マリア・デル・アンティガは荒廢し始め、一五二四年には全然放棄されるに至つてゐる。地峽地方の中心がパナマに移つたのである。

ペドラリアスの派遣した探檢船隊は、バルボアのプランとは正反對に、太平洋岸を北西に上つた。一五二一年にはニカラグワに達し、上陸して酋長以下九千の土人に洗禮を施した。黃金の收

穫は十萬ペソに上つた。この探檢隊は一五二三年六月にパナマに歸つた。次でニカラグヮ征服に送られたエルナンデス・デ・コルドバは、グラナダ、レオン等の町を建設したが、後に獨立を計つたために、急遽出動したペドラリアスに捕へられ、レオンに於て一五二六年に斬首された。がそのペドラリアスが一五二七年二月パナマに歸着した時には、後任者ペドロ・デ・ロス・リオスが既に地峽に上陸してゐた。でペドラリアスはレオンに退き一五三〇年に歿した。十三年に亙る彼の惡政が、中部アメリカの美しい土地の、荒廢の原因を作つたと云はれてゐる。

五　メキシコ征服

バルボアの歿後十年の間にペドラリアスが探檢を進めた地方は僅かにニカラグヮに過ぎなかつたが、丁度その間に北ではメキシコ、南ではペルーに於て前代未聞の新事件が起りつゝあつたのである。それらは眼界擴大の運動がおのづから領土擴大の運動に轉化することを露骨に示してゐる。勿論それは探檢として、即ち未知の領域への眼界擴大の運動として始まつたのであるが、その未知の領域の開明が單に地理學的な發見に止まらず、新しい民族、新しい國家生活の發見となるに伴つて、眼界の擴大それ自身が如何に優越な力を人間に與へるか、從つて、眼界擴大の運動を特徴とする民族が眼界の狹い閉鎖的な民族よりも如何に優越な力を持つかを直接に體驗させ、それによつて新しい國家生活の發見を直ちにその征服へと轉化させたのである。この傾向は既に前からスペイン人の探檢に現はれてゐたのであるが、しかしその相手が大きい組織を持たない斷片的な部族であつた間は、まだ人を瞠目せしめるほどの事件は起さなかつた。然るにメキシコとペルーとで起つたことは、新しい世界に於て最も發達してゐた二つの國家に關することなのである。從つてこれらの事件は、「發明や發見のお蔭で、文明人と野蠻人との區別が、神と人との間の相違の如く著明になつた」と云はれる所以を示してゐるのである。

兩者の内では、北の方が一歩先であつた。元來キュバとユカタン半島とは百哩あまりしか離れて居らず、しかもユカタンの附近まではコロンブスが二度も行つてゐるのであるが、いつももう一息のところで反轉したのであつた。だから南の方ダリエン灣を中心とした探檢活動が、北の方キュバを中心として動くやうにさへなれば、ユカタンに觸れることは易々たるものであつたのである。さうしてその機運を作つたのは、恐らくバルボアたちの新發見の刺戟であらう。

バルボアがエンシソの船で地峽方面へ入り込んだのは一五一〇年であるが、その翌一五一一年

に、ディエゴ・ベラスケスがキュバ總督として赴任して來た。彼は早速キュバ島の征服を行ひ、土地を征服者たちに分配した。この島は相當に廣く、そこへ本國から流れ込んで來る冒險者たちの數も相當に多かつたのであるが、それらの人々は落ちついて土地を開拓するよりも何か冒險的なことをやりたがる連中であつた。そこへ頻々として傳はつて來たのが黃金に豐かな土地の發見の噂である。若い連中は自分たちも發見と征服の仕事をやらうとして集まつてくる。さういふ連中が二隻の船を準備し、エルナンデス・デ・コルドバを隊長に選び、アントニオ・デ・アラミノスを船長に雇つた。總督はもう一隻艤裝する金を出して後援した。この探檢隊の出發したのがバルボアの處刑された一五一七年の二月なのである。出發して見ればユカタン半島は極めて簡單に發見された。つまりこの發見の急所は、キュバに於て西方への探檢が企てられ始めたといふ點にあつたのである。

しかしこの發見の意義は豫想外に重大であつた。コロンブス以來既に二十五年、スペイン人がこの地方に於て見出したのはすべて文化の低い未開民族であつたが、一歩ユカタン半島に觸れると共に、まるで程度の異つた文化民族の存在が明かとなつたのである。そこには華麗な石造の家があり、木綿の衣服が用ゐられ、彫刻に飾られた殿堂に立派な神像が祭られてゐる。極めて獨特な象形文字も用ゐられてゐた。このマヤ文化は未だに素姓のはつきりしないものであるが、當時突如としてこれに接したスペイン人の驚きは察するに餘りがある。その驚きが一種の恐怖をまじへたものであつたことは、後にスペイン人がこの地方を占領したとき、マヤ文化の產物を徹底的に破壞したことによつても知られるであらう。

コルドバの探檢隊は沿岸の諸所で上陸を試みたが、土人に擊退された。ユカタン西岸の中程まで行つた時、コルドバは重傷を負つたので、探檢を切り上げてキュバに歸り、上陸後十日にして歿した。がこの發見は總督の功名心をかり立て、新しい船隊の準備に向はしめた。で翌一五一八年の四五月頃に、總督は甥フアン・デ・グリハルバに四隻をつけてユカタンへ派した。パイロットは前年と同じくアラミノスであつた。この探檢隊はユカタン半島の根元のタバスコに到つて土人との友交を結ぶことに成功し、更に西してベラ・クルス港附近の小島に上陸した。こゝの文化は一層高い程度に達してゐたが、しかしこゝでスペイン人は、人身犧牲の習俗を見出したのである。がグリハルバはそれにかまはず、酋長らと平和に贈物を交換することが出來た。ガラス玉・針・鋏などに對して、一萬五千乃至二萬ペソの價の金や寶石が手に入つた。いよ／＼黃金の國が見つかつたのである。グリハルバは更に北上してタンピコまで行き、十一月にサンチャゴへ歸着

した。

總督はこの成功に驚喜し、一方本國に報告して新發見地の管理を懇請すると共に、他方この黄金の國を探檢すべき大艦隊を建造し、その司令官にコルテスを任命したのである。

こゝにフェルナンド・コルテスが登場する。當時のスペインの『征服者（コンキスタドール）』のうちで最も優れた英傑なのである。彼は一四八五年に西スペインのエストゥレマドゥラ州に生れ、サラマンカ大學に二年在學した。當時の植民地の隊長としては稀な教養を身につけてゐたのである。一五〇四年、數へ年で二十歳の時、當時の青年を風靡した冒險熱に驅られて、サント・ドミンゴの總督オバンドの許に來たが、七年の後、ベラスケスのキュバ征服に參加し、この地において領地を得た。さうしてその學問の故にベラスケスの祕書として用ゐられ、後にはサンチャゴの判官に任ぜられた。卽ち若くして島の最高官吏の一人となつたのである。それは彼の傑出した人物の故であつた。騎士としての訓練には何事によらず熟達してゐる。決意した際には勇敢で毅然としてゐるが、プランを立てるに當つては熟考し明細に考へる。理解は早く頭腦は明晰である。その上巧みな熱のある辯舌によつて周圍を統率する。このやうな性格によつて彼は新しい世界に稀れな指導者となつたのである。

コルテスは司令官となつた時にはまだ三十三歳であつた。彼自身も艦隊建造の一部を負擔して總督を喜ばせた。出來上つた艦隊は十一隻より成り、主席パイロットは依然アラミノスであつた。兵隊はスペイン兵四百、土人兵二百であるが、スペイン兵のうちで小銃狙撃兵は僅かに十三人、弩狙撃（いしゆみ）兵さへも三十二人に過ぎなかつた。ほかに騎兵十六人、重青銅砲十門、輕蛇砲（長砲）四門。これが一つの强大な國家を襲撃しようとする軍隊の全武力なのである。

出發前に、ベラスケスは氣が變つてコルテスの司令官任命を取消さうとしたが、コルテスは先手を打つてキュバ島西端の集合地から出發してしまつた。一五一九年二月十八日であつた。彼はユカタン半島を廻つてタバスコ河まで行つたが、河口が淺いため大きい船を乘り入れることが出來ず、小さいブリガンティンと武裝したボートのみを以てコルテス自らタバスコの町へ遡江を試みた。さうして土人に平和の意圖を宣明したのであるが、土人はたゞ鬨の聲をもつてこれに答へた。そこでコルテスは敵前上陸を强行し、大砲と騎兵隊といふ土人の思ひもかけぬ武力を以て、四萬（とコルテスは稱する）の土人兵を潰亂せしめたのである。土人の戰死者は二百二十名であつた。翌日酋長らは降服し、種々の贈物と共に二十人の女を獻じたが、その内の一人、後にドンナ・マリナと呼ばれたメキシコ生れの女は、この後の征服事業に重大な役目をつとめた。

次で四月にコルテスはベラ・クルスに到つて全軍を上陸せしめた。二日ほどするとアステークの知事が彼を訪ねて來た。コルテスは自分が海の彼方の强力な君主からこの國の君主へ送られた使者であること、贈物を奉呈し使命を傳達するため國内の行軍を許されたきことを申入れた。知事は、それを王に報告するため、この海から出て來た白人らを繪にかかせた。コルテスはこの報告繪を效果あらしめるために大砲と騎兵とで演習をして見せたといふ。その後彼は砂丘のうしろに陣地を築き、王からの返事を待つた。

コルテスが初めてメシコ（メキシコ）の名を聞いたのは、三月末タバスコ征服の際であるが、四月末には右の如く既に國都への進軍を申込んでゐる。これはメキシコ王國の事情を研究した上でのこととは思へない。タバスコでの戰鬪は彼に自信を與へたではあらうが、しかしそれにしても彼の軍隊は微々たるものである。こゝに我々は當時の『征服者』の冒險的な性格をはつきりと看取し得るであらう。彼の成功は、偶然にも彼がうまい時機に乘り込んで來たことに起因する。と共に彼の偉さは、この偶然の事情を直ちに看破し、それを巧みに利用したところにある。

では當時のメキシコの國情はどういふ風であつたか。

メキシコ王國の中心地はアナワクの高原で、海拔二千米位、首府メキシコのある谷は二千二百米に達する。メキシコ灣沿ひの低地との間には山脈が連なり、その中には五千米を超える高山もある。從つて海岸との交通は峻險な山道によるほかはない。この山脈は西に走つて高原の南を限り、メキシコ市の附近では五千四百米のポポカテペトル、五千二百米のイシュタッチワトルとなつて、メキシコの湖と共に美しい景觀を作り出してゐた。

このメキシコの谷の北方百キロほどの所にトゥラといふ町がある。こゝへ何處からかトルテーク族が移り住み、こゝを首府として、七世紀の頃に、强大な王國を築いたと云はれる。實は神話的な民族に過ぎぬのかも知れず、或はまた小さい部族であつたのかも知れぬ。がとにかく、たうもろこし・木綿・たうがらしなどの栽培や、貴金屬の細工や、壯大な石造建築など、メキシコ特有の文化はこの民族に歸せられてゐる。スペイン人侵入當時のメキシコ土人にとつては、トルテーク族の統治の時代が過去の黃金時代として記憶せられてゐたのである。恐らくこの族は南方に移つてユカタンやホンデュラスの地方にその文化を傳へたのであらう。

トルテーク族を征服或は追放したのは、十一・二世紀の頃に北西の方より侵入したチチメーク族であつた。この族はメキシコの湖の東側にテックコの町を築いてアナワク高原を支配した。この

頃からメキシコの平和な統治が失はれて武力による強壓的な統治が始まつたらしい。その統治は間もなく好戰的なテパネーク族の攻擊によつて覆へされたが、チチメーク族はアステーク族の援助によつてそれを回復することが出來た。そのアステーク族も外から入り込んで來た部族であるが、湖の中の小島にテノチティトラン（メキシコ）の町を築いて頭角を現はし始めたのは、十四世紀の初頃であらうと云はれてゐる。

やがてアステーク族は右のチチメーク族を征服して王國を建てるに至つた。それはスペイン人の到來より一世紀とは距つてゐない一四三一年のことである。その後アステーク族は急激に勢力を增大し、附近の諸部族を武力によつて征服しつゝ、東は大西洋に、西は太平洋にまでその領土を擴張したのであつた。元來は貴族政治の行はれてゐたこの國土に、殆んど絕對的な王權を確立したのは、このアステーク族の仕事だと云はれてゐる。卽ち十一二世紀にチチメーク族によつて開始された武力統治の運動がこゝにその絕頂に達したのである。數多くの封建貴族は宮廷に於て直接にこの君主に奉仕した。しかしアステーク族の專制君主制は成立後まだ日が淺いのであるから、それを支へるためには依然として武力による强壓が必要であつた。さうしてこの强壓の下に統一にもたらされてゐる諸部族は、未だ緊密な團結を形成するに至つてゐなかつた。こゝにこの國家の脆弱點があつたのである。スペイン人を極度に憤激せしめた血腥い人身犧牲の風習も、右の如きアステーク族の恐怖政治より出たものと見られてゐる。アステーク族はその偶像の祭壇に捧げるために、メキシコ灣より太平洋に至る間の被征服諸部族から無數の人命を徵發した。それは毎年二萬に上つたとさへ云はれる。犧牲者の頭蓋骨はピラミッドのやうに積み上げてあるが、コルテスの從者の一人はたゞ一つの箇所で十三萬六千の頭蓋骨を數へたさうである。被征服諸部族がこの恐怖政治からの解放を熱望してゐたのも當然のことと云はなくてはならぬ。

この解放の熱望を反映してゐたのが、武力政治以前のトルテーク族を記念するケツァルコアトゥルの神の崇拜である。元來メキシコには二千に上る地方神が祀られてゐるが、アステーク族の民族神として最も多く人身犧牲を要求してゐるのは、ウィツィロポチトリの神であつた。これはアステーク族をアナワク高原へ導いて來た祖先が神化されたものだと云はれてゐる。然るにケツァルコアトゥルは、もとトルテーク族の祭司でありまた宗教改革家であつたと云はれる。彼は人身犧牲を廢止しようとしたために、この國土から追はれ、東の海岸から姿を隱したと信ぜられてゐるのである。後に彼は空の神として、この民族に農耕及び金細工の技術を敎へた惠みの神として、崇敬された。この神は丈高く、色白く、波うつ髯のある姿に於て表象されてゐる。東の海岸

から姿を隱す時には、蛇の皮で作つた魔法の舟に乘り、やがて何時かは歸つて來てこの國を取り返すであらうと聲明した。で全民衆は、この神が今に歸つて來るだらうと信じてゐた。そこへ色の白いスペイン人が東の海のあなたから現はれて來たのである。壓抑されてゐる人々は、ケツァルコアトゥルの豫言が實現されたと信じた。否、王さへも、さう信じたのであつた。

かういふ國情のところへコルテスが乘り込んだのであつて見れば、彼の一擊がこの王國の紐帶をほごして了つたのは、極めて當然のことと云はねばならぬ。メキシコの文化自體は、數百人のスペイン兵と十數門の大砲とに一つの王國の蹂躙を許すほど無力なものでもなかつたのである。

トルテークの文化を繼承し發展せしめた當時のメキシコに於ては、農耕は高度に榮えてゐた。たうもろこし、木綿、たうがらしのほかに、蘆薈（マグアイ）、カカオ、ヴァニラなども取れる。蘆薈の葉の纖維は紙に、汁は酒にするのである。カカオの豆は小貨幣として通用し、チョコラトゥルにする。果物で最も愛用されるのはバナナである。煙草はパイプ又は葉卷で用ゐてゐる。採鑛も盛んであるが、鐵はまだ知られてゐない。刄物には黑曜石の鋭い破片を使ふ。陶器は廣く用ゐられてゐるが、杯は木製である。木綿の織物は非常に巧みで、刺繍も行はれてゐる。市場は定期的に町で開かれ、極めて活潑である。道路網は驛亭と共に全國に行き亙つてゐる。政府の命令は飛脚が送達する。軍隊の組織は、八千人を以て師團、三四百人を以て戰鬪隊とする。軍服は飛道具を防ぐやうに厚い木綿の布で出來て居り、指揮官は金や銀の甲冑をつける。武器は・劔・槍・棍棒・弓矢・投石器などである。學問は祭司の手中にあるが、中で珍らしいのは、二十日を以て一ケ月、十八月と年末無名日五日とを以て一年とする太陽曆である。それによつて祭日や犧牲日が規制せられてゐる。象形文字は龍舌蘭の纖維から成る紙、木綿の布、精製された皮などの上に彩色を以て描かれる。同じやり方で王國全體や各州や海岸などの地圖も出來てゐた。

これは一つの繩まつた、獨自の文化である。が同時に極めて閉鎖的な文化である。メキシコ人の眼は同じアメリカの地の他の文化圏へは屆かず、況んや大洋のあなたの國土を探求する欲求の如きは毛程もなかつた。この閉鎖性もまた一つの弱點として、前揭の弱點に油をそゝぐ役目をつとめたのである。

スペイン人到來當時の王はモンテスーマと呼ばれ、一五〇二年に卽位した。アステーク族の王の常として、領土及び祀りの擴大に執心し、グワテマラやホンデュラス、恐らくはニカラグワへさへも、遠征を試みた。しかもメキシコの直ぐ東に山を距てて隣合つてゐるトゥラスカラは、赤

だ王には服屬してゐなかつたのである。かういふことも國家の統一を不完全にする有力な原因となつてゐたであらう。さういふ不完全さの現はれとして、王は常に周圍に對する猜疑心になやまされてゐた。臣下が彼の眼を盜んで惡政を行つてゐはしないかと、夜毎に變裝して巷に出で民の聲を聞いたといふ如きがその一例である。王位の覬覦を怖れて血緣者を除いたといふ如きも他の一例である。それに加へて一五一六年にはチチメーク族の首府であつたテツクコの君主が死に、その繼承の爭に王が一方に味方して他方を敵にした。かくの如く王は、大仕掛な遠征の事業にもかゝはらず、身近に多くの敵を持つてゐたのである。

この情勢の中へスペイン人上陸の報が屆いた。人々の頭に先づ浮んだのはケツァルコアトゥル再來の傳說である。海から出て來たこの色の白い人々は、追はれた神の後裔に相違ない。本山たる神殿の塔が燒けた。東に不思議な光が現はれた。三つの彗星が空に見える。これらは皆あの豫言が充たされる前兆である。さう人々は考へた。王は評議會を開いたが、そこでは開戰論と平和論とが對立したので、王はおのが獨立の意見を示さうとして、その中道を選んだ。卽ち、コルテスに豐富な贈物をして、首府へ來ることはどうか思ひ止まつてくれと賴んだのである。その贈物は、車の輪ほどの金と銀の圓盤（これは日月を表徵する）、鑛山から出たまゝの純金の粒を盛つた兜、その他多數の金細工の鳥獸、裝飾品などであつた。これらを土產として鄕里へ歸つてくれといふわけである。

しかしこの豐富な贈物はスペイン人を一層刺戟した。コルテスは、王に面談するやう命令を受けて來てゐる、と答へた。すると二度目の使が新しい贈物を持つて現はれ、前と同じ賴みをくり返した。コルテスは聽かなかつた。宮廷との關係は惡化した。土人はスペイン人の陣營を遠ざかり、食糧をも寄越さなくなつた。コルテスは當然窮境に陷つたわけであるが、その時彼の眼の前に現はれて來たのがこの王國の脆弱點なのである。

コルテスの上陸したベラ・クルスの北方海岸にトトマーク族が住んでゐた。これは肉體的にも言語的にもアステーク族と異つた部族であるが、最近にモンテスーマに征服されたのであつた。そのトトマーク族がコルテスをその町に招待したのである。この事件によつてコルテスはメキシコ王國の中に味方につけ得る分子のあることを悟つた。さうしてそれによつて彼のメキシコ王國征服の方策が立てられ得たのである。

そこで彼は先づその上陸地點にスペイン式の町を形式上建設した。ベラ・クルスの名はこの時

につけられたのである。卽ちそれはスペイン人の目標である黃金とキリスト敎とを結びつけて、Villa rica de la vera cruz（まことの十字架の富める町）と呼ばれたのであつた。コルテスの腹心のものたちがこの新しい町の市會を構成する。その市會に於てコルテスはベラスケスから任命された職を辭する。市會は直ちにスペイン王の名に於て彼を最高司令官・裁判官に任命する。このお芝居によつてベラ・クルスの町は國王直轄となり、キュバ總督から獨立したのである。それを不愉快とした總督派は反抗を企てたが、直ちに彈壓された。

次でコルテスはトトマーク族の町に行き、盛大な歡迎を受けてこの町をスペイン領とする。神殿の代りにキリストの祭壇が築かれ、住民は洗禮を受ける。住民は僅か二三萬であつたが、しかしこの事件の意義は非常に大きいのである。コルテスはこの町で、トトマーク族と同じやうにアステーク族に對抗して未だなほ征服されてゐないトゥラスカラ國のことを、詳しく聞いたのであつた。さうしてトトマーク族に於て起つたことはトゥラスカラ國に於ても起り得るとの確信を得たのであつた。

コルテスはアナワク高原へ侵入する前に、所謂背水の陣をしいた。先づ彼は兵士たちの同意を得て、それまでに獲得された黃金や裝飾品を悉くスペイン王に送ることにする。次で市會は兵士たちに對してコルテスを最高司令官として確認するやうに懇請する。そこで總督派の軍人たちは祕かにキュバに歸ることを企てたが、發覺して首謀者は死刑に處せられた。コルテスはこの種の憂を根絶するために、一隻の小さい船を殘してあとの全艦隊を海岸に乘り上げしめた。これは隊員全部の同意の下に公然なされたことであるといふ。もはや退路はない。前進あるのみである。

ベラ・クルスには兵百五十名騎士二名が守備隊として殘つた。遠征隊はスペイン兵三百、トトマーク兵千三百、人夫千、騎士十五名、砲七門を以て組織された。出發したのはこの地に到着後四ケ月の八月十六日である。熱帶の低地から急に涼しくなる山脈を超えて五日間でアナワク高原へ出た。住民は穩かであつたが、コルテスは戰鬪隊形を以てトゥラスカラの方へ進んだ。この部族は十二世紀にこの土地に入り込み、幾度かの戰を經てこゝに定住したのであるが、王を頂かず四人の君主が共同に治める一種の聯邦を形成してゐた。アステーク族には烈しく抵抗して、未だ屈服してゐないのである。新來のスペイン軍に對しても烈しく抵抗した。その兵は十萬であつたと云はれてゐる。がコルテスは遂に大砲を以て決戰に勝つた。九月五日である。コルテスは友交を申入れ、トゥラスカラ國はそれを受諾した。この外人たちはモンテスーマの敵なのである、といふトトマーク人の說明が、非常によく利いた。モンテスーマを敵とするが故に、トゥラスカラ

國はコルテスと結んだのである。この時コルテスのメキシコ征服は既に成つたと云つてよい。

モンテスーマは、その大兵力を以てしても容易に屈服せしめることの出來なかつたトゥラスカラが、極めて脆く白人に敗れたと聞いて、この白人こそ久しく待望されてゐたケツァルコアトゥルの裔であらうといふ信仰を一層强めた。でまた彼は贈物を持つた使者を寄越して、メキシコ國の首府に進軍することは危い冒險であるといふことを說かせた。のみならずスペイン王への貢を申出で、金銀寶石彩布などの分量をコルテスの思ひ通りにきめてくれと賴んだといふ。しかしコルテスは頑として最初の聲明を飜へさなかつた。

コルテスの軍隊がトゥラスカラの町に入つたのは九月廿三日であつた。グラナダよりも大きいこの町の大勢の見物の前で日々にミサが行はれた。君主の娘をはじめ多くの貴族の娘が洗禮を受けてスペインの將校と婚姻を結んだ。かくてこの町で三週間の休養を取つてゐる間に、コルテスはメキシコの國情や戰力を詳しく研究した。モンテスーマに掠奪され壓制せられてゐる諸部族のメキシコ人に對する憎惡、權力を以て徵募せられた軍隊の奮はざる士氣、などが一層明かとなつた。僅か三百のスペイン兵を以てこの强大な武力統治國の首府へ乘り込んで行かうとするコルテスの大膽極まる離れ業の背後には、十分に冷靜な觀察や考量が存したのであつた。

コルテスは六千のトゥラスカラ兵を加へてメキシコへの進軍を開始した。その途上チョルラの町が先づ占領せられた。この町はケツァルコアトゥルが海岸へ移る途上二十年間留まつたところで、この神のために、全高一七七呎の段々の上に壯大な神殿が建てられ、その中に巨大な神像が祀られてゐた。これは人身犧牲を欲せざる神であるが、しかしこの町に人身犧牲の風習がなかつたといふのではない。神殿の他に四百の犧牲塔があつた。犧牲となるべき男子や子供は檻の中に充滿してゐた。スペイン人は先づこれらの囚人を解放し、ついで陰謀の計畫を見出したためにトゥラスカラの軍隊に掠奪・殺戮を行はしめた。大神殿も破壞燒却された。この先例を見て近隣の町々は急いで降服するに至つたのであつた。

この町からメキシコへの道は二つの高山の間を通ずるのであるが、その峠の上から見晴らしたメキシコの谷の風景は非常に美しかつた。永久に雪を頂いてゐる山々の裾に、長さは十四五里、幅は七八里に達する湖水が横はり、それに沿うて數々の町や村がある。首府メキシコは湖中の島にあつて、三方から堤道が通じてゐる。當時は戶數六萬、人口三十萬以上の大都市で、サラマンカの町位の廣さの大市場がいくつもあつた。一一四段の階段で昇つて行く高い壇の上に建てられた犧牲神殿は、家々の上に高く聳え立ち、四十の石造の塔に圍まれてゐた。やがて山を降りて湖

水の側に出ると、水上に浮んで見えるこれらの塔や神殿や家々が、まるで夢幻境の風物のやうにスペイン人らの心を蕩かした。湖水の側で宿營した宮殿は、美しく削つた四角な石や、杉や、その他の香木で建てられ、どの室にも木綿の壁掛がかゝつてゐて、この國土の富と力とが如何に大きいかを示すやうに見えた。

かくしてコルテスの軍隊が遂にメキシコの町に乘り込んだのは、一五一九年の十一月八日である。堤道は八歩の廣さであつたが、見物人の往來で通行困難を感じた。塔や神殿も悉く見物人に覆はれ、湖にも一面に見物人の舟が群つた。それも道理で、彼らは白人や馬を曾て見たことがないのであつた。ところでこの無數の人の群の中を通つ行くスペイン人はと云へば、僅か三百の小部隊なのである。「これほど大膽な冒險を企てた人々が曾てあつたらうか」とベルナール・ディアスが記してゐるのも無理はない。

町の大通りではメキシコ王が、貴族たちのかつぐ玉座に坐し二百人の華やかな從者を從へて迎へに出た。スペイン人が近づくと王は玉座を降り、擴げられた敷物の上を歩いて來た。豐かな彩衣をつけ、綠色の羽飾りの冠を頂き、足には寶石を鏤めた黃金の履をはいてゐた。看衆は王を直視することは許されない。すべての人は恭しく眼を伏せた。コルテスは馬を降りて王に近づき、贈物としてガラス玉の鎖を王の頸にかけた。彼は更に王を抱擁しようとさへしたのであるが、それは神聖を瀆すものとして側近の貴族に遮られた。王はコルテスへの豐かな贈物を殘して從者と共に引上げて行つた。

スペインの軍隊は樂を奏し旗を飜しつゝ入城した。六千のトゥラスカラ兵もそれに續いた。町の中央の廣い市場に面して戰神の高い殿堂と廣大な舊王宮があつたが、この後者を王は新來の客の宿舍に宛てたのである。こゝでも好い室には彩布の壁掛があり床の敷物があつた。コルテスはこの頑丈な建物の要所々々を固め、入口に大砲を据ゑた。夜になると王が訪ねて來て、ケツァルコアトゥルの傳說を詳しく物語り、これまでスペイン國やその王について聞いたところから判斷すると、この王こそメキシコの正當な君主であると確信すると述べた。從つてコルテスはメキシコ王及びメキシコ國を自由に處理してよいのである。メキシコ國の降服は一日にして片附いたのであつた。

しかしコルテスにとつては王の降服のみでは十分でなかつた。翌日彼は四人の隊長を從へて王をその石造の宮殿に訪ね、顏が映るほどに好く磨いた大理石や碧玉や斑岩の壁の室、或は花鳥を繡(ぬひとり)した高價な織物のかゝつてゐる室で、王と會談したのであるが、その時コルテスは、モンテ

スーマをキリスト教に改宗せしめよとの王命を受けてゐると宣明し、教義の議論を始めたのである。しかし曾て最高の司祭の職にあつたメキシコ王はこの議論を避けた。さうしてたゞスペイン王に臣事し貢を上る用意があることをのみ繰返した。卽ち遠征の眞の目的として標榜せられてゐる點は未だ達せられてゐないのである。

一週間後にコルテスは王を捕虜としようと決心した。口實はベラ・クルスの守備隊が附近の酋長に襲擊された事であつた。コルテスは王宮に赴いて王がこの襲擊を使嗾したのであらうと抗議し、酋長の處罰を要求した。王は同意して酋長の召喚を命じた。しかしコルテスはそれだけに滿足せず、事件解決まで王が舊王宮に住むべきことをも要求した。王は息子と娘とを人質に出さうと提議したが、コルテスは王自身のみがスペイン人の安全を保證し得ると主張して讓らなかつた。遂に部下は辛抱し切れず、同意せねば殺さうといふ恐嚇の言を吐いた。王はこの氣勢に驚いて同意し舊王宮に移つた。民衆には王の發意であると發表した。スペイン人も王を鄭重に取扱ひ、王としての日常のやり方は元のまゝに續けさせた。從つて表面上何の變化もない如く見えたが、しかし王自身は深い苦痛を感じてゐたのである。

やがて問題の酋長は息子と十五人の部下をつれて首府に現はれ、コルテスに引渡された。彼らはモンテスーマに使嗾されたことを自白し王宮前の廣場で火炙りの刑に處せられた。王は使嗾者としてこの處刑の行はれる間鎖につながれたが、そこから解放されても、もうおのれの王宮に歸らうとはしなかつた。彼の人民の痛憤、外敵に對する蜂起を、制止し得る自信はもう彼にはなかつた。彼はスペイン人の保護の下に留まることを選んだ。幾人かの王族貴族はこの屈辱に堪へ兼ねて兵を起さうとしたが、すべて失敗に歸した。王は酋長たち貴族たちの集會に於てスペイン王への忠誠を誓ひ、ケツァルコアトゥルの豫言が今や實現されたのであると語つた。「これからはお前たちの本來の主君としてカルロス大王に、またその代理者たる將軍に、服從せよ。お前たちが余に拂つた租稅はこの主君に拂ひ、余に仕へた如くこの主君に仕へよ。」かく王は涙と嘆息の内に語を結んだ。コルテスは公證人に降服文書を起草させ、雙方それに署名した。

スペイン人は土人の官吏を從へて國中をめぐり、租稅の徵集、スペイン王への貢物の受納を行つた。モンテスーマも私財の中から數知れぬ金銀細工を提供した。かくして多量の「黃金」がコルテスの手に歸した。たゞ一度の强壓手段で全國が平和の内にスペイン人の支配に移り行くかのやうに見えた。然るにそれを中斷したのは、スペイン人の側に起つた内訌と、それに刺戟されて起つたメキシコ人の反抗とである。

内訌は、キュバ總督ベラスケスが已れに叛いたコルテスを制壓しようとしたことによつて起つた。總督はコルテスの不埒を本國に訴へ、コルテスを捕縛すべき遠征隊を送つた。八十の銃兵、百二十の弩兵、八十の騎兵、十七八門の大砲等を含んだ八百名の軍隊、十八隻の船隊であるから、コルテスの遠征隊よりは遙かに有力である。ハイチの副王はキュバ總督のこの擧を阻止しようとしたが、駄目であつた。で副王はコルテスに味方して、總督及び遠征隊長の罪を本國に訴へるに至つたのである。

遠征隊は一五二〇年四月廿三日にベラ・クルスに着き、上陸して、コルテスの守備隊に降服を要求した。守備隊長はこの使者たちを直接コルテスの許へ送つたが、コルテスは彼らを優遇しメキシコの事情を説明して自分の味方につけてしまつた。新來の遠征隊全體を味方につける望みもないではなかつた。たゞ問題は隊長だけであつた。でコルテスは隊長に和解を申込み、將校たちに多量の金を贈ると共に、七十名の部下と二千名の土人兵を率ゐて急遽山を下つて行つた。途中探檢から引上げて來た部下や海岸の守備隊を合してスペイン兵二百六十名となつた。その手勢を以て聖靈降臨節の前夜に新來遠征隊の宿舍を奇襲し、隊長を捕へたのである。その部下はコルテスに忠誠を誓つた。從つて結果としてはコルテスは增援軍を得たと同じことになつたのである。

がその留守の間にメキシコに於て事が起つたのであつた。殘された守備隊は百四十名であつたが、大きい犧牲祭の日に、王を奪還する企てを恐れて、群集を攻擊し、血を流したのである。その結果全市は蜂起して舊王宮の守備隊を猛烈に攻擊した。コルテスは全兵力をあげて救援に赴き、夏至の日に歸着した。その勢力は騎士九十、銃兵八十、弩兵八十を含めて千三百であつた。しかしそれ位では防ぎ切れなかつた。大砲で次々と打ち拂つても、メキシコ兵は反つて增大してくる。コルテスは遂に退却を決意し、王を利用して退路を作らうと試みた。王は盛裝して塔の段に現はれた。民衆は鎭まつた。王は聲高く、「自分は捕虜ではない、スペイン人は退去を欲してゐる」と云つた。しかし民衆はこの言葉を怯懦のしるしとして受取り、王に呼びかけた、「王のいとこ、イスタッラパンの君公を王位に卽けよ、スペイン人を塵殺するまで武器を措かぬと誓へ。」この言葉と共に霰のやうに石と箭が飛んで來た。楯で覆ふ前に王は多くの傷を受け、頭に當つた投石のために氣絕した。この屈辱はモンテスーマの心魂にこたへ、覺醒後にも一切の手當を拒んで、一五二〇年六月三十日に歿した。

王の死と共に攻擊は狂暴を增した。堤道の橋も悉く取り除かれた。食糧もつきた。翌七月一日の夜コルテスは、運搬の出來る橋を使つて退却に取りかゝつた。陸からも湖上の無數の小舟から

も石と箭が飛んで來た。恐ろしい苦戰であつた。コルテスと共に町に入つた千三百の兵のうち、逃れ得たのは四百四十名で、それも悉く負傷してゐた。大砲彈藥は悉く失はれ、馬も四十六頭斃れた。それでもコルテスは敗殘の兵を率ゐて退却を續け、湖水の西側を北に廻つて七月七日には古都テオティワカン（神々の住居）に着いた。が最大の危機はなほその後に控へてゐた。古都東方のオトゥンバ平野で、この敗殘の部隊は二十萬と號するメキシコ軍に包圍されたのである。そこには絶望的な混戰があつた。コルテス自身も投石によつて頭部に負傷した。が彼はこの亂軍のなかで數騎と共に敵將に向つて殺到し、これを倒して旗を奪つた。それによつてメキシコの大軍は崩れたのである。かくてコルテスは辛うじてトゥラスカラまで引上げ、傷の療養に努めたが、部下の士氣は沮喪し、トゥラスカラ人の間にも動搖が起らぬではなかつた。それを持ちこたへたコルテスの氣魄は相當のものと云はなくてはならない。

一度降服したメキシコ國は、更に改めて武力を以て征服せられなくてはならなくなつた。敗殘のコルテスがかゝる攻擊力を回復した道は、メキシコ人よりも優れた智力と技術なのである。傷病が癒えると共にコルテスの踏み出した第一歩は、トゥラスカラ人の助けを借りてその東南方の地方を征服することであつた。それによつて彼はこの際不可缺なトゥラスカラ人の信望をつないだのである。第二歩はキュバ總督が何も知らずに送つて來た援軍を味方につけることであつた。それによつて彼の勢力は最初アナワク高原へ乘り込んだ時よりは強くなつて來た。そこでメキシコに對する攻擊の方法として彼の考へ出したのが、船による湖上の支配である。ヨーロッパの造船や操縱の技術によつてアステークの戰舟を壓倒すれば、湖中のメキシコを孤立させることが出來る。かく考へて彼は幾隻かのブリガンティンを造らしめた。索具や鐵はベラ・クルスから持つてくる。船體はトゥラスカラで工作して湖へ持つて行つて組み立てる。これは太平洋を發見したバルボアがその征服のために最初に着手したと同じやり方なのである。

一五二〇年十二月中旬、コルテスは歩兵五百五十、騎兵四十、大砲八・九門を以てテペアカを出發し、北方の山路を經てテツクコに進出した。さうして新造の十三隻の船が湖水へ進水出來るやうに、町から湖までの半レガの堀を十二呎の深さに掘り下げ始めた。他方では湖岸偵察のために遠征を試み、沿岸の町々を征服した。その内ハイチから歩兵二百、騎兵七八十の援軍がくる。コルテスは大膽にも湖水南端のホチミルコの町を襲ひ、危ふく捕虜となりかけるやうな冒險をやつた。かういふ强氣のやり方は、反對なしに行はれたのではない。總督派はまた謀叛をたくらんだ。しかしコルテスは首謀者一人を死刑に處したのみで、一味の者を追窮しなかつた。

一五二一年四月二十八日遂に堀は完成し、船が進水した。一隻に砲一門・兵二十五名である。このヨーロッパ風の軍艦十三隻の出現はメキシコの町の死命を制した。何故なら、これによつて、數千の戰舟に取卷かれた堤道を進出するといふ困難が取除かれたからである。戰舟隊との最初の戰鬪は豫期以上にうまく行つた。五百艘の戰舟が偵察にやつて來た時、コルテスは初め引き寄せて置いて大砲を打ちかけ、船の操縱の巧みさで一擧に勝を占めるつもりであつたが、突然陸の方から追風が起つたので、早速ブリガンティンをして滿帆を張つて敵舟隊に突進せしめ、メキシコの町へまでも追擊せよと命じたのである。無數の戰舟は突き沈められ、乘員は溺れた。追擊三哩に及び敵の舟隊は覆滅した。この一擧を以てコルテスは湖上の支配權を握つたのである。あとはこの軍艦に掩護されつゝメキシコの町への堤道を徐々に追ひ詰めて行けばよかつた。水道を絶ち糧道を絶たれた湖中の町が、いつまでも包圍に堪へる筈はないからである。

この理詰めの攻擊に對してアステーク族はいかに抵抗したか。先王モンテスーマは運命を諦觀して抵抗しなかつたが、しかしそれはアステータ族の戰鬪的性格を現はしたものではなかつた。モンテスーマの歿後そのあとを嗣いだ弟は四ケ月にして歿し、この當時は甥に當る二十五歳のカウーテモ（或はガテモ）が王位に卽いてゐたが、この王の下にアステーク族は實にがむしやらに死鬪を續けたのである。彼らは湖中の堤道を絶ち切つてスペイン軍の進出を防いだ。一つの箇所が埋めつくされると背後に新しく堀を掘つて闘を作り頑强に抵抗した。陸にも水面にも荒々しい雄叫びが響きつゞけた。從つて死を辭せざる勇氣といふ一點に於てはメキシコ人は決してスペイン人に劣つてはゐなかつたのである。しかし智力と技術とが優劣を分つた。スペイン人は遂に町に達した。通りに造られた堡壘を大砲で打ち破り、それを越えて大神殿にまで進出し、再建された偶像を破壞した。この形勢を見てテツクコの君公は五萬の兵を率ゐて降服し、他の町々もこれに倣つたが、しかしメキシコ人は屈しなかつた。毎日々々攻擊は繰返され、家は燒かれ、饑餓は迫つたが、しかし彼らはあらゆる平和條件を斥けた。このやうな頑强な抵抗が三週間續いた後、コルテスは遂に總攻擊を決行したが、混戰の最中コルテス自身は危ふく捕虜にされさうになり、若い士官の身代りによつて漸く助かつた。スペイン兵の戰死四十、捕虜にされたもの六十二、ほかに同盟軍の損害多數であつた。夜になると戰の神の殿堂の大太鼓が轟き、長い戰士の列が階段を昇つて行つた。さうして捕虜となつたスペイン兵たちに羽飾りをつけ、偶像の前で舞踏をさせ、彼らを犧牲臺に横へて胸を剖き生きた心臟を取り出して神に捧げた。それがコルテスの陣から見えたのである。この凶暴な敵に對して包圍軍も凶暴となつた。八日間休養した後に再び總攻擊が